
サヨナラWORLD

renrenren

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サヨナラWORLD

【Nコード】

N4769W

【作者名】

renrenren

【あらすじ】

——それは不思議な世界の物語。

気付いた時にはそこにいて、気付いた時にはもう戻れずに。ありえない事が容易に起きて、ありえる事が起きない場所。常識が通用せず、非常識が跋扈する。見た事もない物、聞いた事もない事、そして、飛び交う魔術。才ある物は教育機関にて戦を学び、人に仇なす魔のモノを、時には同族を葬ろう。そんなところに放り出された俺達。ここで生きていかなければいけないこの状況。

……正直、ワクワクしませんか？

※みんな大好き作者も大好き『剣と魔法の異世界召喚物』であります。

この作品が対象としているのは『もうこんなのはありふれ過ぎてんだよコノヤロウでも読んじやうっビクビクッ』という紳士淑女の人々です。

勿論それ以外の方も大歓迎ですので、是非この作品で『暇』という名の敵を共に討伐していただけたら幸いです。

物事の 始めはいつも 唐突で

それは穏やかな、季節は春と夏の間少し春気味の割と過ごしやすい日だった。夕日によってオレンジ色に染まる見慣れた風景の中、風が初夏の熱を先走り気味に運んできている。辺りからはどこか近くの家で育てられているらしい花の匂いが漂い、いつもはなんとも思わないただの電信柱や古びた掲示板さえも、こういった日であれば見方によっては何か一枚の絵のようにも見えてくるから不思議だ。この不思議を説明してくれた人にはノーベル賞を与えるべきだと思う。

「いやー今日は疲れたなあ」

俺が学校から駅までの短いようで長い、でも冷静に考えてみればやっぱり短い帰り道を歩きながら、溜息混じりにそうつぶやいてもしようがないと思う。

なんせ今日の時間割には体育が三回もあったからね。一日6時間（もしくは5時間または7時間）の授業で構成されるうちの学校生活において、なんとその半分もの時間俺は外にいたわけだ。

とはいってもその理由は至極単純なもので、大体の奴は同じ理由で似たような苦しみを味わった事があるんじゃないだろうか。

どうということかというとな、まず普通の授業として体育が一時間、次に体育を選んでしまった選択科目の分が一時間、そして先日まで続いていた大雨のせいで多くのクラスの体育が流れてしまい、結果として必要日数が足りなくなってしまったので他の授業を潰してまで組み込まれた体育が一時間分、だ。

俺も昨日のホームルームで数学がなくなると聞いた時はめっちゃ喜

んだけどさ、三時間もサッカーをやりつづけた後の身で考えてみれば、そのまま数学だったほうが良かったかもしれない。別に寝てればよかったんだし。

でもまあ……そもその問題は俺が体育を選択してしまったことにあるんじゃないだろうか。選択授業のアンケートをとる時間の直前まで爆睡していて、眠気を覚ます前に適当に記入して提出したことが今になって非常に悔やまれる。

あの時の俺バカッ！！一回死んで生き返ってまた死んで生き返れ！！フェニックスのように！！

「そっかなあ。わたしは英語があった昨日に比べたら全然楽だったよ」

『それに美術が二時間もあつたし！』と俺の独り言のような言葉に律儀に返答してくれた右側を歩く女生徒は【日向あすか^{ひなた}】と言うどっちが名前なのかよくわからないヤツで、肩書きは俺のクラスメイト兼友達¹だ。日向は中学生の頃から使いつづけている茶色いカバンを右手に持ってにこやかにそう言った。

実はこの日向、ありえないほど身長が低く、背丈だけで言えばとてもじゃないけど高校生には見えない。身長170？前後しかない俺が見下ろすような身長なんだから、140〜150cmちょっとじゃないかと思う。だから日向が歩くときはどうしても『ピヨピヨコ』という擬音を使いたくなってしまふのは俺だけじゃないはずだ。

また日向は生来髪の色素が薄いらしく、肩にかかる程度の髪はなんとも綺麗な栗色だ。その色と髪型は日向の明るい性格にとってもマッチしていると思う。クリクリした目や、感情が表に出やすい（と言うかわかりやすい）所、そして赤ちゃんのようにプニプニしてそうな頬も、なかなか日向以外の人間には見ることが出来ない。つまりところ、この日向あすかという少女は顔及び性格がいいわけ

だ。

しかし、この女子高生（小学生風味）の容姿を語るにおいて、これ以外にもとてつもなく重要な事がある。

なんとコイツ、とんでもなく胸がでかい。

そこを除けばイメージ的には『可愛い』という言葉を体現したような感じだ。そこがあるからなんともグラマラスな感じになっちゃっている。なんだろう、トランジスタグラマーってやつ？

快活で人懐っこくて無邪気というこいつの精神年齢、それは俺的に『いったい何歳だ』と突っ込みたくなるんだけど、他の男共に言わせると『なんかこう、守ってあげたくなるタイプ』らしい。

俺に言わせれば『守ってあげたい』というより『軽くいじめたくなる』ってのが本音なんだけど。

とまあ身長・性格共に小学生でも通用するこのちびっこはさっきも言ったように胸がでかい。おそらく見た目だけなら完全に子供料金で電車乗れるのにこの胸のせいでそれが不可能になってる。

どれくらいの大きさかと言われても正確なカップ数なんて聞いたこと無いし、そもそもカップの定義が男の俺には良くわからない。しかしただひとつ、うちの学校で見かける女（デブを除く）の誰よりも大きいのではないかとだけ言っておこう。

この際、何故その身長でその胸なのかという疑問は必要ないね。

大切なのは今、日向がわざと少し速めに歩く俺に合わせようとして歩行速度を早めると、ヤツの対思春期男子専用最終兵器が揺れているということさ。いや、実際に揺れているわけじゃないけど、俺は今その光景を幻視しているんだ。

しかしあまりに露骨に見すぎてしまった結果、日向にそれがバレて

嫌われるということだけは避けなければならない。友達から嫌われたくはないのだ。

「そりやお前は体育が二時間しかなかったんだからまだ楽だろうよ。けどさ、それを三時間もやらされる俺の身にもなってみろっての」

それに体育の時間が3，4時間目と6時間目に分かれていたので昼食と5時間目の音楽は体操着ですぐす羽目になった。合唱の時なんかは特に浮いていたんじゃないかな。俺以外にも体操着のやつは数人いたけど、そいつらも含めて。

……うん？ いやなら着替えればいいだろうって？

フツ、別に恥ずかしいわけじゃなかったし、なにより『着替える』なんていう面倒な行為は最初と最後だけで十分だ。

「翔ちゃんが三回も体育をやったのは自分がそれを選んだからでしょ」

日向が上目遣いで（身長差でそうならざるを得ない）非難を含んだ視線を向けてくる。が、負けじと俺も言い返す。

「しょうがないだろう寝ぼけてたんだから。本当はもっと楽な教科を選ぶつもりだったんだよ」

書道とかな。得意ではないけど。なんで書道って絶対に手が汚れるんだろね。コレを説明したやつにもノーベル賞を与えるべきだ。

「それも翔ちゃんが授業中のときから寝てたのがいけないの！もう……授業はちゃんと聞かなきゃだめだよ」

「はっ！俺にとって学校は寝るためにあるようなもんだ。授業なんて聞いてなくても試験前にノートとプリントを見せてもらいさえすれば点なんか取れるのさ」

「……ほんとにおかしいよねえ。それでわたしよりいい点なんだから」

『真面目に受けてる自分がバカらしくなるよ』と日向がため息混じ

りにこぼす。するとどうだろう。不思議な事に今度は左側から中性的な声が聞こえてくるのではないか。いやまあ一緒に帰ってる友達が他にも居るだけなんだけど。

「いやいや、日向さんは正しいよ。翔は確かにテストの点はいいけど成績自体はあんまりよくないからね。授業態度もだけど提出物も出さないし」

その男とも女ともとれるいやむしろ女が無理矢理低い声を出してるんだ的な音域で爽やかに会話に入ってきたのは【北条晃^{ほうちょうあきら}】というこれまた男とも女ともとれる名前の“男子”生徒で、俺の友達2だ。もちろんクラスメイト。俺とおそろいのブレザーとズボンを着用し、黒いカバンを左手に下げている。

「当たり前前よ。提出物なんてかつたるいだけだし。俺はお前らみたく真面目になるつもりは無いし。成績なんて悪くてもかまわないし」

「提出物を全く出さないやつなんてお前ぐらいしかいないぞ。授業を聞いてないやつでもある程度は提出してるんだから。……でもまあいきなり翔が真面目になったら気持ち悪いだけだけどな」
そう言って夕焼けを背にして笑う晃を見て、俺は毎日顔を合わせているにもかかわらず思わず反論の言葉を忘れて呆けてしまった。なんと言うか、スツと反論の言葉が出なかった。

なぜならこいつは声や名前だけでなく顔も女みたいだからだ。

しかもただ女顔ってわけではなく、そのままちよつとボーイッシュなアイドルとして芸能界でやっていけそうなレベルなんだから驚きだ。だから俺の言葉が出なくなっちゃうのも無理はないよね。うん。

そういうわけで、俺はちよくちよく自問自答する。『あれ？コイツ

……同性だったよな?』と。

だってさ、コイツ結構運動できるくせにあんまり筋肉がついてないし、ほのかに女の子特有の匂いとかする時があるんだよ。なんつーの?言葉では説明できない感じのやつ。

前に何かの本で読んだ気がするんだけどさ、女性には男性を引きつけるためにフェロモンかなんかが出てるんだと。それがあの匂いの正体らしいのさ。

そしてそれが北条晃から出ているという事はそれすなわち、コイツの肉体は晃の意思に反して男を虜にしようとしているのかもしれない。難儀な事だ。

もしかしたらコイツの男性ホルモンと女性ホルモンはほぼ同じ量なのか。

んで神様の悪戯的な何かでタマタマ男に生まれてきた、と。

うん、説得力あるな。

だからそんな美少女——間違えた——美少年の笑顔に一瞬でも心を奪われかけ……呆けてしまった俺には全く悪く無いだろうし、事実どうしてこいつの性別が俺たちと同じなんだろうと学年、いや学校中の男が神を呪ったことだろう。ホント顔がいいとか憎ら……羨ましい。

「北条さん、気持ち悪いなんていったら翔さんに失礼ですよ」

「ん?確かに秋月さんの言うとおりだな。翔、悪かった」

俺がボーっとしている間に、後ろから聞く者に癒しを与える声音でフォローを入れてくれた女の子は【秋月楓】あきづきかへでとって、俺の友達3だ。そんでもってやっぱりクラスメイトさ。

長い黒髪をサラサラと揺らしながら、もう結構長い間使い続けているらしいのに新品のように綺麗な茶色いカバンを両手で持って歩く

その姿はまさ大和撫子そのもので、世の男の大和撫子像を集めて具現化したら秋月が産まりましたってくらいの子だ。所作も言葉遣いも丁寧で、なんとなく歩き方なんかも他人よりも上品で洗練されている気がする。

一度前にその謎を解明しようとした事があるんだけどさ、ためしに秋月に歩き方を変えてもらったんだけど、それでもなんか上品なんだよ。たとえ右手と右足が同時に出ていたとしても。どんな技術だ。そしてこの秋月は全体的にスラッとしてるんだよな。綺麗な髪もそれに拍車をかけてる。

別に隣にいる日向や晃が太ってるわけじゃないんだけどさ、なんだろう……あ、わかった。秋月は足が長いんだ。スカートなんて短くしているわけじゃないみたいなのに、ちよっと短めに見えるもん。うむ、素晴らしい。

「別に謝んなくてもいいよ。気にしてないし」

俺が現実に戻帰してそう返したところで日向が茶々を入れた。

「でも気持ち悪くは無くても不気味だよね、楓ちゃん」

「……それは……まあ」

「もしくは熱でもあるんじゃないかって疑っちゃうだろうな」

アハハと朗らかに会話をしているこの三人は何か俺に恨みでもあるんだろうか。

俺の悲しげな表情に気付いてくれたのか単なる偶然なのかは知らんが、秋月がふと何かを思い出したらしく話題を変えた。俺的には前者であると思いたいです。

「そういえばあすかさん、明日はどこに行くんですか？」

その言葉どおり、明日は俺達四人でどっかに遊びに行く予定であり、どこに行くかを決める役は今回は日向の番になっていた。

なんでこんな会話になるかつーとき、俺たちが遊ぶ時はどこに行くかを考えるのが順番になっているからだ。ちなみに前回は俺が決

める番で、無難にみんなで遊園地に行った。傍から見たら男2女2のダブルデートなんだろうけど、美形三人に囲まれている俺はかなり場違い感があったんじゃないかと思う。もうとっくのとうにそんなの慣れてるけどさ。これも美形の友達を持った凡人にとっては宿命である。

でも腹いせにジェットコースターに乗りまくってやったら日向と晃はきつそうな顔をしていたので、とてもすごい気持ちだった。

秋月の言葉を聞いて一瞬ハツとした顔になった日向は、すぐに朗らかな笑みを浮かべて『ちゃんと考えてあるよ』と答えた、のだけど。

「え、えくと明日は10時に駅前に集合です！」
ふむふむ。

「そ、その後は近くの喫茶店かファミレスに入店します！」
ほうほう、それで？

「え、えくとえくとそしたら：」

うん？そしたらどうするんだ？

言葉に詰まる日向をニヤニヤしながら見ていると、晃が『もうやめてあげろよ』と日向に助け舟を出した。楓も『無理しなくていいですよ』と慰めているようだ。

「うう：ごめんなさい」

そう言っただけはしょんぼりと小さい身体（一部を除く）を更にちじこませる。

まあそんな事だろうとは思ったよ。最初の言葉でどもった時点で。本来なら色々とかククク嫌味を言ってやる所なんだけど……仕方ない、俺も慰めてやるか。小学生をいじめてるみたいで罪悪感もあるし。

そう思った俺は『まあいいよ』と言って日向の頭をポンポンと軽く叩いて言葉を続けた。……おおお、やっぱり子供を相手にしているみたいだ。

「俺だって忘れることなんかたくさんあるんだからそんなに気に

しなくていいさ。別に今から考えればいいんだし、なんも思いつかなかったら明日集まった後飯でも食いながらみんなで考えればいいんだから」

『な!』と同意を得ようとして晃と秋月のほうを見ると微妙な顔をしてこちらを見ていた。

「二人ともどうしたんだ。なんか問題でも?」

俺が尋ねると慌てた様子で答えを返す。

「別に問題は無い。けどそれよりも早く手をどかしたほうがいいと思うぞ!」

「そうですよ。あんまり女の子にベタベタしないほうが言いと思います!」

全然ベタベタはしてないと思うんだけど。むしろさっき手を洗ったばかりだからサラサラしてるはずだし。

……でも確かにいつまでも手を乗せておくのは悪いか。日向は自分の身長が低いのを気にしてるみたいだから。

「ああ、つい無遠慮にさわっちゃってゴメン」

そう言いながら手を下ろすとなにやら日向が呟いたような気がした。どうやらその呟きは『バ』で始まり『カ』で終わる二文字の言葉のような気がしたけど、気のせいに違いない。何か他の言葉なハズだ。そう確信して聞き返す。

「なにか言った?」

「……なんでもないよ!! バカ!!」

そういうと日向はいつのまにか歩くのをやめていた俺達をおいて歩き始めた。っていうかなんだよおい! ホントにバカって言ってたのかよ!!

「なんなんだあいつ急に。もしかして小学生みたいだって思ったのがバレたのかな」

「……違うと思う」

晃が不機嫌そうに言った。秋月も同じような顔をしている。

「なんだ、晃も秋月もわかるなら教えてくれればいいじゃんか」

「…どっちも自分で考えてください」

「…お前はもう少し色んな事に気を使ったほうがいいぞ」

そういうと二人はさっさと歩き始めてしまった。

くそう、良くわからんことをいいやがって。気なんてこれ以上ないほど使ってるっつーの。てかわかってるんなら教えてくれないのに。面倒なやつらだな。

そう思いながら三人に追いつくべく右足を踏み出す。何てことはない、何かを考えての事でもない、何気ない普通の行為だ。

——でも、全ての始まりは、その瞬間だったんだ。

「うっ!!」

本来ならアスファルトの硬質を感じているだろう俺の右足はなにやらムニュツとしたものを踏んだ。

「……いや、違うよこれは。うん、全然違う。別にあのアレ……家畜の排泄物的なアレとかそんなじゃないって…」

ブツブツ言いながら恐る恐る視線を下げ、見慣れた制服を着ていてすこし汚れた靴を履いた足があるであろう、いやそれ以外はあつて欲しくない足元を見た。

……ん？なんだこれ。古い油か何か？エタノール？いや、それは違うな。コルタール？

謎の感触の正体は排泄物ではなく、どうやらこの黒くてドロドロしてそうな液体らしい。夕焼けに反射してテカテカと気味悪く光り、生理的な嫌悪感を催す。変な匂いはしないが、ただただキモい。

うわもう最悪だ……くそっ気持ち悪い！あ、いや……でも排泄物よりはマシ、か？

俺がげんなりしながら足を持ち上げようとすると、おかしなことに足が地面にべったりくっついていてみたいに全く動かない。持ち上げようとし、右にねじり、左にねじり、そうまでしても脚は微動だにしない。無理な動きで骨が軋んだ。

靴を脱げば簡単に抜け出せるんだろうけどそれは駄目だ。この靴には多少愛着を持ってるし、なにより裸足で帰るなんて事は正常な神経を持ったやつ（つまり俺）なら出来ない。だってこの辺りにはよく釘やらガムやらが落ちてるんだから。

そんなこんなで俺がくっついた右足をはがそうと悪戦苦闘している間にどんどろドロロはアスファルト上を広がっていき、気付いた時には既に右足を飲み込んでしまっていてドロドロの勢力は左足つま先ほどにまで達してしまっていた。

慌てて避難させようとするものの、どうしたとか右足と同じように左足までもが全く動かない。

……あれ？おかしい。なんでこっちも？

右のほうはこのキモい液体を真上から踏んづけたんだから靴の裏側がくっついてるのはまだ納得できる。どうしてここまで頑^{かたく}に動かないのかはわからないけど。

でも左足のほうはまだキモ液（キモいドロドロとした液体の略である）が達しているのはまだ靴の半分だ。

それなのに何故かかとの方まで動かないのかね？

それに俺はキモ液に気付く前から今に至るまで左足を全く動かしていない。つまり靴の裏にキモ液が入り込む余地はなかったはず。ということは左足が動かない事は異常中の異常としか言いようが無い。：などと悠長に考えているうちに結局左足もかかとまで全部ドロドロに囲まれてしまった。

———ええい気持ち悪い！それに離れない！
キモ液はただ貪欲に広がりつつける。

まずいぞ……このままじゃみんなに置いて行かれちゃうし、なによりこんな道の真ん中じゃ車に轢かれてしまう。

そう考えた俺は先を行く三人を呼び戻して引っ張ってもらおうと考えた。まあ、無難な考えだ。

「おーいちょっと来てくれー！ヘルプヘルプ！」

俺の呼びかけに三人がこっちを向いてくれたのを確認してから手招きすると、まだ若干微妙な顔をしながらもこちらに向かって戻って来始めてくれた。

いやあ……持つべきもの友だ。権力や地位じゃないよやっぱり。大事なのは人望だよ。あ、あと金。

俺が場違いにもしみじみとそう思っていると、なにやら周囲の異変に気づいた。ようやく、気付いた。気付いてしまった。

異変——異常——異事——まあなんでもいいんだけどさ、家や壁、電柱など目に見えるものすべてが大きくなっている気がするんだよ。しかも現在進行形で。

慌てて首と腰を稼動範囲いっぱい捻って周りを見渡し、空を見上げ、最後に下を見たときに俺はこの異変の原因に気づいた。

いつのまにやら俺の足首がこのキモ液の中に沈んでしまっていた。

………つーことはなんだ、周りのものがでかくなってるんじゃないかって俺が地面に沈んでるから回りの物が大きく見えてるって事？上に伸びていってるように見えるって事？

「おいっちょっ……マジでヤバイって！！早く来てくれって！！」
さすがに身の危険を感じた俺はもう一度今度は強く呼びかけた。

三人は俺が切羽詰っているのを感じてくれたのか、さっきまでのゆっくりとした歩みではなく小走りで近寄って来る。

「どうしたの？翔ちゃん」

不思議そうに俺を見る日向。……あ、こいつ何が起こってるかわかってないな。けどじっくり話している暇は無いんだよ！

「早く！！早く俺を引っ張りあげてくれ！！」

「はあ？引っ張りあげるって何から……きゃあ！！」

俺を『何言ってるんだコイツ』的な感じで見ていた晃が俺の顔から足元に目を移し、一歩後ずさりながら声をあげた。

………きゃあ？

いやいや、晃がどんな叫び声をあげようと今は関係ないって！

晃の声で日向と秋月も俺の身に何が起きているのかを理解したらしい。でも目の前の現象が現実的じゃないせいか、言葉を失っている。

………あ、膝まで沈んじやった。

「ほら！マジで早く頼むって！！絶対これヤバイぞ！！」

俺が前方に両手を突き出すと三人はハッとして動きだす。右から日向が、左から秋月が、中央から晃が俺を助けるために手を伸ばす。

——そして、世界が暗転したりした。

物事の 始めはいつも 唐突で (後書き)

この作品を選び、そしてお読み頂き有難うございます。

初投稿ですので何かと不都合なことがあるとは思いますが、この先もどうかよろしくお願い致します。

ありえない 現象起きて ケツ痛い

「おい……どこだ……ここ」

そんな言葉が自然と自分の口からこぼれるのを耳にしつつ、俺は正面を見て視覚から情報を取り込む。

広ーく広がっている草原の遠ーくに城らしきものが見える。見た感じTNL（東京ネズミランド）にあるような西洋風っぽい。正確なことはわかんないけどとりあえず日本史の教科書に載ってるようなものじゃないことだけは確かだ。

首を動かして右のほうを見る。比較的近くに、でもやっぱり遠くに町らしきものが見える。内部まではわからんが取り合えず建造物があることだけは確認できた。

あと右腕に日向がしがみついている。凶器が当たっていて幸福感がとてつもない。

首を動かして左のほうを見る。近くに広大な森が広がっている。まるでどこかの後頭部魔法使いがかりうじて生き残る為にユニコーンの銀色の血を飲んでそうな、うっそうとしていてどことなく不気味な森だ。今いる場所から大体5？くらいだろうか。

あと左腕に秋月がしがみついている。日向ほどではないけどそれでも十分標準を上回っているであろうあのアレが当たっていて幸福感がハンパない。

後ろを見よう……と思ったけど両サイドから抱きつかれているこの状況ではうしろに振り返ることができないから諦めた。多分草原が広がっているか、何かしらがあるのだと思う。

あと晁が後ろから両手で俺の服をギュッと掴んでいる。本来男にこんなことをされても不快だけなのに晁だけは別だった。なんかちょっただけ嬉しい。

本当だったら何時間でも、いやいやいつまでもこのままでもいいからいたいたんだけど、流石にそんなことを言っではいられない状況なので泣く泣く『離れてくれ』と言うとみんな俺の言葉どおりに離れてくれた。それもマツハで。

……いや、確かに離れてくれといったのは俺だけだし、そんなに嫌がらなくてもいいじゃないか。

地味に泣きそうになりながらも『とりあえず話し合わなきゃ何も始まらないな』と自分を立て直そうとし、結局姉齒建築ばりのガタガタ状態になってしまいなながらも体を後ろに向け、四人で輪になって口火を切る。

「あのさ、まず…」

「あ、そういえばお昼ご飯のときに使ったシートがあるからちょっと待って」

「……………」

……いやさ、確かにシートはあったほうがいいと思うけどね？このまま草の上に座り込んで服に緑色の汁（草汁？）とかがついたら落とすの大変だし。でもこのタイミングじゃなくてもよくね？てか何でコイツはこんなに落ちついてんの？俺だって冷静なフリをしつつも実はそれが焦った俺を見られたくないという意地から来ているだけであって、内心焦りまくってると言うのに。焦り焦っていると言うのに。なんかもう『焦る』という言葉がゲシュタルト崩壊しそうだって言うのに。

『はいどうぞ』と日向がカバンから取り出したシートを広げると全員が靴を脱いでシートの上に座る。そういや靴にキモ汁は…ついてないな。

……ふう、改めて気を取り直して、と。

「……まあ色々わけ分かんない事ばかりなんだけど……とりあえず順を追って話そうか」

三人とも何も言わずに頷く。

「えっとじゃあまず事の始まりからな。えーつとさ、あの帰り道でお前らが先に行っちゃった後を追いかけてようとしたらなんか黒くてドロドロしてそうなものを踏んだんだよ。その時は油か何かかと思っただけど……違ったんだろうね。靴にもなんもついてないし」晃と秋月は黙って首を動かして相槌を打ったが、日向だけは自分の小さい靴の裏を確認していた。やっぱなんかずれてるな、この子。

「んで踏んだあと右足をあげようとしたんだけど全く動かなかったんだ。そしたらそのドロドロが広がっていつて左足まで達したと思ったらそっちまで動かなくなった。だからお前らと呼んだんだ。それが一回目。その時は別に焦ってなかったんだけど、しばらくしたら自分が地面に沈んでいつてるのに気づいた。その時が二回目」

「そこで私達が翔さんを助けようとして手に触れたらその黒いものが広がったんですよ」

——そう、秋月の言うとおりで。あの時みんなが俺の手に触れた瞬間、今まで俺の両足を飲み込んだあたりで動きが止まっていたあのドロドロが一瞬でブワッて三人の足元にまで広がった。そして三人も俺と同じく足が動かせなくなった。

「そしたらいきなり足場がなくなったみたいになに落ちていったんだよねえ」

『うーん』と唸りながら腕を組んだ日向が言った。こんな時にどうでもいい話だけど、胸が大きい女の人の腕組って個人的に最高だと思う。

「それでボク達はよくわかんないところ落ちてきたんだよね」

二人の言葉通り、ドロドロに侵食された俺達はいきなり絞首刑が執行された時のように足場が無くなり、次の瞬間よくわからない空間を落下していた。

『ソコ』は基本的には真っ暗だったが、時折赤や緑や紫など様々な色の光が遠くや近くが見えた。また距離感が掴めなかったから一見狭そうではあるものの、光の具合から広くも見えたし、空間そのものが歪んでいるかのようにグニャグニャしていきながら宇宙のようだった。実際にその中にいた時間は30秒くらいだったんだろうけど、もしあの中に5分もいたら酔って昼飯に食った物をもんじや焼きの元としてリバーズしていたと思う。

「んで下のほうに白っぽい光が見えて、落ちるに連れてその光が大きくなって、それに包まれたと思ったらココに落ちてきたんだよな」

草でいっぱい地面を見ながらそう言った。

一応空間の中では離れ離れにならないようにくっついてたため、落ちて来てる時も右に日向、左に秋月、背中に晃がくっついていてといううちの学校の男に見られたら袋叩きにされるであろう状況で落ちてきた。草原の存在に気付いた時の高さは地面から1メートルくらい。そしてケツをうった。

でも不思議だったのは空間の中でかなりの加速度がついただろうにも関わらずダメージが小さかったことだ。確かに痛かったことは痛かったけど、その痛みも『1mの高さから落ちた』時程度の痛みしかなかった。

「つか何でケツからだったんだ？光に包まれた瞬間俺は腹ばいだったんだぞ？秋月と晃は直立だったけど。あ、日向は頭から落ちてたような気がする。」

と、俺がケツについての考察にふけっている傍ら、日向、秋月、晃の三人も何かを考えているようだった。多分自分たちの身に起こったことを考えているのだろう。

……俺も真剣に考えよう。

そう思って三人を見習ってさっきの空間のこととかあの黒いドロドロについて考えることにする。

・・・よし。

でも結局3秒で止めた。

あんなものいくら考えても正体がわかるわけがない。だから俺達が今ここで頭を捻ったところでただいたずらに時間が過ぎるだけだろう。うん、そうに違いない。こういうのはどっかの学者みたいな暇をもてあましたオッサンに任せればいいだろう。

「よし、オッケイ！」

「え！？何かわかったの？」

「ああ。何にもわからないって事がわかった」

「…なにそれ」

俺に聞き返した日向も、黙っていた秋月と晃も、みんながみんなジトツとした目で見てくる。説明を省くと伝わらない、と言うことがここに改めて証明された。

だからと言ってこのままで良いわけがなく、非現実的な出来事について空想することの必要性についてそこそこ語ると、三人は納得してくれたらしく神妙に頷く。

「確かに翔の言うとおりか。過去じゃなくて現実に目を向けるべきだったな」

そうそうそれぞれ、俺はそれが言いたかったんだ。

「にしてもさー、ここはどこなんだろうね？」

「アホ！見れば判るだろ！草原だよ草原。原っぱと言い換えても

いい」

「そーゆーことじゃないよ！地名とか国とかの意味！」

プクーと頬を膨らまして怒る日向。本人は怒っているようだけど怒られてる俺にしてみれば全く怖くも何とも無いし、むしろ小動物の威嚇を見ているみたいで和む。頬を膨らましているのも可愛い子ぶってるとかそういう理由ではなく、マジなんだろう。

ちなみに誤解の無いように言っておくけど俺は小さい女の子にしか欲情できない特別な体質の持ち主じゃないからね。

俺がまるでペンギンの赤ちゃんを見ているような気分になっていると黙り込んでいた秋月が口を開いた。いや、正しくは考え込んでいた、だろうか。

「とりあえず日本ではないことは確かでしょう。あそこに見えるお城の形もそうですし、近くに咲いていた花も見ることがあります。それになによりこのように草原、森、町、お城が一望できる土地なんて私の記憶にはありませんし」

……うおっすげえ。よくもまあ花やら地形やらを覚えていられるもんだ。さすが秋月、学年主席の実力は本物である。

でも……秋月の言うことが正しいとなると……やっぱここは『アレ』なのかな？

「ん？どうかしたのか？」

「：ちよっとこの世界について思い当たる節があったんだけど……俺がそういうとみんな驚いた。まあ当然の反応だ。」

「本当か！？」

「ああ。……でもやっぱなんでもない」

晃が俺の言葉を聞いてガクツとなる。

「なんだよそれ。ちゃんと教えてくれよ」

「いやさ、ホントにふと思ったただけなんだよ。多分聞いても信じ

られないと思うよ？」

それになにより、コレを言って痛いヤツを見る目で見られたくない。

「そんなこと聞いてみないとわからないだろう」

晃が少しムツとした表情でそう言い、『そうですよ』と秋月も同意する。日向は何も言わなかったがどうやら二人と同じ事を考えているらしい。

……本当は言い終わった後のみんなの顔を想像すると正直言いたくないんだけど……仕方ない。

『はあ……』と軽く溜息をついてから俺は話し始めた。

「えつとな、さっきはふと思ったって言ったけどさ、本当はもうチョイ前から思ってたことなんだ。んでさっきの秋月の話とかを聞いてやっぱりそうかなって思っただけど……」

「さっきの話と言うと……花とかお城のことですか？」

頷いて話を進める。

「明らかに西洋風な城、秋月に見覚えが無い花、日本にはありそうにない地形、それだけを考えればここはどっかの外国かもしれない。でも俺達がここにきた手段があんなだったことも合わせるとその線は薄いんじゃないかと思うんだ」

三人とも真剣に聞いてくれている。美形三人に真顔で見つめられているといくら友達でも流石にちょっと恥ずかしいな。

俺はその恥ずかしさから、そして今から言うことのいい辛さから少し俯きながら話した。

「じゃあ日本でもそれ以外の国でもないならどこかって考え時に思いついたんだ。ここは俺達が居た世界じゃない別の世界、俺達が居た次元ではないまた別の次元、つまり……『異世界』なんじゃないかってさ」

「「「……………」」」

ほうら静かになったよ。絶対俺『コイツ何言ってるんだ』的な目で見られてるよ。

でも俺の脳みそじゃこれ以外の言葉は思いつかなかったんだ。だって小説やら漫画やらゲームやらの類だと『異世界召喚系』なんてのは幾らでもあるし。まあたいていの場合一人か二人くらいしか召喚されないけどさ。

……つってもなあ。やっぱりこういったものを一切やらないやつらに言ってもだめかあ。

そう思いながらゆっくりと首を上げると……あら？予想に反して三人とも真剣な顔をしていらっしやる。

「『異世界』か……。あながち頷けない話でもないな」

「……そうですね。あとは地球以外の星、ということもありえるのではないのでしょうか」

「別にどっちでもいいよお。どっちにしろ『わたし達がいた世界』じゃないみたいだし」

意外に『異世界』案は高評らしくてちよつと鼻高々だ。

「もっと反論があるかと思ったけどみんな結構素直に受け入れられたんだな。『いやそれはないでしょうこの豚野郎』みたいな感じで」

俺が尋ねると秋月と晃は苦笑しながら返答した。

「確かに、いきなり道端で『実はここ、異世界なんです』って言われても無理でしょうけど」

「でもボク達は実際にその異世界らしき場所にいるし、その話が納得できるくらいの体験もしたからね」

「私も楓ちゃんと晃君と同意見だよ。…………でもそれだけじゃなく……」

「うん？それだけじゃなくてなんだ？」

「……………」

……中々返事がないな。聞こえなかったのか？

俺がもう一度聞き返そうとした時、日向はなにやら決意をした表情になって、そしてすぐに恥ずかしげに言った。

「それに……その……す、好きな人のことは…信じるよ」

「「！！？」」

「……………」

—————そうか、そうだよな。

日向はこんなわけの分からない状況下で、しかも『異世界』とか変な事を言い出した俺を信じると言ってくれているのか。

—————なんていい友達を持ったんだ俺は。

こいつらは俺の友達で、友達ってのは互いに信じあうもんなんだよな。だから俺もあいつらを信じなきゃいけなかったんだ。

なのに俺は勝手に『どうせ信じてくれないだろう』って思ってた。でもそれは相手に対してすごく失礼なことだったんだ。

—————それを気付かせてくれた日向には感謝しなきゃ。

そう思って俺は日向を見る。視線の先にいる日向は顔が真っ赤だ。

『い、言えたっ』とも呟いている。そりゃ他人に面と向かって『好きだ』なんて言うのは恥ずかしいだろう。でもその恥ずかしさを乗り越えて日向は俺に大切なことを気付かせてくれたんだ。だから俺

も……伝えなきゃいけない。

節目がちにチラチラと俺の様子を伺う日向の目を見つめる。真剣に相手に何かを伝えたい時は目を見て話せてどっかの偉い人が言っていた気がしたから。

「ありがとう、日向。俺も……お前のこと好きだ」

「「っっ！！！！？」」

「ホ……ホント！？」

俺がそういうと日向は一瞬ポカンとした顔になり、すぐさま手で口のあたりを抑えながら

少しくぐもった声で聞いてきた。顔が赤くなっているのを自覚していてそれを隠すのにそうしているんだろうけど、顔の上半分だけでも十分にそれが伺えるのでぶっちゃけ意味をなしていない。とかなんとか言ってる俺も慣れないことを言って少々顔が熱い。

でもそれに気付かないフリをしつつ全力で言った。俺の気持ちちが日向に伝わるように。俺の思いが日向に届くように。

「ああ。お前は…最高の友達だ！！！」

「…………友達？」

「そうだ！あ、二人ともそんな顔すんなって…………もちろん日向だけじゃなくて晃と秋月もだってば。俺達はずっと友達だ！」

「…………『ずっと』友達、ですか…」

むう…………自分で言っというてなんだけどそんなに『ずっと』を強調されると少し照れる。

でもまあ俺は確かにずっとそうでいたいからそのまま頷く。

「いやもうむしろ親友って言いたいくらいだ！」

もちろんそれ以上の関係になれるのであれば万万歳だ！…………でもそんなことは万に一つもない、か？いや、望みはあるはずだ。諦めたらそこで試合終了なんだから。

でもまあ今すぐどうこうって話でもないし、だったら今はみんなでこうして親友として仲良くやっていきたい。それが今現在の気持ちだから。

「うん？どうしたみんな微妙な顔をして…………もしかしてなんか気に障った？」

少し気安すぎたのかな。

「う、ううん、そんなことないよ！わたしも翔ちゃんの事を親友だと思ってるよ！…今は」

「え、ええ。私もそう思っていますよ。…今は」

「あ、ああ。ボクもだ。…今は」

何だその『今は』ってのは。『今は親友でもいいけど今後は俺の態度次第でそれ以下にもなりますよ』ってことか。

「…：わかった。今の関係が続けられるようにがんばるからさ！」

「「「……………」」」

『よっしゃ！』と心新たに気合を入れる。

そーいやどこまで話を進めたんだっけ？

…………ああそうだ思い出した。『異世界』ってことを言ったんだった。この話はもうこれ以上しなくていいよな。なによりこんな話をした俺が恥ずかしい。

「よし、話が脱線しちゃったけど元に戻そう。んで次の話なんだけど…いや、これが最後の話か。これからどうするかを決めよう」
三人も真剣な表情に戻り、黙って頷く。

「つつてもとりあえず人がいるところに行かなきゃ何も始まらないから、選択肢は『町』と『城』の二つだけだけど」

『さあ、どっちがいい？』と聞くと秋月が『町ですね』と即答する。
…：いやまあ、話が早く進んでありがたいんだけどさ。

「…：早いな秋月。俺としてはもうちょっと悩んでもらいたかったんだけど」

頭を抱えて悩む美少女三人（この際晃も含めちゃおう）ってのも乙じゃない？

「じゃあ翔さんはお城の方に行きたかったんですか？」

「…いや、町の方だけどさ」

「じゃあ何も問題ないです」

そう言って笑う秋月に苦笑を返すと、いまいち俺達が町を選んだ理由がわかっていない日向と晃が口をはさむ。

「どうして町の方がいいの？お城のほうにも城下町みたいなのがあるかもしれないよ？」

「うん。別にボクが城のほうが良いってわけじゃないけどどうしてそこまで即答できるんだ？」

二人は俺と秋月を見る。

「そりゃアレだよお前、セキュリティの問題だよ」

「セキュリティ？……あ、そっか。なるほど、わかったわかった」
晃の方は俺の説明を省いた理由を理解してくれたらしいが日向のほうはできていなく、再び頬を膨らましている。

「そんなのじゃわかんないよ！なんでいつもいつも翔ちゃん
は過程を省くのかなあ……ちゃんと説明してっていつも言ってるのに……」

日向がブツブツ言うように、俺は勉強にしろ他の何にしろ誰かに何かを説明する時、その過程というものを結構省く。面倒だからね。気分が乗ってるときはむしろ知らない知識まで喋ることもあるのだが、基本的にはさっきのように答えだけだ。晃のように理解力のあるやつはきっかけさえあれば答えに至れるので問題ないんだけど、ぶっちゃけた話、若干ぶー気味な日向は今みたいにむくれることになる。そしてそーゆー時は秋月に任せておけばオッケーだ。あいつは俺みたい面倒くさがりじゃないから。

今回も秋月に『頼む』と一言言って、あぐらを崩して足を誰にも当たらないように注意しながら後ろに倒れこみ、仰向けになって空を見上げた。

ああ、空が蒼くて綺麗だ。こっちの世界ではまだお昼頃なのかな。

横から秋月の溜息らしきものが聞こえるけどスルーする。

秋月は『そんなに難しいことはありませんよ』と前置きしてから説明を始めた。

「お城に住んでいるような人はたいい地位のある人です。そしてそういった人達が治めている町、つまり城下町に入るためにはパスポートのような身分を証明出来る物が必要かもしれませんよね？でも私達はそれを持っていません。もしかしたら必要ないかもしれませんが、可能性はある以上そちらに行くべきではありません。まあ町の方にもその手のものがあるかもしれませんが、こちらのほうが可能性は低いですから」

日向が『なるほど』と言って納得した後、『ああそう言えば』と俺はもう一つ理由があると付け加えた。

「今度はちゃんと説明してよね」

「こっちは簡単だから大丈夫。町のほうが城より近いってだけだ」

「…そっちの理由のほうが翔ちゃんらしいよ」

言って日向は立ち上がり、うーんと伸びをすると俺達に向かって言った。

「行くところが決まったんなら早く行こっ！いつまでもここに居ても意味ないし」

なっ！！マジでか！？

日向の突然の言葉に驚いて起き上がった。三時間耐久サッカーのせいで疲れている俺としてはもう少し休みたい。

でも秋月も『そうですね』と言って立ち上がりとしている。

「翔ちゃんも早く立って！シートが片付けられないでしょ！」

「いやいや、もうちょい待ってよ。そんなに慌てなくても町はなくならないって。蜃気楼じゃないんだから」

「明るいうちに向こうに到着したいの！それにほら、晃君も準備してるよ」

そう言われて横を向くと既に晃はつま先で靴をトントンと整えているところだった。

チッ、裏切り者め。

俺は『仕方ない』と小さく一言呟いて立ち上がり、晁を軽く非難の目で見つつ靴を履き、大きく伸びをしたあたりで自分の体の異変に気付いた。まあ『異』変といっても今度は良いことだけど。

———なんか、体が軽い気がする。

確かに運動した後の精神的な疲労感はある。でも駅までの帰り道の最中感じていた要介護認定者体験用拘束具を付けた時のような重さとかダルさがなくなっている。あの時は膝を高い位置に上げることすらだるかったけど、今やって見たら全然なんともない。

俺が不思議そうな顔をしながらもも上げをするという奇妙な行動が目についたのか、秋月がどうしたのかと尋ねてきた。

「いやね、なんか知らんけど身体が凄く軽いんだよ。座ってるときは気付かなかっただけ。だから何でかなって思ってたさ」

「えっ？」

なにやら秋月はビクリしている。なんかおかしいことだったかな。

「いえ、そういうわけではありませんよ。ただ私も翔さんと同じ事を思っていたものですから、少し驚いちゃったんです」

「同じ事ってことは：アレか？暗礁に乗り上げている現在の日本経済を、次世代を担う俺達はどうやって変えていくべきかってことか？」

「そんな高尚なことを考えていらっしたんですか？」

条件反射でボケた俺を秋月はなにか偉い人を見るような目で見てくる。なんだろう、凄い罪悪感だ。……あああやめて。そんなキラキラした目で俺を見ないで！

日向や晁なんかはちゃんとツツコミをしてくれるのにこの子は少しズレているところがあるのでたまにボケ殺しだ。だから秋月だけの時にはあまりボケないようにしているのにとっさにボケてしまった。

「ま、まあその話はまた今度ね。えーと秋月、お前も身体が軽いつて事？」

「はい。身体が羽で出来ているみたい……って言ったら大袈裟なんですけど、なんだか体重が五分の一くらいになったんじゃないかって気がするんです」

ニコニコしながらそう言う秋月を見て、俺は目の前の女の子が男子生徒の間で秘密裏に行われた『お嫁さんにしたい子ナンバーワン決定戦』でダントツ一位になったことを思い出した。丁寧な物腰にこの笑顔、そりゃ誰でもそう思うだろうよ。それに料理も出来るし。

ついでに言うと、日向は『妹にしたい子ナンバーワン決定戦』で、晃は『女子だったら良かったのにナンバーワン決定戦』と女生徒内での『姉さんと呼ばれた男子生徒ナンバーワン決定戦』で1位だ。因みにこれらも秘密裏に行われたので、あいつらは各自自分が一位になったアンケートの結果を知らないだろう。俺が晃の『姉さんと呼ばれたい』を知ったのは日向が教えてくれたからだ。公表された普通のアンケートだと確かミスコンかなんかで日向と秋月で票が割れていたらしい。

ミスターの方は全く興味がなかったし、どうせ結果は晃の総取りだってことがわかっていたのでまったく興味が無かった。

……俺？俺も公表されるほうで一位になったことはなったけど、三人とは違ってあまり光栄なものではなかったのでこの場では割愛させていたたく。今後言う機会があるとも思えないけど。

「……？どうかしたんですか？」

おっと、少しボーっとしすぎた。

「いや、俺も秋月もそうならあいつらもそうなのかなって思ってたんだよ」

俺はたった今思いついたことを口にしながら後ろで会話しているであろう日向と晃を親指で指した。

「そうですね。聞いてみましょうか」

俺は秋月の言葉に適当に肯定して二人の名前を呼びながら近づいた。

なにやら二人はニコニコと談笑しており、中々に話しかけづらい空気を製造し続けているがそんなものは関係ない。なぜならとっくの当にそんなものには慣れているからだ。

「うん？ どうしたんだ翔」

「いやさ、俺と秋月がこの世界にきて同じ事を考えていたんだよ。だからお前らもそうかなって思ってた」

「……楓ちゃんと同じ事？」

なんか日向が不機嫌そうな顔をしていた。まったく、まださっきちゃんと説明しなかった事を怒ってんの？

「私も翔さんも身体が軽くなっているように感じているんです」
秋月の言葉を聞いた二人は互いに驚いた表情で顔を見合わせ、次いでクスツと笑った。

「俺達になにかおかしいこと言った？」

「悪い悪い、そう言うわけじゃない。ただボク達も全く同じ事について話してるところだったんだよ」

「そうそう。だからちよつとだけおかしくて」

ふむ……ってことは全員身体が軽くなった気がしているってことか。これはもう偶然とかじゃなくて恐らく何らかの力が働いているとしか思えない。ただ例によって例の如く理由は考えないでおこう。頭を使う作業はまだ見ぬ偉そうなオッサンに任せたんだ。

——あ、いい事思いついた。

俺はこれから起こるであろう事を想像してにやける顔を押し隠しながら、真剣そうな顔をして三人に『ちよつといいかな』と呼びかける。

「本当に体重が減ったからなのか、それとも重力が小さいのか、はたまたそれ以外の理由なのかはわからない。でもどんな理屈にせよ全員が身体が軽いと感じているってのはどう考えても普通じゃない。多分この世界に来了ことで何かが起こったんだと思う」

三人とも頷く。

「そこでちょっと試したいことがある」

そういつて少し間隔を空けて貰う。3mくらいだろうか。

「とりあえず思いっきりジャンプして欲しいんだ。もしかしたらいつもより高く飛べるかもしれないからさ」

この言葉をあえていかにも面白そうだというような声色で言うことで三人の意識を俺の意図する事とは別に向ける。

「つーことで、最初に秋月と日向がジャンプしてみてくれ。その後俺と晃が跳ぶからさ」

そうするとホラ、いつもなら絶対に飲まないであろうこんな要求であつても二人とも『うんいいよ』『わかりました』なんて二つ返事で受け入れてくれた。『異世界』に來たかもしれないという特殊な状況や身体の異常、いつもよりも高い身体能力を発揮できるかもしれないという興奮などが二人にとって大切なことを忘れさせているんだろう。

二人が楽しそうに『せーので跳ぼっか』『いいですよ』などと会話しているのを見て俺はワクワク感が止まらない。ロマンティックも止まらない。

………だつていうのにまさに二人が跳ぼうとし、俺がこれから目の前に現れるであろう絶景を目に焼き付けるべく瞼を当社比二倍で見開いた瞬間、横から大きな声が聞こえた。

「二人とも待って!! そんな格好で跳んだらスカート「晃あああ
っっ!!」」

くっ!! コイツ…男の癖になんて事を言つてやがる……っ!!
跳んだ気配のない二人のほうをゆっくり見ると……あああ、どうやらバレたらしい。

二人とも両手でスカートのすそを抑えつつ、若干赤くなった顔でこちらを睨みつけていた。

因みに、スカートを抑えているため前かがみになっているので必然的にいわゆる『だっちゅーの』ポーズになっており、上目遣いだ。日向も秋月も大なり小なり怒ってはいるのだろうが、どちらも顔の造形が『綺麗系』というより『可愛い系』だし、何より顔が赤いので怖くない。

でもこのことが原因で今現在三人しか居ない仲間を無くしてしまうかもしれないということを考えるとここで嫌われてしまうのは得策じゃない。

いや、それ以上にあいづみたいな美少女に嫌われるとかかなり精神的にクるものがある。

となると、ココは一つ何とかして誤魔化すしかないな。……よし、『何にも気付いてなかったよ大作戦』でいくしかないな!!

「い、いやーそういや日向も秋月もスカートだったな。ジャンプの前に晃が気付いてくれて良かったよ。あのままいってたら話を振った俺が悪者になるところだったからさ、残念と言えば残念だけどまあ俺としても良かったよ」

「「……………」」

H A H A H Aと三人に朗らかに笑いかけたのにみんな俺に『お前が付いてただろ』的視線を浴びせてくる。それにだんだんと日向と秋月の顔から赤身が無くなってきているため、流石に少し怖くなってきた。

くっ……まだだ! まだ終わらんよ! 無駄に負けず嫌いな俺の辞書には『素直に謝る』なんて言葉は載ってない!

……まあ普通の辞書にもそんな『文章』は載ってないけどさ。

でもこのまま適当な事を言っていてても事態は好転しないような気がする……よっしゃ、今度は『なんだかんだで話を進めて有耶無耶にしてしまおう大作戦』だ!

「よ、よし、じゃあ俺と晃がやってみることにするよ。ほ、ほら晃、危ないから向こうに行こう」

本当は全く危険ではない距離だったがこの場の空気に耐えられなかったので晃と一緒にこの場を離れようとして、ちょうど肩を組むように右手を右側にいる晃の右肩に乗せた。なんだか右ばかりだ。

「――！！」 「――！！」

するとどうだろう。三人がなんか変な感じになった。

よくわかんないけどとりあえず少々離れたところにいる少女二人に目を向ける。……なにやら驚いた顔を、いや『愕然とした』という表現のほうかふさわしいか、いやいやそれとはちよつと違うな、なんていうかこう：『最後にとっておいたショートケーキのイチゴを兄貴に食べられる弟』みたいな：まあそんなような形容しがたい表情をしている。

次いで首を右に動かして晃を見る。……うん？なんかコイツ赤くなってるね？

俯いてはいるけど晃の女みたいに白い頬がほんのりピンクっぽくなっている。

ってかどうでもいいけど最近赤面するやつが多いな。春だからかな？

そう思いつつ視線を前に戻すと先ほどと変わらぬ表情の女の子が二人。そこで俺は晃の赤面の理由を思いついた。

――ハハーンわかった。もしかしたら女の子二人の前で同姓に肩を抱かれるってのは晃にとっては恥ずかしい事なんじゃないか？思い出してみれば晃は普段からあまり他人との一時的接触を好むようなヤツじゃなかった。でも俺がふざけてあいつに触れたときも別に嫌がつてるわけじゃないみたいだったから、多分慣れてないんだろう。そういう肩を組んだのもコレが初めてだし。うん、間違いない。

こんな感じで俺は晃に対する推測を終わらせると次は日向と秋月に

ついて考えを移す。

俺と晃が肩を組んでる光景が珍しいから？…いや、確かに少しくらいなら驚くかもしれないけどそれにしてもあんな表情はしないだろう。でもあの顔…前にも見たことがある気がするんだよねあ。………いつだったかねえ。

えーっとおーっ………うーん………あ、思い出した！

そうだそうだ、あれはいつかの昼休みの時だ。たしかあの時はバイトの給料日前だったから飯が殆どなかったんだ。だから晃が飲み物を買っていくんだか何だったかで席をはずした隙にあいつの手の凝ってそうな弁当を奪って食った時も日向と秋月は今みたいな顔をしてた。あとは………晃が飲んでいたペットボトルのお茶を奪い取って飲んだ時もだ。

そこまで考えた時に、目の前の二人の少女はただこちらを漠然と見ていたわけではないことに気付く。どうやら晃の肩に置いてある俺の右腕を見ているらしい。

—————そして、気付いた。本当の理由に。正しい真実に。あいつらは『弟』で、晃が『イチゴ』、そして俺が『兄貴』なんだと。

晃の飯を俺が勝手に食った時、お茶を奪った時、そして今現在、あいつらがあの顔を見せる時は全て俺が晃に対して何かをしている時だ。

そんな時にしか現れない表情の理由なんて一つしかない。

要するにあいつらのあの顔は恐らく俺に対する『嫉妬』から来るものであって………あいつらは晃のことが好きなんだろう。それも――

ove的な意味で。好きな人が自分以外の人間とベタベタしていたら誰だって嫌だろうし。

……そういや前々からそんな噂もあったな。日向と秋月が晁のことが好きで、晁はそのどっちかが好きってやつ。

俺がその噂について三人に聞いてみた時は揃って『他に好きな人がある』って否定していた。それに『身近にいる人だ』とも。でも誰の名前を挙げてても違うって言ってたし：今考えてみれば、あれは多分嘘だったんだろうな。俺がいきなり『晁だ』『日向か秋月だ』って核心ついちゃったから否定したんだと思う。

けどいくら仲がいいからって好きな人と同姓のヤツに嫉妬なんてするか？ しないよな、普通。しかも抱き合ってるならまだしも肩を組んだだけで。

……いや待てよ、世の中には『ヤンデレ』という性質のヤツがいることを忘れてた。

もちろんあの二人がその類の人間だっていう証拠もないし、実際にヤンデレなんてのがこの世に存在するのかどうかもわからないし、何よりこんな身近にそんな特殊な性癖をもったヤツがいるなんてことはあまり信じたくない。

でも世の中何が起こるかわからないという言葉をついさっき身をもって体験したとなれば、その可能性を一概に否定することは出来ない。

……ってことはやっぱりあれか。こいつらのこれは……嫉妬、なのか。

そうなれば全て納得がいく。

俺がなんだったかの罰ゲームで、日向に俺のことを『お兄ちゃん♪（この音符が大切）』、秋月に『お兄様♪（この音符が大切）』と呼ばせて悦に浸ってた時の晁の顔も、みんな俺の家で遊んだ時、やっぱり何かの罰ゲームで晁に女装＋女言葉＋女声で俺に『…先輩

……私、先輩のことが好きなんです!!』と言わせて悦に浸った時の日向と秋月の顔も今なら理解できる。

晃がどっちの事を好きなのかはわからない。

けど、そんなことはどうでもいいんだ。

結局俺の友達が俺の友達を好きって事は、俺の友達の間で俺の友達同士が『恋人』という関係になるかもしれない、もしそうならそいつらは俺の友達には変わりないけれど、今までみたいな友達同士ではいられないってことなんだから。

それは俺にとって少し孤独と寂寥せきりょうを感じる未来。でもそんなこと位であいつらが幸せになれるんだったら、とても喜ばしいことなんだ。だからもしそうなら俺はあいつらを祝福してやりたいと思う。少しからかって、茶々を入れて、イジツて、心の底から祝ってやろうと思ってるんだ。

きっとそれが『本当の友達』って奴なんだから。

——でもね？

こんな奇麗事を言ったけどね？ やっぱり悔しいわけよ、色々。あんな美少女に好かれてる晃に対して。俺の親友を取っていいこうとする日向と秋月に対して。

そりゃあいつらが正式に恋人発言したらさっき言ったとおりに祝ってやろうと思ってるよ。『おめでとう』とか『末永くお幸せに』

なんてからかい混じりに言ったり、なんとか二人つきりになれるような時間を作ってあげたりしてさ。その気遣いをあいつらがどう思うかは別として。

でもまだそういう関係じゃなさそうだし、仮にもう恋人同士だったとしてもそれを俺に隠しているんだったら気遣いなんてものは必要ないだろう。あいつらが堂々としななんだったらその代わりに俺が堂々としてやる。堂々と呪……祝ってやる。

つまり、それまでは俺が精々引っ掻き回してやろうということだフヒヒ。

俺は長いようで短い（肩を組んでからまだ三秒くらいしか経過していません本当です）思考を止め、ニヤリと笑ってグツと右手に力を入れた。要するに、晃にもっと密着して目の前のやつらを更に悔しがらせてやろうとしたわけさ。

でもそこで少し手違いが起きた。

別に『ゴキヤッ』っと晃の肩が砕けたとかそんな大層な事ではなく、思いのほか晃がすっかり立っていないかったので力を入れたら倒れてしまいそうになったのを俺が慌てて抱き寄せただけだ。

「……………!!!」 「……………!!!」

ふむ、どうやら当初の計画よりも三人にダメージを与えることに成功したらしい。まあ密着以上に不味い絵だろうからね。その証拠に正面の女の子達はワナワナと震えている。

だがしかし、俺はこんなところで攻撃を止めるような人間じゃな

い。ココで俺が晃の耳元で『大丈夫か?』位の言葉を囁いてやれば
あいつらは再起不能になるんじゃないだろうか。

そう思って晃のほうに顔を向けた瞬間、俺は目を奪われる。

何故か潤んでいる見上げるような目、肩を組んでいたとき以上に赤
くなった頬、すべすべしてそうな肌、風に撫ぜられるとサラサラと
揺れる男にしては長めの黒い髪。

要するにそこにはスゲー美少女がいたからだ。

『いやいやこいつはこんな顔でも歴とした男なんだ』と理性が警鐘
を鳴らしている。それとは別にどこからか『もう性別とか関係ねー
よ行っちゃまえ』なんて言葉が聞こえてくる気がする。

しかし俺は根性でそれを押さえ込み、いざ晃の耳元で囁こうと思っ
たところでゆっくりとこちらに向かってくる二柱（二人にあらず）
の般若が視界に入り、かつてないほどの恐怖心を覚え慌てて晃を立
たせて俺は晃から手を離す。すると支えを失った晃はその場にペタ
ンと座り込んでしまった。

「あ、あはは……な、なんか晃が急に調子が悪くなったみたいだ
から俺一人でジャンプしてみるわ。そんじゃ!」

俺は晃を置いて近づいてくる二人に背を向けてダッシュで逃げ出し
た。

「ど…して晃ちゃ…あん…にくつつ……るの!ズ…イ…!」

「そう…すよ!羨ま…過ぎ…す!」

うん?よく聞こえないけどなにやら晃が責められてるみたいだ。
ケツ、いい気味だよ。うちの学校には罵詈雑言でもなんでもいい
からあの二人に話し掛けられたいって思ってるやつもいるくらいな
んだからな!!こっち側からじゃ晃の顔が見えないけど、さぞかし
泣きそうな顔になっているだろうよ!!

……まあいい。とりあえず全力でジャンプしてみるか。あいつ
らはまだ痴話喧嘩を続けてるみたいだしほっとこう。話を振っとい

ていつもと同じくらいしか跳べなかったら恥ずかしいしな。
軽く屈伸をして、と。

よし。

せーののっっっ！！！！！

大切な話し合いこそ 的確に

……ん？

すぐ近くに見たことのない鳥が。あ、どうもこんにちは。

上昇終了。太陽がいつもより眩しく感じるZ E ☆
下降開始。一瞬、天空×字拳を放つかどうか頭の片隅で迷う。

さっきの鳥が遠くに見えた。いつてらっしやい。

地面まであと数m。いくら下が土だとしても、このまま行けば足の骨が粉碎する恐れがある。しかし、今更どうしようもない。

着地。ズダッ！という音と共に地面が少々陥没したものの、俺の身体（主に足）に異変はない。感覚的には2〜3m位の高さから飛び降りた時みたいな感じ。痛いことは痛いけどそれほどでもない。

おそらくマンションの三階以上の高さはあるだろう。

三人は鳥を一瞥し、胡散臭いものを見るような目で俺を見た。おやおや、どうやら晃も復活したらしい。

「いや、嘘じゃないんだって！ほら、これ見ろよ！俺の着地の跡だぞ！」

俺の足のサイズ＋αくらい凹んでいる地面を指差す。三人はそれを見てもまだ疑わしそうだ。

「じゃあいいよ！もっかいジャンプするよ！あ、今度こそ晃も一緒にな！」

そう言って三人のところまで早歩きで行き、無理矢理晃の手を掴んで連れて行く。

「いいか晃、思いっきりだぞ。手え抜くなよ。あと、かなり高いけど着地は何かなるから怖がらなくてもいいからな」

「わ、わかった」

微妙にどもる晃。それがこれから起こる事への恐怖からなのか、俺に腕を掴まれた事で先ほどの日向と秋月への恐怖心が蘇ったからなのかはわからない。

「よし、じゃあいくぞ。いつせえのおー…」

グッと地面を踏みしめる。

「せつつっ！！！」

マンガであればグイーーーーーンという擬音が使われそうな感じで上昇していく俺と晃。今回は二回目だし、心構えもしていたから回りを見る余裕がある。

高くなっていくにつれてすぐ近くの森の大きさが明らかになってくる。予想通り相当でかい。かなりの高度に達したと思うけど、それでも終わりが見えないほどだ。

上昇終了。少し離れた場所に呆けた表情の晃がいる。高度は俺より

「ちょっと本当！？今ボク本当に自分で跳んだの！？」

興奮しすぎて声のトーンが変わった晃。より女っぽくなってしまってるけど、これは一体どう言う現象だ？

「ちょっと落ち着けお前ら。静かにしなさい」

日向と晃をなだめ、秋月の目の前で強く手を叩いて現実復帰させる。

「な？本当だったろ？」

「あ、ああ。自分でも信じられないけどどうやらコレは現実らしいな。足も少し痛いし」

『夢なら痛くないはずだからな』と晃はまだ興奮さめやらぬ感じである。

「楓ちゃん楓ちゃん、わたし達もやってみようよ！」

「ダ、ダメですよ。そんなことしたらスカートが……だからダメですって！」

「ううーそういえばそうだったあ。なんで女の子だけスカートなんだろ。男の子もスカートにするべきだよ！」

いやいや、それは嫌過ぎるだろ。俺のスカート姿とか気持ち悪すぎて吐ける。晃は別だ。

そう文句をたれていた日向が急に『あ！』と言って手をポンと叩いた。どうやら何かを閃いたらしい。堂でもいいが、その仕草はちょっと古過ぎると思うんだよな、俺は。

「体操着を着ればいいんじゃない？ほら、今日体育あったからちようどもってるしね！」

「何を言ってるんですかあすかさん。確かにそれなら大丈夫かもしれませんが遮蔽物が何も無い所でどうやって着替えるんですか。それに翔さんもいるんですよ？」

晃はいいのかよいつっ！！

「そりゃあ恥ずかしいけどさあ、翔ちゃんには目をつぶってもらえばいいんじゃない？それに楓ちゃんは跳んでみたくないの？」

「それは……まあできることなら……」

こっちをチラチラ見る秋月。はいはい、わかったわかった。

「俺はあっち向いてるからその間に着替えちゃえよ。んで俺が見ていないのを晃に俺の向こう側で確認しといてもらえばいいだろ？」

「うん！ありがとう翔ちゃん！」

「じゃあ着替えちゃいましょうか」

そういつて二人はカバンを漁って体操着を取り出す。でも、着替え始めてしまう前に一つだけ質問。

「なあ、なんでさっきからお前らの話には俺の名前ばっかで晃の名前が出てこないんだ？俺が晃に見てもらうってことはあいつは目を開けてるってことだろ？」

俺が目をつぶってるにしろあいつらの反対方向を向いているにしろ、それを晃が確認するって事はそうゆうことになる。カマをかけてみたんだけど、見事に晃は目を開けてもいい感じの空気になっていた。そして俺の言葉を聞いた瞬間、ギクツと震える日向と秋月と晃。

「べ、別に他意はないんだよ！たまたまだよたまたま！」

「え、ええ。もちろん北条さんにも向こうを向いていてもらいますよ！」

「そそそそそうだぞ翔！なあんにも問題ないからな！！！」

うおお、晃の焦り様が半端ないな。まさかココまでとは。

「…ま、別になんでもいいけどさ」

そういつてクルツと後ろを向くと晃も横に並んで俺と同じ方向を向く。あいつらの着替えを見ないようにだ。

「じゃ、じゃあ着替えるからね。翔ちゃんも晃くんもこっち見ちゃダメだからね」

「わかったから早く終わらせてくれい」

俺がそう言うのと後ろから制服を脱いでいるのであろう音がしてくる。学校のツートップが俺の近くで、しかも振り向けば見える位置で着替えているなんて言ういつもなら確実にテンションがマックスになるような出来事だ。

しかし、今の俺には単なる事象としての価値しかない。

「…なあ。晃」

「な…なんだ？」

空を見上げながら会話を続ける。

「……鼻から上、額から下、こめかみよりも内側のあたりから熱い何かがこみ上げてくるんだ。……止め方を、知らないか？」

晃からの返事は無かった。でも別に期待していたわけじゃなかったからそのまま空を見上げたままである。俺の心内環境とは裏腹に空は青く澄み渡り、咎人をその罪ごと包み込むかのような包容力を俺に見せ付けていた。

ああ、気が付かなかった。きょうはこんなにも、たいようが、きれい——だ——

「終わったよー」

涙が出てくる理由は太陽を直視して眩しかったからだと自分を誤魔化すのはどうだろうか、と考えているうちに結構時間が経っていたらしい。

後ろを振り向くと、淡い黄色服を着た秋月、水色の服を着た秋月がそこにいた。しかもジャンプしたときにTシャツがめくれることを考慮したのか短パンの中に入れていたため胸が強調されているとか、袖から出ている腕が綺麗だとか、短パンのお陰でスカートの時にはよく見えなかった足が綺麗だとか、もうこの二人が誰のことが好きとかそんなことは関係なくこいつらの彼氏になるようなやつらは著作権侵害かなんかで取り締まられて一遍死んでみたほうがいいと思う。いや、でも晃に死なれるのは嫌だな。どうしよう……ビンタ40発くらいで勘弁してやるか。

おっと、言い忘れていたけどうちの学校には制服や体育着というものがない。一応標準服という制服みたいなものがあり、ほとんど

の生徒がそれを着ているが着用義務は無いので私服でもいいことになっている。ちなみに俺達はクリーニングに出しているとか、前日に雨が降って乾かなかった等の事情が無い限りそれを着ている。そして体育の時間は運動にふさわしいものならばなんでも可だ。

「じゃあ行くよおー」

む？俺がどこかの誰かにうちの学校について説明していたら何時の間にか日向と秋月は少し離れたところでジャンプの準備に取り掛かっていた。てかもう跳びそうだな。

「いっせーのおー…」

「「せつつっ！！！」」

声が聞こえたと思ったら二人がギューーーーーンと跳んでいった。いや、飛んでいった。

『キャー！』だの『イヤー！』だのが聞こえるがドップラー効果と共にそれも無くなっていく。

おー下から見るとあんなだったのか。二人とも足をバタバタしているな。

あの『龍球』って漫画の【まごごそら】と【クソソソ】も最初に【タートルマスター】の修行を受けた後はこんな感じだったのかな。

ヒューーと落ちてきてズダッ！ズダッ！

俺と晃の時と同じように地面がめり込んだ。ただやっぱり女の子だから俺よりも体重が軽いのか、めり込み度は俺が一番だ。どうやら晃も体重が軽いらしい。まあ、見るからに線が細いし。

「すごいすごいすごい！！わたしすごく跳んだよ！！」

「私もですよ！！」

二人でキャッキヤと騒いでいて全くその場を動かないため仕方なくこちらから声をかける。

「おいお前ら、どうだったー？」

その言葉を聞いて二人は俺達のほうに小走りで近寄ってきた。

「すごかったよ！！あのねあのね！翔ちゃんたちがすごくちっちゃく見えたの！！」

ふーん、コイツはテンション上がると語彙が少なくなるのか。さつきから何回も『すごい』という言葉、そしてそれを活用したものを耳にする。

「秋月はどうだった？足は痛くないか？」

「ジャンプして上がっていく時は怖かったですけど、降りてくる時は風がとても気持ちよかったです。足もそれほど痛くはありませんよ」

ニッコリしながらそう言う秋月は幾分冷静らしい。日向は晃相手にまだすごいすごいと言っているみたいだ。

「でもまさか身体が軽く感じているとはいえ、ここまでの事とは思わなかったな。高くって言っても精々数mくらいだと思ってたよボク」

「なんというか…この世界では私達の常識は通用しないみたいですね。あれだけの高度から落下すれば普通命がありませんよ。どんなによくても足が粉砕骨折するレベルの高さでしたから」

「ああ。着地点を見るとどうやら体重が減ったわけじゃなさそうだから、単純に俺達の肉体が強化されたのかもな」

「そうですね。落下速度もかなりのものでしたから重力が小さいという線も無いでしょうね」

「もうなんでもいいけどさ」

軽く溜息をついてからそう呟いた後、ふと思いついた。

「あれだけ高く跳べるって事はさ、もしかしたらメツチャ早く走れるって事かな」

「…そう、ですね。上に跳ぶ力を前に進む力にすればいいだけですし、その可能性は高いと思いますよ」

少し考えたそぶりを見せてから秋月は答えた。

「そっか。後で試してみよっと」

本当は今すぐ走ってみたいんだけど、とりあえずいまだに騒いでいる日向をなだめてからさっさと町に向かわなきゃいけないし。試すのはその最中でもいいだろう。

「なにはともあれ、とりあえずさっさとあいつらを回収して町に向かうか」

そう言って歩き始めた俺に、『はい』と返事をして秋月がついてくる。どうでもいいけど、この男のちょっと後ろを歩いてくれる感じがなんとなくいいね。さすが大和撫子の化身なだけある。

近寄って声をかけると先ほどに比べて少しは興奮が冷めた様子の日向が返事を返してくれた。

「そろそろ行こう。いつまでもここではしゃいでいてもしょうがないからさ」

「うん、わかった！ よーし、ぜんそくぜんしーん！！」

「……幼稚園児かお前は……」

「ブブー。わたしは親が共働きだったから保育園でしたー」

実は全然冷めてなかった日向が幼児キャラで先頭を歩く。なんかもう似合いすぎだ。

そこでなにやら黙り込んでいる晃に気付いた。怒っているとかではなく、どうやら何かを考え込んでいるようだ。

「どうしたんだ晃。なんかあったのか？」

「……え？ あ、いや、なんでもないぞ。なんでも」

「そっか。ならいいけど」

そういつて歩き始める晃。すでに日向と秋月は進んでいるので俺が一番後ろになった。

まあ本人がなんでもないと言っているのであればわざわざそれを聞くこともあるまい。面倒だし。なんかあれば自分から話すだろうし。そう思って俺も三人に着いていく。

——あ、そういえば。

「おい、日向と秋月。お前ら着替えなくてもいいの？そのまま人がいるところに行くのはどうかと思うんだけど」

歩みを止めて『あ、忘れてた』などと日向が呟く。『着替えるからもう一回向こう向いてて。あ、晃くんもね』とも。

俺は再び後ろでうちの学校のツートップが俺のすぐ後ろで着替えているんだけど振り返ることが出来ないなんていう天国なのか地獄なのかよくわからない状況を味わい、『もう嫌われてもいいから後ろを振り向いてしまおうか』と真剣に考えている横で晃もやはりまだ何かを考え込んでいるような表情をしていた。ただし、俺はそれ以上首を動かす事が出来なかった。なんだかんだ言っても俺はチキンだ。

俺が悩んでいる間に日向と秋月が着替え終わってしまい、別に振り向こうと決心していたわけじゃないけどなんとなく惜しい気持ちになった後、俺達は予定通り街に向かっている。配置はいつもの通り、俺の横に晃と日向、ちょっと後ろに秋月だ。

「今から行くところってどんなどころなんだろうね！」

遠足にきている小学生的なテンションの日向がまだ見ぬ地に思いを馳せながらパタパタと騒いでいる。元気なやつだ。

「俺としてはごく普通の町並みであって欲しいよ。これ以上理解不能な出来事が起こって欲しくない」

「でもそういう時に限って続くもんなんだよ。起こって欲しくないことなんてものはさ」

見た感じいつもどおりの晃が俺に返事をする。悩みは解決したのだろうか。

「あのなあ、人の願いをたやすく打ち破ってくれるんじゃないよ。俺だって世の中の理不尽くらいわかってるよ。それでも俺は希望を

もっていたいんだ」

「でもなんだかワクワクしませんか？前の世界じゃこんなことありませんでしたし」

やっぱりニコニコしている秋月が答える。順応性がいいなおい。君はもつと現実的な子かと思っていました。

「でもそうは言っても翔ちゃんも楽しみなんですよ？」

「そりゃ、まあね」

俺だって男の子だし、やっぱり『異世界』とかには憧れはある。だからこそゲームなんていう人生には全く必要の無いものを買って遊んでいるわけだし。

「けどさ、いくら楽しみつつつても限度があるんだよ。ここは何が起こるかかわかんないんだぞ？『切捨御免』的な感じでいきなり殺されても合法的な世界だったらどうすんだよ」

「考えすぎだよー。むしろ『生類憐れみの令』で保護されるかもよ？」

「なんでだよ！俺達は犬扱いなのか！？」

「じゃあ国民保護法？」

「国民じゃないだろ！どっちかつつたら外国人だつーの！」

「もー翔ちゃんはわがままだなあ」

「……………」

こんな感じで自分で言うのもなんだがアホな会話をしていると、何時の間にか俺達は二つのグループに分かれてしまっていた。つまり、普通の速度で歩く秋月、晃と、割とゆっくり目に歩く俺と日向。今は下校の時とは違ってわざと速めに歩いていたわけじゃないからだ。俺達はバカ話を、表情を伺うにあいつらはちよつと真剣そうな話をしている。

けどまあ前二人の邪魔をするのもあれだし、それに二人が何を話しているかなんて事より気になることがある。

「なあ日向」

俺が呼びかけると日向が『なあに?』と笑いながら返事をした。どうでもいいけどどうして日向といい秋月といい晃といい、こいつらはこんなにいっつも笑っていられるのかね。思い出してみれば大体俺と話している時のあいつらは笑っている。そんなに俺の顔が面白いのだろうか。それとも別に何かあるのだろうか。

ま、あったとしてもずっと笑顔とか無理だけどき。三分で顔面がつりそうだ。

「日向はあいつらの話に参加してこなくていいのか?」

「うん。大事な話だったら後で教えてくれるだろうし、なんにも無かったらわたしが知らなくてもいい事って事なんだろうしね」

俺としてはあいつらが二人っきりで話していてもいいのかという意味だったんだけど……まあ日向がいいならいいか。もしかしたら『敵に塩を送る』とかそんな感じなのかもしれない。

「じゃあもう一個質問なんだけどき、なんでそんなに気楽そうなの?」

「え?なんでそんなこと聞くの?」

「なんでって……だって俺達よくわからんどこに來たんだぞ?『これからどうなるんだろう』とか『ちゃんと帰れるのかな』とかないの?」

この質問は何も日向だけに限ったことじゃない。秋月と晃もだ。

普通の人だったら帰り道に良くわからないことが起きて何時の間に草原にいました、なんてことになったらもっと焦るんじゃないか?少なくとも俺はそうだったし。

にも関わらず、日向は暢気にシートの用意をしたり、あいつらもその後の話し合いのときも冷静そうだった。別段騒いだりする事も無く、ただいつもよりは真剣に話し合いをしたただけだ。

俺のその疑問に日向は、

「別に?全然大丈夫だよ」

と、微笑みながら答え、次いで少し歩く速度が下がりどこか陰のあ

る笑顔で話した。

「ううん、全然って事は無いなあ。……うん、やっぱり結構不安。わたし達が今ここにいて事に向こうの世界ではないってことで、『行方不明』ってことだから。多分あの時はまだ4時くらいだったから今は問題ないけど、明日になっても家に帰ってこなければお父さんやお母さんも心配してくれるだろうし。もちろんわたしのだけじゃなくて楓ちゃんと晃くんのもね。……それに家族みんながこのあとどうやって暮らしていくんだろうって思うと…ね」

……そっか。こいつらには心配してくれる親がいるんだっとな。別に妬んでいるわけじゃないけど、やっぱり心配してくれている人がいるってのは羨ましいことだ。

ってかこの子がそんなことまで考えているとは思わなかった。そこが一番ビククリです。

そしてそこで日向が破顔。にこやかになって『でもね』と続ける。

「ちよっと不謹慎だけど、結果的にわたし達みんなでいなくなっちゃえたのは良かったと思ってるんだ」
少し考え、俺が返答。

「……そうだな。確かに、いつも一緒に遊んでるメンバーでいなくなったのであれば、『集団家出』ってことになるだろうから、一人だけでいなくなるよりも世間的には大事にならずに済むのかもな」
もしくは親に黙っての旅行とか。ま、どちらにせよあまり長期にならなければ、親達にもガツツリ怒られるくらいで済むだろう。『長期にならなければ』な。

しかし日向は『確かにそれもあるんだけどー』と言っている。

「例えばね、もしいなくなっちゃったのが翔ちゃん、楓ちゃん、晃くんうちの誰か一人だけだったとするでしょ？もしそうなかったら多分、残ったわたしと他の人達は一生その人のことを忘れられないし、一生心から笑い合えなくなっちゃうよ」

……確かに、そうだ。
俺は想像してみる。

——もしあの帰り道、俺の目の前で、いや俺達の目の前で誰かが消えてしまったとしたら。

そうだったら日向の言うとおりの、大人になっても、爺になっても、きつとどうしてあの時俺は助けられなかったんだろうと後悔するだろう。

逆にもしここに来たのが俺だけだったとしたも、もつと絶望していただろうしこんなに前向きになれなかったはずだ。

「そう考えるとき、お母さん達には悪いけどこうやってみんなであつたのってすごく幸運な事なんだって思うの。——ううん、『不幸中の幸い』かな!」

——俺は。

日向のその率直な言葉が心に響いて、元氣付けられたような気がして、自然と笑みがこぼれて、でもそんな自分が恥ずかしくて、照れ隠しに日向の頭をグワシグワシと少し乱暴に撫でて、

「あううゝ髪がぐちゃぐちゃになるでしょおゝ」

文句はいいながらも『止めろ』とは一言も言っていないこのちび助になんとか感謝したくなって、手の力を弱めて、髪を手櫛で元通りにしながら、

「…ありがとう」
と言った。

「あう、う、うん。でも…なんで?」

「さあな。よくわかんない」

日向の頭から手を離し、両手を組んで空に突き出してうーんと背伸びをしてから一度だけ深呼吸。指がパキパキと心地よく鳴った。

「強いて言えばなんとなく、かな」

「も、もおーなにそれえー」

「だから今わかんないっていったろ？」

軽く笑いながら日向に返事をする。まあ仕方ない事だ、自分でも本当にわからないんだから。

目を前に向けると何時の間にかあいつらと結構な距離が空いていた。時々俺達のほうを振り向いてはまた話し始める。

はて、なんかさっきからチラチラこっちを見てるのは何でだろう——ん？なんだ、俺達二人じゃなくて日向を見てるのか。

「あの、さ、翔ちゃん。その、た、大切な話が……日向、なんかあいつらお前に用があるみたいだぞ？」

「……………」

「ん？なんか言った？よく聞こえなかったんだけど」

「なんでもないよ！！」

ええ……なんか怒られた。なんでやねん。

しかし例え本人は怒っていたとしてもタッタッタと走っていく日向の後姿は、小動物みたいでやっぱりなんとなく和んだ。出来る事なら走る日向を後ろからではなく前、もしくは横から見たかったな。理由は……………まあアレだよアレ。

その背中を見送って何気なくもう一度空を見上げると、そこには先ほどと変わらず青い空が広がっていた。雲ひとつ無い——やっぱりあったわ——雲はちらほらと、鳥が何羽か飛んでいる。ゆっくりと雲は流れて、『俺達の世界』よりも暖かな気候が俺達の身を包み込んでいた。時の流れすらも俺達に合わせて遅めに設定されているような気分になる。

……さっきはあの位の高さまで跳んだんだよなあ。

さっきとはまた別の色の鳥を見かけてそう思う。

すると当然の如く俺の心にはもう一度高く舞い上がりたいという欲求が生まれ、『思い立ったが吉日』という名言どおりにジャンプすることにした。どうせ他にやることも無いし。あいつらは話し込んでるし。

……一つだけ言っておきたい事がある。俺は今全く寂しく無い信じてくれ。

よっこい……しょっ!!

あー風が気持ちいいなーなんか嫌なこととか全部消えちゃいそうだなーっと。

上昇終了。ここから下を見て気付いた。さっきとは違って歩きながら、そしてすこし助走をつけてジャンプしたため真上ではなく少し前に行ってしまった、このまま行くと三人にぶつかる危険性がある。

下降開始。————ヤバイじゃん。

ヤバイヤバイヤバイ!! マジでヤバイ!!

テンパリ過ぎて『ヤバイ』以外の言葉しか出てこない。

そっか! 大声出せばいいんだ! ゴルフの『ファー』見たいな感じで、でも気付いたときにはもう遅い。今から息を吸ってから大声を出す間に恐らくぶつかる。

「—————っっ!!!!!!」

しかし、幸運の女神は俺を見放さなかったようだ。対象まであと5

m位の所で三人が歩みを止めた。どうやら俺に呼びかけたが返事がないことに疑問を抱き、後ろを振り返ったらしい。

そしてそのまま三人の目の前にズダンッ！

「「「キャア！」」」

俺は三人に背を向けた状態で着地し、聞こえた三人分の『キャア』。

………三人分？

「H A H A H A驚いたかいセニヨリータ」

とりあえず狙ってやりました感を出すために少しおどけてみることにした。

「驚いたに決まってるでしょ！！何をやってるの！？」

「何って…暇だからちよつと跳んでみたんだけど。ちなみに誰も怪我のないように計算してたから大丈夫さ！」

さわやかな笑顔とともにナイスガイポーズ。要するに縦にした握りこぶし十立てた親指。

「しれつと嘘をつかないでください！私達が歩いたままだったら当たっていたじゃないですか！」

「ところで話は変わるけれど」

「変えないでください！」

「えーい、落ち着きたまえ！」

がおーと吼えている秋月をどうにかこうにかなだめた後、この場をなんとか有耶無耶にするために晃に一つ、これまで何度もぶつけた事のある疑問をもう一度言ってみる事にした。いや、今日だけでも何度思ったことか。

「なあ晃。お前って…その…さ」

「なんだよ！！」

ああ、まだ怒っていらっしゃる。…って当たり前か。

でもこんなに怒ってる時にこんな茶化しを含んだ冗談なんて言ったら余計に怒っちゃうんじゃない？

どうすべきか………よし、言うか。

言わなかったら落ちてきたことを誤魔化せそうに無いし。まあ言ったところで誤魔化せると思えないけど。

でもそんなことより、俺はあいつをからかいたいんだ!!

「じゃあ…言っている？」

「早くしろよ！」

「前から思ってたんだけどさ、お前って本当は…男じゃないんじゃないか？」

「「「つつつ!!?!?!?!」」」

俺の突然の何の脈絡もない言葉が奴らに届いた瞬間、その場に静寂が訪れ、目の前にはなにやら衝撃を受けた日向、秋月、そして晃。風が吹き、それによりサラサラと草が音を立て、鳥がグアアーと鳴いているのが聞こえる。のどかな自然の音が俺の耳を癒す。

———逆にいえば、自然の音が良く聞こえるほどに静かだという事だ。

えと……もしかして俺……地雷踏んだ？

『はあ？何言ってるんだ翔は』

『だってさ、結構な頻度で「キヤア！」って言ってないか？お前』

『そ、そんなの勝手に出ちゃうんだからしょうがないだろ！第一ボクのどこが女なんだよ!』

『この前の女装だって似合ってたし』

『そう思ってるのは翔だけだよ!』

『なあ秋月、晃って女の子っぽいよな』

『そうですね。少なくとも翔さんよりは可愛らしいと思います』

『日向は?』

『うん!わたしもそう思うよ!』

『みんなそう思ってたの!?くそう、裏切ったな:ボクの気持ちを裏切ったな!』

——こんな感じじゃないの?今までずっとこんな感じだったでしょ?

この誰も言葉を発しない空気がとっても痛い。しかも俺が原因だし。しかもこの流れ:明らかに凶星をついちゃったっぽい感じだ。

つまりどうゆうことなんだ?と自問自答してみる。この状況で自問他答は無理だろうし。

晃はもともと女っぽい↓『キャア』という叫び声↓俺『男じゃないんじゃないか?』↓みんな無言↓つまり×××。以上。

てかなんで日向と秋月も無言?

いや、聞くまでもない。

——簡単な話だ。

それはつまり、あいつらも知っていたと言うこと。『何か』を。意を決して晃にその『何か』を聞いてみる。——『本当なのか』と。

でも俺が口を開く前に晃が、

「……お前の:翔の:……考えている:とおりだ……」
と、吐き出すように言った。

「俺の：考えている通り？」

無言で頷く晃。その表情はとても苦しそうだ。

それも仕方ないだろう。今まで自分の意志で黙っていたことを他人に知られると言うことは、とても辛い物だろう。しかも相手が友達であるならばなおさらだ。

事実、今のアイツの言葉は明らかに無理矢理搾り出されたものだった。そしてそこに色々な感情が含まれていることが感じ取れた。今後の俺達の関係や今まで俺に黙っていた事への罪悪感と後悔、俺の晃に対する反応への不安など。その他にもたくさんあるんだろうけど、恐らくこの三つが大きいんじゃないだろうか。

確かに俺だって隠し事をされていたのは悲しい。それもこの場を見るに、自分だけ。それに対しての怒りも僅かながらある。

けど、そんなことよりも俺は晃が心配になった。可哀想になった。この今にも泣きそうな【北条晃】という俺の友達が。

俺にだけ打ち明けられなかったのにも何か理由があるに違いない。そして多分、これまでずっと苦しんできたんだろう。その顔に笑顔を貼り付けて。こいつはそういうやつだ。

一体晃はどんな気持ちで俺に隠していたんだろう？

晃が今の言葉を口にするのにどれだけの勇気が振り絞られたんだろう？

この場で肯定せず、無理矢理にでも否定していればいつもみたいにくざけた空気にはなるだろうし、また今までの関係を持続できたはずだ。

でも晃はしなかった。

それはつまり——俺に、真実を受け入れて欲しいから。

いたい『何を』なのか。

それは、

『実は、【北条晃】は、女の子に興味がありません。男の子が好きなんです』っていうもしかしたら俺にも日向や秋月を彼女にする可能性がある希望的観測が事実、ってことだ。

だって俺のさっきの『お前って本当は…（心は）男じゃないんじゃない？』っていう質問を肯定したんだから。

それが『性同一性障害』によるものか、はたまた別の理由があるのかはわからない。

しかし結論は一つ。

あいつは自分の肉体が『男』で精神が『女』であることを黙ってたんだ——

「……俺が考えていることで……間違い、ないんだな？」

少しためらったそぶりを見せた後、晃は小さく頷いた。

「そうか……」

日向と秋月の方を見ると、俺に黙っていたことへの罪悪感からなのか視線を下へと逸らせている。けど俺はあいつらに聞きたいことがあった。だから、声をかけた。

「日向、秋月。お前らは知ってたんだよな。その………今のこと
を」

無言。頷くこともしない。……いや、出来ないんだろう。そしてもう一つ質問をする。

「お前らは……晃のこと……好きか？」
今度は二人とも即座に頷く。

———そうか。こいつらはこんなにも……晃のことを想っているのか。

俺の友達はやっぱりそんなことくらいで他人を差別するような人間じゃなくて、そのことがまるで自分のことのようにすごく嬉しい。これから晃が歩む道、そしてそれを追いかける日向と秋月が歩む道は多くの障害が立ちふさがる茨の道だ。法律や世間体など、これからあいつらを待ち受ける困難を数え上げればいくらでもある。日向や秋月が晃を茨が存在しない舗装された道に戻すのか、それとも茨を刈り取り晃を見守っていくのかはわからない。でもそのどちらの選択にせよ容易じゃない。

———そしてあいつらにはその覚悟が出来ている。

———そして、俺は。

「なあ、晃」

ゆっくりと喋り、ゆっくりと首を晃のほうに向け、ゆっくりと晃の顔を見る。

ああ……そんなに泣きそうな顔するな。そんなに心配しなくても

俺は――。

「俺は……晃のことが、好きだよ」

会話だけを見ればおかしい発言だ。『お前の考えているとおりだ』
と言われ、第三者にいくつか物を尋ね、『お前が好きだ』と言う。
でも、そんな言葉でも、晃には俺の思っていることが伝わったよう
だった。

「……本当…に？」

心なしか、声が女の子っぽく聞こえる。もしかしたら心が女であれ
ば肉体もそれに近づくのかもしれない。そう考えればこいつの体つ
きや香りが女っぽいのも頷ける。『精神は肉体に引っ張られる』と
いう言葉が成立するのならば、その逆だってありえるはずだ。心が
女なら、体つきや声までも、女のようにな。

「ああ。当たり前だろう？」
だって。

「――お前は俺にとって――大切なヤツ（友達的な意味で）
なんだからな」

そう言った瞬間晃が胸に飛び込んでくる。軽く、華奢な身体だ。
そして俺はしっかり受け止める。

「……今まで、隠して、て……ごめんな、さい…！」

俺の胸の中で泣く晃。正直、どんなにこいつが歪んでいても取り合
えず見た目可愛いので悪い気はしない。

ただ後ろの女の子二人がメツチャ怖い。さっきまでどんよりムード
だったのに、なんかもういつのまにかすっきり。今はシリアスな場
面なんだからこんな時くらい嫉妬なんて止めればいいのに。

でもやっぱり俺の胸の中で『…ごめんなさい…ごめんなさい』と繰り返している晃を見ると、自分でもよくわからない感情がこみ上げてきて、この泣いている男の“娘”を慰めるために右手を腰に回して左手で頭を撫でた。いつもの俺なら異性にも同姓にも出来ない芸当だ。

…後ろの女の子二人がバリクソ怖い。気付かなかった事にしよう。

そして今後のことを考えると今この時、俺には晃に言うておかなきゃいけないことがある。俺という存在が『障害物』になって二人に『刈り取られ』ないように。

「……晃。すこしは落ち着いたか？もし落ち着いたんなら……少しだけ、話しておきたいんだ」

晃は一応『ごめんなさい』は止まっていたもののまだスンスンと鼻を鳴らしていたが、俺の言葉を聞いてゆっくりと離れてくれた。

「その…多分これは言わなくても問題は無い思うんだけど…可能性はゼロじゃないから今のうちに言うておきたいんだ」

俺の真剣な声色が伝わったのか、晃は下を向いていた顔を上げ、無理矢理呼吸を落ち着かせようとしていた。目と頬には俺の服で拭った涙の跡がある。

……俺だって本当ならこんな時に言いたく無い。でも、もしこのまま言わないで大事になったら俺の身が危ないから……仕方ないんだ。

俺は自分で自分にそう言い聞かせ話し始めた。

「俺は、お前のことが好きだ。これは…本当のことだ。でも…」

「…でも？」

「でも……俺は…」

辺りが静まり返っている。草も雲も空も風も大地も太陽さえも俺の言葉を待っているかのようだ。

俺は意を決し、バツと頭を下げながら言った。

「……俺は……男をそうゆう対象に見ることが出来ないんだ！
」

「「「……………は？」」」

「もちろん晃が俺のことをそうゆう風に見ることは無いと思う！
だけどこれだけは言っておかなきゃって思ったんだ！」

「え、いや、ちょ…」

「確かにお前は男にしては可愛い過ぎるし、女みたいではある！
！でもさっき俺がお前のことを好きだって言ったのもそういう意味
じゃなくて…「ストップストップストップ！！！」」

俺が言い訳の言葉を続けていると晃がそれを止めたので、腰を折っ
たまま首だけ動かして晃を見る。

「……体も起こして」

言われたとおりに元に戻す。

「ちよつと聞きたいんだけど」

晃の今の言葉には進むのが茨の道なだけになにやらトゲがある気がする。
…そんなに俺に惚れるなよってことを言われるのが嫌だったの
かな。わかってはいたけどちよつとショックだ。

「……………今、君は、ボクの事を、どう思ってる？」

ああ、今ならちゃんとわかる。今の晃は女の子だ。声もそれっぽ
いし、何より一人称の『ボク』がより女の子っぽくなっている。や
っぱり晃にしてみれば、数ある一人称の中でも最も男らしいと言え
る『俺』という言葉を使うのには抵抗があったんだろう。だからこ
そ日頃から『ボク』って言ってたんだ。それにこの『ボク』という
一人称も、両手を腰に当てて眉をひそめて目をつぶっているこのし
ぐさも、今更ながら中々に似合っていると思う。

「何って…俺の友達、だけど」

「……少し聞き方を変えるよ。翔が『俺の考えてる通り?』って言った時は?」

ああ、その時か。そんなのアレだよ。言い辛いよ。

「……ちよつと失礼になるかもしれないんだけど」

「構わないから」

う、ちよつと怖い。でもまあ本人がそこまで言うなら。

「いやさ、俺の身近に『見た目は男! 頭脳は女!』みたいな特殊なヤツが本当にいたんだなあって」

『いや、頭脳っていうより心だよな。それに晃は見た目も女の子っぽい』と俺が話を続けようとしていると、晃は大きな息を吸って――

「ちが――――――う!!!!!!!!!!!!!!」

!

と、叫んだ。

「つつ、なんだよ急に叫んだりして! ビックリしたじゃんか!!」

「ちがうちがうちつつが――――う!!!!!! 全部ちがあう!!!!!!」

な、なんだよこいつ……超怖い。

俺は助けを求めるべく日向と秋月のほうを見たけれど、二人とも溜息をつきながら首を横に振っていた。

「いったい何が違うんだよ! あーもーわけわからん!!」

「翔が今考えてることが全部違うんだよ!!!!!!!!!!」

「わかったわかったわかった!! とりあえず落ち着け!!」

そう言って何とか騒ぐのだけは抑えたが、今だにフーフーと荒い呼吸の晃に質問する。

「よし、何が違うのかを教えてください。ゆっくりと、落ち着いてな」
「だあかあらぁー今翔が考えてること全部だって!!」

「だから落ち着けて。ほら、深呼吸深呼吸」

晃はスーハースーハーと体に新鮮な空気を送り込んで、……よし、どうやら今度こそ落ち着いたようだ。日向と秋月も何時の間に俺達に歩み寄ったのか、さつきより近くに在るが何も話す気はないらしく黙っている。しかしその目は何故か俺を非難しているようだ。

「あのね？ボクは、『女の子』なんだよ！」

俺を正面から見据えて晃が言う。けどそんなの今更だろ。

「ああ、そいつはわかってる。どこも違ってない」

実はお前が特異な体質だってことはさ。

でも晃は首をブンブンと横に振る。まるで『そこが違う』と言わんばかりだ。

「そこが違う！」

あ、言われた。

「ボクは！心も！身体も！女なんだよ！……!!」

ん？

心も…『身体も』？

いやいや、聞き間違えだろう。うん。もしくは『頭も』の言い間違いさ。

「え、ちょ、え、マ、マジで？」

頷く晃。

「あの、ホントに、生物学的に女？XX染色体？」

頷く晃。

「【北条晃】 っていう第三の性別とかそんなんじゃないかって？」

頷く晃。

「えっと…今日の前にいるのが女？」

頷く晃。

「…さっきまで俺の胸で泣いてたのが？」

ちよつと恥ずかしそうに頷く晃。

「…俺が女の格好をさせた時も？」

頷く晃。

「…告白の真似をさせた時も？」

かなり恥ずかしそうに頷く晃。

「…最後にもう一回だけ。今俺の目の前にいる【北条晃】の性別、は？」

軽く息を吸って

「女」

と、答えた。

「マジでかあああああああああああああーーーーー」

俺はその場で膝から崩れ落ち、地面を思いっきりぶん殴る。ものすごい音がして地面が抉れるが、今はそんなくだらないことを考えている余裕はない。

だって、

俺は、

今、

これまでのことを、

振り替えていたから。

「あの…翔？大丈夫か？」

「ダイジョバナイ！！！！！！！！」

!!
何で俺はもっと更衣室であいつのことをジロジロ見なかったんだ

!!
どうしてアイツが着替える時はいつもコソコソしていたのにもか
かわらず俺は何も気にしてなかったんだ!!

!!
どうして夏でもTシャツの下になんかシャツを着ていた事を不信
に思わなかったんだよお!!

!!
ってゆうかじゃあ俺は今まで男2女2じゃなくて、男1女3なん
ていうハーレム状態だったのか!!!

!!
気付きたくない真実に気付くたびに地面を殴っているからドンドン
掘れていくけどそんなことはどうでもいいんだ!!

「ち、ちよっと翔ちゃん！止めて止めて！」

「土が！土がすごい勢いで飛んできます！」

「翔！ちよつと落ち着いてつてば！」

「こんな状況で落ち着いていられるかああああー！！！！！！」

!

今度は俺がなだめられる番になった。

夢にまで 見た光景を 作り出す

「……いやいや、すまなかったねえみなさん。ご迷惑をおかけしました」

ペコリとお辞儀をする。俺の人生で最も衝撃的だったと言える事実をどう受け入れるか苦心した結果、どうにか『これからもたくさんチャンスはあるじゃないか』ってことで自分を納得させることに成功した。こうなった以上そんなチャンスが本当にあるかどうかはわからないけど。

「……ねえ、翔ちゃん」

「うん？」

「晃くん……ううん、もう普通に呼んでいいんだよね。晃ちゃんのこととはもう大丈夫なの？」

どこか不安な様子で声をかけてきた日向の言葉は微妙な言い回しでわかりにくい。

「大丈夫ってどういうこと？」

「え？ いやだから晃ちゃんが本当は女の子だったってことを、もう受け入れられたのかなって思ったの」

なんだ、そんなことか。

「まあね。もともと女だったら良かったのについて思ってたつてのものもあるし、何より俺は最初晃をオカマってことで受け入れたんだぞ？ だったらちゃんと女の子だったって事のほうがまだ受け入れられるし、何よりそっちの方が嬉しい」

あ、ヤバイ。思わず本音が二個くらい出てしまった。どうやら俺も案外まだ冷静じゃないみたいだ。だがしかしそれほど興奮状態と言うわけでもない。つまり『冷静と情熱のあいだ』というわけか。日向は俺を一睨みすると、『じゃあもう一つ』と今度はまた別の感

情の不安さで続けた。

「……わたし達には何にもないの？」

「はあ？ 何で俺がお前らにプレゼントしなきゃいけないんだよ」

「そうゆうことじゃないよ！」

ああんもう何が言いたいのかさっぱりわからん！……なんだよ秋月、お前も似たような顔をして。

「……その、私達が晃さんが女の子だと言うことを前から知っていたという事は、もう翔さんも気付いていますよね」

「ああ。けどそれがどうしたの？」

「いえ……その……隠し事をしていた私達に何か……罰でもあるのではないか、と……」

ああああ！ そうゆうことか！ てか『罰』っておい。一体俺をなんだと思っっているのだろうか。

シュンとしている日向、秋月と、その横で申し訳なさそうにしている晃。なんかみんな保護欲をかきたてられていい感じだ。荒んだ心が潤される。

……ふむ、ここで『なんにもないよ』って答えるのはまあ本心だし、そうしたほうがいいかもしれん。

しかあし！！ 今なら何でもお願いを聞いてくれそうな気がする！！
こんなチャンスを見すみす見逃す手は無い！！ さっきそう誓ったんだ！！ まさかこんなにすぐ訪れるとはなウハハハ！！

「そうだな。俺は深ああーく傷ついた」

ビクツとする小動物達。別に晃に言っただけは無いんだけど……まあいいや。この際巻き込んでしまおう。

「そこでこの傷を癒すために一つ、お願いを聞いてもらいたい」
「お願い……ですか？」

そうだ、と大きく頷く。

「なあに、そう難しいことではないさ。いつもやってる罰ゲームみたいなもんだからな」

それを聞いて今度は身体をビク“リ”と震わせる小動物達。俺の声色と『罰ゲーム』という言葉で俺が本気で怒っているわけではないのは理解しただろうが、それでもこれから怒ることを想像するとやはり身体が勝手に震えてしまうらしい。

————『罰ゲーム』。そう、それは俺達が何かにつけて使う言葉だ。例えばそれはトランプやUNOの勝敗であったり、テストの順位だったり、5文字以上10秒以内しりとりだったりするが、たいていはビリだったやつが1位のヤツの言うことを何でも聞くと言うものだ。

軽ければ『ジュースを買って来い』、『弁当のおかずをよこせ』程度、でも重ければもっと大変なことになるのである。

「もっと気楽になんなよ。今回はそこまで重くないからさ」その言葉で少し安心したのか、三人はほっと息をつく。

「えっとそれで…いったい何を…?」

それでもやっぱり不安そうな秋月の質問に俺は満面の笑みで答えた。
「衣服の交換だ!!!」
と。

「…………と、いうわけだ」

「「ええええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」

俺が罰ゲームの詳細を伝え、更にどのように交換するかを言うところまた大きな声があがった。

「いや、何もそこまで叫ばなくてもよくない？」

「叫ぶよ！そんなの絶対恥ずかしいじゃん！！」

「どこがだよ。別に素っ裸にするわけじゃないだろ？」

「そういうばなんでボクまで罰ゲームをしなくちゃいけないの！？」

「そんなもん成り行きに決まってるだろうが！それでもお前だけ少し軽くしてやったんだから甘んじて受けろ！！」

「本当は別に傷ついてなんかいないでしょう！？嘘をつかないでください！！」

「嘘じゃなあああーい！！俺の壊れやすいガラスのハートはもうブロークンなんだよ！！」

「翔ちゃんの心は超強化ガラスだから簡単には壊れないの！！それに絶対翔ちゃんエッチな目で見るでしょ！！」

「――ふっ。何を言っているのやら……」

……いつもの俺ならこんなこと言われれば、たとえ本当にそうだとしても『そんなことはない！』と否定する。

しかあし！！そんなことはもうやめた！！俺も自分を偽らないことにしたんだ！！別に嫌われてもいいもん……いや、やっぱそれは嫌だけどさ、今なら大丈夫なはず！！世の中ノリとテンションだ！！

「そんなもん……当たり前だろうが！！！！！！」

「「――っ！！！！！！」」

俺の気迫におされたのか、三人が静かになる。

「男1女3のこの状況で、しかもその女は最高クラスなんだぞ！？そうゆう目になるのは男の性だ！！！！」

そういうながら俺は空を見上げて力強く主張する。これはもう世の中の全ての男に共通する願望だ。いや、特殊な性癖のヤツはそうでもないのか。

「「「……………」」」

……………ん？ 反応がないな。またギャーギャー言ってくると思ったのに。

「どうしたみんな。なんか面白いもんでもあったのか？」

「い、いいいいやなんでもないよ！！そ、そそれじゃあ着替えてくる！！」

日向がそう口にするや否や三人ともピューと走っていく。うん、どうやら俺達は高くジャンプできるだけじゃなく予想通り速く走れるみたいだ。これでまた一つ俺達の特殊能力が証明された。

そう思いながらぼんやりと三人の後姿を見ていると晃が振り返り、

「あっちむいてろおおー」

と叫んできた。

まあ、いくらさつきエロをオープンにしたとしても流石に堂々と見る度胸は無いので渋々後ろを向く。

すると自然に目の前に俺が作ったと思われるクレーターが目に入り、考える。

ふむ、つまり力も強くなったってことか。もうなんでもありだな。そう思うとなんとなく考え事をするのがバカらしくなり、空を見つめてボーっとすることにした。じゃないとまた『振り返っちゃおうか』と考えてしまいそうだったからね。

あ、鳥だ。

お、あの雲なんか犬っぽい。

ソフトクリームが食べたい。

「ああ……ソフトクリームの雲がウンコにい……」

「し、翔ちゃあん。着替えたよお」

ポーっとしている間に三人とも着替え終わり、なおかつ俺の後ろにまで来ていたらしい。たったの三文にどれほどの時間をかけたんだろう俺は。

俺は目の前に現れる三人の姿を瞼に焼き付ける準備をしつつゆっくりと後ろを振り返る。

そしてその先には、

秋月の体操着を着た日向と、

日向の制服を着た秋月と、

秋月の制服を着た晃が

恥ずかしそうに立っていた。

詳細を説明しておこう。

俺は日向に自分の黄色の体操着ではなく、秋月の水色の服を着るように命じた。理由？そんなの簡単だ。

日向は自分の胸の大きさが規格外な事を当然自覚している。だから普通服を着る時はその凶器が目立つような服、つまりTシャツのよな服ではなくゆったりとしたものを選ぶ傾向がある。私服なんかだとそれがよくわかるね。

そしてそういった服をどうしても着ることが出来ない時、つまり体育の時なんかは仕方なくTシャツを着ているが、それでもやはり少し大きめの物を着用しているみたいだ。

でも実はそれだけでもかなりの破壊力なんだよな。さっきその威力を再確認したから良くわかる。

しかし、そこで秋月の服を着せたらどうなるだろうか。

秋月だって十分なほどの凶器を保有している。でも日向ほど目立つものではなくあくまで平均より結構上っただけであり、つまり秋月の服は日向の服よりも幾分サイズが小さめだ。

そしてそんな自分に合わない服を着ている日向は。

胸のせいで、いや、胸のおかげで服が持ち上がったことで時々シャツとズボンの間に肌が見え、

しかもその胸を隠すために両手を胸の前に持って来てはいるが、ぶっちゃけそんなことをしているから胸が押さえつけられたことでより一層存在感が増していて、

俺は感動で涙が溢れそうになった。

俺は秋月に自分の制服を脱いで日向の制服を着るように命じた。理由？そんなの簡単だ。

なぜなら制服は、さっきの体操着の話とはまるっきり反対なだけだからだ。

確かに日向の制服の上、つまりブレザーなんだけど、それは先ほどの体操着の件と同じ理由で大きく作られているようだった。スラッとしている秋月がそれを着る分には何ら問題ないし、『ブカブカの服を着ている』という状況に持っていくには少し小さすぎる。諺的には『帯に短し襷に長し』だ。

けどそんなことはどうでもいい。俺にとって大切なのは制服の下、つまりスカートだ。

なんども繰り返し言うが日向は小さい（一部を除いて）。胸が大きいのも太っているからではなく、単に神様からの贈り物なんだろう。ってことは要するに日向のスカートは上と違って大きくする必要がないわけだ。

じゃあその普通よりも小さい人が着用しているスカートを、普通の人が着用したらどうなるのだろうか。

当然————短い。

そしてそんな服を着ている常人よりも足が長い秋月は、その表情は予想通り羞恥心で心底赤くなっている。

上半身はほぼ変わらない。精々ブレザーが少し大きいだけだ。そして下半身。

本来であれば膝が見える程度の長さであるはずの秋月のスカートは、自分のものではない短いスカートを履いているため、

いつもはさほど見られない秋月の白く綺麗な足が露になっており、それを隠そうとしているため前かがみになっていて、

前面のスカートを無理矢理伸ばそうとしているということは、

俺がこちら側にいることが本当に本当に残念だけど、

もし後ろから秋月の姿を見ることが出来たらと思うと、

俺は感動で涙が溢れそうになった。っていうか溢れてるかもしれない。

俺は晁に秋月の制服を着るように命じた。

晃にも言ったとおり、もともとこの罰ゲームは日向と秋月のためのものだったので、晃にはそれほど恥ずかしい格好はさせなかった。でもそれでも晃自身はそうは思っていないのか、他二人ほどではなくとも顔が赤くなっている。

以前にも晃には女装をさせたことがあるためさほど新鮮味があるわけではないが、やはり目の前の【北条晃】という人間が正式に女だったということ知る前と後では感慨深さが違った。

こうしてみると晃は本当に女の子だったんだなと痛感する。

横にいる二人の美少女にも劣らない容姿だし、雰囲気も女の子のソレだ。

胸は……正直そこまであるようには見えないけど、それはそれでいいと思う。何も俺は巨乳フェチというわけではないのだから。

秋月の少し長めのスカートを履いているため足はそれほど見ることが出来ないが、それでもその簡単に折れてしまいそうなほどの細さや傷なんてありそうに無い肌も、男のものとは全く違う。今まであいつはどんな時も長ズボンを履いていたから見るのは初めてだった。それに靴下も男物だったからさ。

——ああ、身近に、本当に身近に、こんな可愛い子がいたのか。

俺は感動で涙が溢れそうになった。もういいや、溢れろ！！

「お前ら超グッジョブ……いやむしろゴッドジョブ……神の所業……」

俺は感動で声を震わせ、ナイスガイポーズをしながらそう言った。この時ばかりは視界を塞いでしまうという愚を犯して左手で両目を覆い、もし流れてしまってもバレないように下を向いてしまったのだが、そんな俺を責める事は何人たりとも出来やしない。

「ううゝすつごく恥ずかしいよおゝ」

「……私もです」

「……まさか翔がここまでぶっちゃけるとは思わなかったよ」

「晃ちゃんはまだいいじゃん！普通の服なんだからさ！」

「ボクだって十分恥ずかしいんだよ！今まで翔の前ではずっと男の子の格好してたんだから！」

「それでも私達に比べれば大した事ないでしょう！？それに、元はと言えば私達がこんな格好をする羽目になったのも晃さんのせいじゃないですか！」

「なっ！それを今言うかな！？ボクだって好きで黙ってたわけじゃないの知ってるでしょ！？」

「それとこれとは関係ないよーだ！！わたし達の分まで晃ちゃんが罰ゲームをやればよかったんだよ！！」

「ふんっ、なーにを言ってるんだか。楓はともかくあすかが恥ずかしいのは自業自得だよ。あああ！！胸が小さくて良かった！！！」
俺の目の前でギャーギャーと騒いでいる美少女三人。日向と秋月は既に色んな場所を隠すことを忘れて言い争っている。

多分このまま3時間は見続けていられるだろうが、そろそろ空も暗くなってきたし、さっさと町に行かないと野宿する羽目になってしまう。

俺としては美少女三人と野宿とか最高にハッピー。でもあいつらのことを考えると流石にそれを現実にするわけには行かないので取り合えず声をかけることにする。

「おーいお前r——」

「何っっ！！」「何さっっ！！」「何ですかっっ！！」

うおおお……………超怖い。けど僕は負けないよ！

「水を差すようで悪いんだけどそろそろ歩き始めないと不味いぞ。日が落ちそうだ」

三人はハッと気付き、徐々に日が傾き始めている空を見上げ、それから渋々と静かになった。だがその目は自分以外の二人に注がれ、まさに『三すくみ』を体現している。

「よし、じゃあまた後ろを向いてるからさっさと着替えてくれ。そしたら出発だからさ」

「「……………え？」」

ん？何その反応。

「…もう着替えていいんですか？」

「なんだお前ら、着替えたくないの？」

「そうじゃないんだけど…もしかしたら町に行ってもこのままなのかなって思ってたから」

秋月の言葉を引き継いで日向がそう言うと、秋月も晃もコクコクと首を振っていた。

「町の中にその格好で行かせるわけ無いだろう。このまま行っただとしても直前で着替えさせるっての」

「どうして？」

心底不思議そうな顔をしている三人を代表して晃が俺に尋ねる。ってかホントにこいつらは俺のことを一体なんだと思っているんだろう。

「そんなの決まってるだろう？あっちに行ったら男がいるじゃないか。そんなもったいないことが出来るか！いや、出来るわけが無い！」

グッと拳を握りつつ反語表現を用いて強調する。そう、こんな恥ずかしい格好をしている三人を他の男に見せたくなんて無いんだ！

ま、それはこの世界に男女の区別があれば、の話なのだけれど。

「…ふ、ふゝん」「…そ、そうですか」「…へ、へえゝ」

ん？なんだか微妙な反応。

まさか…独占欲が気持ち悪いと取られちゃった！？

……だって…仕方ないじゃないか!! 確かにこいつらは俺の彼女でも何でもないけど……でも夢を見たっていいじゃないか!! 取り敢えず心の中だけで未成年の主張をおさえ、軽く咳払いをして事態の收拾を図ることにする。

「ほら、何でもいいからさっさと着がえて…「あの!!」」

うお! ビックリした! 急に叫ぶなっての!

「な、何だよ秋月。腹が頭痛?」

「その…翔さんがどうしても言うのなら…」

……クッ!! 俺の渾身のボケはスルーか!!

「えと…町まで!…でしたら…別にこの格好でも…」

———え?

「……マジで?」

「ですから…翔さんがどうしても…」どうしてもだ!!!」

——ヤバイ、まさかの奇跡が起きた。

どうして秋月がその気になったのかはわからない。けどそんなことはもう今の俺にとっては蚊の屍骸ほどの価値もない。

これはまさか……『天使の施し』か? 『天使の施し』なのか!? もしそうなら俺は手札を2枚——この場合は二人? ——諦めなきゃいけないんだけど……秋月だけでもそう言ってくれるんならそれでいいよね!!

「……秋月」

そう言いながら秋月を正面から見据え両手を肩に乗せる。

「は、はい」

「…………お前は俺の…………天使だ」

「――!?!」

「さあ行こう!! 一緒に楽園(町)へ!!」

もう俺自身テンションあがりすぎて何を言ってるのか自分でもさっぱりわからんけどもうこの際関係ないよなキャツホオオオーイ!!

俺が秋月と肩を組んで(そんなことしたら短いスカートを履かせた意味が無いのに)町に向かって歩き出そうとした、

「「待つて!!」」

と、背後から二人の声が聞こえた。

「……なんですか?」

秋月の不機嫌そうな言葉に続いて俺が『何だいベイビー達?』と爽やかに決めようとする前に日向と晃がおっしゃった。

「わ、わたしもこのままでいいよ!!」

「ボ、ボクもだよ!!」

――――え?

「……マジで?」

コクリと、首を動かす二人。

――ヤバイ、まさかの奇跡2連発。

例によって例のごとくどうして日向と晃もその気になったのかはわからない。けど理由なんてもう今の俺にとっては他人の鼻水ほどの価値も無い。

これはまさか……『死者蘇生』か? 『死者蘇生』なのか!?

これはとっくの昔に禁止カードになっているはずなんだけど……

もうなんでもいつか!!

「……日向……晃」

そう言いながら二人を正面から見据え、右手を晁の左肩に、左手の日向の右肩に乗せる。

「な、なにかな？」

「う、うん」

「……一緒に……生きよう」

「――！？」

「さあ行こうみんな!! 楽園(町)で平和に暮らそうじゃないか
! ! ! ! !」

もうさつきから自分が何言ってるのか全くわからん。酒に酔ったみたいになつてゐる俺を冷静に見つめる俺が心の中に居る気がしないでもないかもしれない。

『ワッハツハツハ！』と笑いながらポワーンとした三人の女の子を連れている俺は傍から見たら相当ヤバイんだろうけど今の俺には関係ないんだぜイヤツホオオオーーーーーーイ！！！！

俺達はみんなで肩を組んで楽園を目指して歩き始めた。

異世界で 生き残る術 考える（前書き）

この小説ではことあるごとに視点が切り替わります。

それを皆様がどう思われるか分かりませんが、今後も様々な主要キャラクターが進んでいきます。

どうか、ご了承下さい。

異世界で 生き残る術 考える

『たまには別視点もいいんじゃないかな
〜あすか〜』

なんだかんだであの服装のままわたし達は町の入り口付近まで来て今こっそり着替えてる最中なんだけど、後ろにいる翔ちゃんが『俺は何を言ってたんだ……』とかなんとか色々つぶつぶ呟いてるのがちよつと不気味。でも確かにさっきの翔ちゃんはいつもと違ってたなあ。いつもの翔ちゃんならあんなこと言わないのに。

楓ちゃんをその……て、て、天使なんて言っちゃったりなんかしちゃったりしちゃってさ！ズルイよ楓ちゃんだけ！わたしも『一緒に生きよう』って言ってもらったけど晃ちゃんと一緒にだったし、どっちかって言えば天使の方がいいよ！

……あ、でも取り方によってはプ、プ、プロポーズみたいにも聞こえないかな！？

っていうか何で楓ちゃんは『このままでもいい』なんて言っちゃったのかなあ。おかげでここに来るまですっごく恥ずかしかったよ！翔ちゃんはニコニコしてたけど。

……ううん、でも楓ちゃんが言わなかったらわたしが言っちゃってたかも。もしくは晃ちゃんが。

だって好きな人に『他の男に見せたくない』なんて言われたらやっぱり女の子としては舞い上がっちゃうし、その人が喜んでくれるならたいいのことならやってあげちゃおうと思っちゃうし。

それにしてもわたしより恥ずかしがりな楓ちゃんがよくあんなこと最初に言ったよねー。

「おーい、まだかー？」

あ、色々考えててわたしだけまだ着替え終わってないや。

「待ってー。もうちょっとー」

みんなを待たせちゃダメだし早く着替えちゃわないと。

――よし、終わり！

「ごめん、もういいよー」

クルッと翔ちゃんが振り返る。見た感じはあのいつも『かったるい』とか『めんどくさい』とか言ってる翔ちゃん。

「よし、じゃあそろそろ中に入るからな。あと、周りのものが珍しくてもあんまキョロキョロしないようにな」

「どうして？」

「決まってるんだろ。周囲の目が恥ずかしいからだ」

“女の子の” 晃ちゃんの質問の答えで確信した。やっぱりいつもの翔ちゃんだ。

「わかったな、日向」

「なんでわたしだけ名指し！？」

「お前が一番キョロキョロしそうだからだ」

……うう、少しは自覚してるから言い返せない。楓ちゃんと晃ちゃんは笑ってるし。

「よっしゃ、行くとするか」

わたしは少し走って翔ちゃんの右隣に並ぶ。たいてい四人で歩く時はわたしが右、晃ちゃんが左で、楓ちゃんがわたしと翔ちゃんの少し後ろくらいに並んで歩くんだけど…今見たら晃ちゃんじゃなくて楓ちゃんが翔ちゃんの隣にいる。

なんかホントに楓ちゃんどうしたんだろ。『こっち』に来てから積極的になってる気がするなあ。晃ちゃんが少し不機嫌そうだけど

……まあ、いつか。私の位置は変わらないし！

「どんな所なんだろうね！」

「うーん、こっから見る限りだとちゃんと人っぽいのがいるぞ。

結構沢山」

「ふーん。相変わらず翔は目がいいね。ボクなんて何かが動いてるようにしか見えないよ」

「まあ両方とも2・0あるから。昔から目だけはいいだ」

「じゃあ耳や鼻は悪いんですか？」

「いやそりゃお前：言葉の綾ってやつだよ。目以外も大丈夫だつて」

「クス、わかってますよ」

「でも翔ちゃんって結構聞き間違えとか多くない？」

「そうかあ？自分ではあんまり気にならないけどなあ」

「この前わたし達が遊ぶ時に、わたしが駅の『待合室』で待ち合わせて言ったのに『抹茶アイス』と間違えてずっとアイス屋さんを探してたよね」

「そんな誰でも間違えるだろ！似すぎだよ！」

「文脈から把握しなよ。そういやボクが罰ゲームで『ショートケーキ』を買ってきてって言ったのに『消毒液』を買ってきたこともあったよね」

「え、いやだからお前それは…」

「『手持ち無沙汰』を『手持ち豚さん』と間違えて『そんなのがいたら可愛いだろうなあ』とも言っていましたよね」

「あーもううるさいうるさい！全部お前らの滑舌が悪いんだよ！」

「……まあそれならそれでいいけどさ、じゃあ言い間違えはどうするの？翔はそっちも良くあるけど」

「言い間違え？てかさ、聞き間違えもそうだけだそんなもん誰にでもあるだろうよ」

「否定はしませんけど、翔さんは頓とみに多いと思いますよ」

「そんなことはないっしょ。俺は将来アナウンサーになれるんじ

やないかってくらい早口言葉が得意だぞ」

「違う違う、言葉を『噛む』んじゃなくて『間違える』んだよ。例えば……わたしが覚えてるのだと、お地藏様に向かって『なんまいだ〜』じゃなくて『南無阿弥陀仏!』って言ってたよね。しかも全力で」

「ボクは『アディオス!』じゃなくて『アディダス!』って言われたことがあるよ。しかも全力で」

「数学の先生に指された時に証明問題の答えを『〜です』じゃなくて『〜である!』と言っていたこともありましたっけ。しかも全力でした」

「……わかった。俺が悪かったからこれ以上封印した記憶を呼び覚まさないでください」

やっぱりわたし達の会話ってどうしても翔ちゃんが話の中心になっちゃうことが多いなあ。考えてみると結構な割合なんじゃないかな。えっと……多分7割くらいだ。

……っていかいつの間にわたし達はいつもの会話になっちゃったんだろ。ホントならもっと緊張してなきゃいけないはずなのに。

「おお、結構賑わってるなあ」

お話とか考え事とかに気をとられて気付いてなかったけど、もうかなり町の様子が見えるところまで来てた。え〜っと、なんか木で作られた開くのが大変そうな大きい両開きの門があって、それを過ぎるとちょっとした広場みたいになってるけど、今はなんにもない。因みに門は最初から開きっぱなし。ちよっただけ無用心だなんて思ったりもする。

「どうやらこのまっすぐの道は大通りみたいだね」

「お店が沢山ありますね。あとお買い物をしているお客さんも」

「この道をずーっといくと出口があるみたいだな。もしかしたら入り口かもしれないけど」

三人とも中の様子が見えるみたいだけどわたしはそんなに目がよくないから見えない。ちょっと翔ちゃんに聞いてみよつと。

「ねえねえ、どんな人がいる？ 体格とか服装とか」

「体格は…あんまり俺らと変わらないみたいだぞ。なんか妙に色んな色の頭があるけど。服装までは良く見えん。つーかもうちヨイだから我慢しなさい」

翔ちゃんが頭をポンポンってしてくれたけど…今のは完全にちっちゃい子にすることだった。嬉しくなくはないけど、ちょっと微妙な心情。それにどうせだったらそのまま撫でてくれても良かったのに。あれ、なんか人の声が聞こえてきた。あ！もう門超えてた！うう、ボーっとしてたから気付かなかった。

「…日本語、だよな」

「…日本語、ですな」

「…日本語、だね」

日本語？

「何が日本語なの？」

「周りから聞こえてくる言葉が、です」

言われてみれば…聞こえてくるのは『安いよ安いよお！！何が安いって何もかもが安いよお！！』とか『奥さん！ぼくは…ぼくはもう！！』とか『駄目よお肉屋さん！私には夫も子供も…！！』とか日本語ばかりだ。でもそれを言ってるのはどう見ても日本人じゃない。さつき翔ちゃんが言ってたみたいに髪の毛の色が赤とか青とか緑とか金とかの人ばかりで日本人みたいな黒の人はいないみたい。でも、ここならわたしの髪の毛も目立たないからちよつといいかも。

「つてことは言葉が通じるってことでしょ？ 良かったよね！」

「…ああ、うん、まあ日向の言うとおりだな。ポジティブに行こつか」

「え、ええ、そうですね」

「でもなーんか都合が良過ぎるような気がするけど」

「気にしない気にしない！」

晃ちゃんはまだ不満があるみたいだけど、こんなことわたし達が考えてもわかんないんだから前向きに行かないとね！

「もうなんでもいいよ。いつまでもこんなところに突っ立ってても目立つだけだからそろそろ歩き始めるぞ。あ、もっかい言っとくけどあんまりキヨロキヨロするなよ！特に日向」

「わかってるよ！」

もう、なんで翔ちゃんは私ばかりに言うかなあ。わたしだって高校生なんだし、単純に年齢だけならわたしは6月生まれなんだから、7月生まれの翔ちゃんよりおねーさんなんだよ？たまには文句くらい言ってみようかな。

「わたしの方が翔ちゃんより年上なんだよ？わたしを子ども扱いしないの！」

「あーわかったわかった。わかったから早く行くぞおねーちゃん」

……ちよつとイイかも。

「あ、あの私にも『姉さん』と……」

「ボ、ボクにも『お姉ちゃん』って……」

「お前ら何に目覚めちゃったの！？だいたい秋月、お前は確か10月生まれだっただろ！それに晃、お前は『弟にしたい男子生徒』ナンバーワンだったろうが！しかも3月生まれ！」

「『ええー』」

「『ええー』じゃない！！ああもう、行こう日向。あんなやつらほつとこう」

「あ、う、うん！」

そういつて歩いていく翔ちゃんの隣に並ぶ。

「ちょ、ちよつと、翔はともかくなんであすかも！？」

「置いていかないでくださーい」

後ろから二人の声が聞こえる。ふふーん、お姉ちゃんは私だけだも

んねー。

『たまには別視点もいいんじゃないかな』

晃』

「さーて、これからどうすっかなあ」

翔の言うとおり、ボク達にはこれからのアテって言うものがない。この世界の常識みたいなのも知らないし知り合いもない。周りの買い物客がお金みたいなのを渡して商品を受け取っていたのを見たら、どうやら物々交換とかじゃなくてちゃんと『貨幣』がある社会らしいけど、そのお金をどうやって稼ぐかもわかんない。それに今ボク達はすごく目立ってる。服とか髪の毛の色とかで。周りの人からの視線がちよっと痛いけど翔はもう開き直ってるみたいだ。楓は恥ずかしそうであすかは全く気にしてないように見える。

「翔さんは何か考えとかあるんですか？」

楓が翔に話し掛けると翔は『うーん』と唸り、腕を組んだ。

こういった頭を使うような時はボクやあすかはあんまり口を出さない。別にボクもあすかも勉強が出来ないってわけじゃないんだけど、翔や楓は純粹に頭がいい。頭の回転が早いっていう感じなのかな。

「あるっちゃあるんだけど…適当だよ？」

「全然構いませんよ」

……もう思いついたんだ。適当でも何でもボクじゃ無理。

「とりあえず、真っ先に思いつたのは泥棒になることかな。食い物なり金なりを適当に盗んでいけば生きていくことくらいは出来るんじゃない？もちろんバレなきゃの話だけど。………つってもコレが

一番無理そうな選択だけどさ」

「そうですね。この町はあんまり大きな町じゃありませんし、いつまでもバレないなんてことは無いでしょうから」

それに倫理的にもね。

「次はアレだな、誰か優しそうな人に俺らの境遇を話してどうかしてもらってやつ」

「……いきなり『他の世界から来ました』なんて言っただけで絶対に信用してもらえませんよ?」

「わたしが道端で急にそんなこと言われたら走って逃げるよ」

「ボクだったら警察呼んでから走って逃げるよ」

「そのまま言うわけ無いだろ!俺だってそんなやついたら殴って警察呼んで走って逃げるよ。……あ、いや、でもお前なら行けそうな気もするな」

「わたし達ならって、どうゆう事?」

「いやさ、いきなり変なことを言い出したヤツが中年で小太りのオッサンだったら絶対に無理そうだけどさ、そいつが女で可愛かったらなんか大丈夫な気がしない?」

——可愛い。

……うん、やっぱり異性から、それも好きな人からそう言ってもらえるのはすごく嬉しいな。それに女の子扱いしてもらえるのも。

——とはいってもボクもあすかも楓もみんな自分の容姿がいいのは自覚してるんだけどね。自惚れとかそんなじゃなくて、ちゃんと客観的に見て。

そりゃあさ、アレだけ告白されたりチャホヤされてれば誰でも気付くよ。確かあすかは高校に入ってからの一週間で20人近くの人から付き合ってくれて言われたって言ってたし、楓なんてボク達

と仲良くなってから数日間、ラブレターや呼び出しが無かった日になかったくらいだからね。ボクだって男の子の格好をしてたから女の子からばっかりだったけど、それでも何回も呼び出された。

……でもその度に翔が羨ましそうに『俺も顔が良ければなあ』とか言ってたけど、それがすごく癪だった。

ふと横を横を向いて翔の顔を見ると、真剣そうな顔をしてその実全然真剣なことを考えてないような顔をしている。いや、もしかしたら本当に真剣なことを考えてるのかかもしれないけどさ。でもその横顔を見てると色んな文句が浮かんでくる。

……そもそも翔は鈍感過ぎるんだよ！なんで自分がモテてる事に気付かないんだよ！！っていうか顔悪くないよ！！！！

目つきが（とてつもなく）悪くて怖いから友達が出来にくいっていうのは確かにあるけど、あすかと楓が言うにはそれがいいんだっていう女子もいるらしいし、女の子から告白されないのだっていつも周りにあすかと楓がいたからなんだよ！自分の学校の一番人気と二番人気の女の子が好きで男の子に告白する女の子なんてあんまりいないよ！！どっちが一番でどっちが二番なのかわかんないけど！

翔は不真面目だけど頭もいいし、運動神経だって目立たないようにはしてるけど他の人よりいいことくらいすぐにわかるし、顔だって悪くない。いや、むしろいいほうなんだよ。

それでモテないわけ無いじゃん！？なのになんでそう思ってるんだよ！！

……いやいや、気付いてたら気付いてたで不味いよね。

というか、ボクからの別として、何であすかと楓の好意に気づかないのが全くわかんない。ボクに言わせれば『あんだだけ露骨なのに何で気付かないの？』って感じ。

あんだけ露骨ならいくらボクが男の子のフリをしてて女の子からモテてたからって『あすかと楓はボクのことが好き』なんていう考えは普通出てこないよ!!

あーもーなんか色々と考えてたら段々イライラしてきた!!

「翔のバカッ!!」

「突然なんで!？」

「晃さんの言うとおりですよ。その…私達の容姿がいいと言ってもらったのは嬉しいんですけど、翔さんは相手が可愛い女の子だったら何でも信じるんですか？」

楓が途中は恥ずかしそうに、最初と最後は冷ややかにという器用な言い方で翔にそう言う。別にボクはそうゆうつもりで怒ったわけじゃないんだけど……ま、いっか。

「信じはしないよ。ただ、殴って警察呼んで逃げるってことをしないでだけ」

「じゃあ何するの？」

「腕のいい脳外科医を紹介する」

「もっとダメじゃん!!」

「ええい、落ち着け日向。冗談だっつーの!」

……ホントに冗談なのかな。

「あくまでコレは最終手段だって。他の案が全部失敗した時用だ」

「他にも何かあるの？」

「あったり前田のクラッカー」

「古っ!! ネタが古すぎるよ!!」

さっきからあすかは突っ込んでばかりだ。……でもスルーしたらしたで翔が切なそうな顔をするからなあ。

「よし、冗談はここまでにして現実的な話をしよう」

そういつて翔が真面目な顔をしたけど……ホントにどこからどこまでが冗談だったんだろう。とりあえず『可愛い』の前なのか後ろな

のかが知りたい。

「一番いいのはどっか公的な機関に助けを求めることだと思うんだ。例えば……警察とかさ」

「あ、確かにそれはいいですね。……いえ、ですがこの町にそのような警察はあるんでしょうか？」

「ああ、そこが問題なんだよなあー」

「え？何々？どうゆうこと？」

楓は翔のあの言葉だけで全部理解したみたいだけど……何ですぐにわかるのかな。やっぱり楓は頭良過ぎだよね。それを思いつく翔もだけど。あすかはボクと同じでさっぱりみたいだ。

でもなんで警察だと大丈夫なんだろう。それに翔が言ってる『問題』の意味もわからない。

「どうして警察なら大丈夫なの？それになんで楓ちゃんは警察が無いかもって思ってるの？」

「そうだよ。そこらへんの人にボク達の事情を話すのと警察に話すのとじゃ何処が違うのさ。警察に行っても相手にしてもらえずに門前払いくらいと思うんだけど」

ボク達が質問すると翔が『それはあれだよ』と前置きをした。ってことは翔が説明してくれるんだ。てっきりまたいつもみたいに楓に任せるのかと思ってたけど、珍しいこともあるものだなあ。

「そりゃただ警察に行って『他の世界から来ました』なんて言えば晃の言うとおりになるだろうよ。でもそうじゃなくて……そうだな、『記憶喪失』ってことにしたらどうだ？そうすりゃ向こうだって無理に追い払うことなんて出来ないと思うんだよ。なんてったってあっちは『公的機関』だからさ、嫌々ながらも色々と教えてくれるだろうよ。……まあこっちの世界の警察が俺らの世界の警察みたいに『市民の安全が第一』みたいな感じになってればの話だけど」

あーなるほどなるほど、そうゆうことか。

確かにそこらにいる人に『記憶喪失です』なんて言っても見捨てられるだけだからね。所詮他人だし。

でも警察だったらそんな人でも相手をしなきゃいけないからか。しかもその相手がお金も無い、家も無い、自分の名前もわからないなんて人だったら病院に連れて行くなり保護するなりしなきゃいけないし。

でも、まだ楓が言ってた『そのような警察なんてあるでしょうか』の意味がわからない。

「じゃあ翔が言ってた問題って何？なんで警察が無いかもしれないの？」

ボクがそう質問すると翔は、あすかに今ボクが考えてたことを話してる楓の方をチラッと見て、軽く溜息をついてから説明を始めてくれた。多分面倒だから楓に頼もうと思ったんだろう。

「どうやって説明したらいいかなあ。――よし、じゃあさ晃、周りの人の服装をどう思う？俺達の世界のと比べて」

服装？ここの人の服装は……なんていうか、この前見た中世のイギリスが舞台の映画に出てきた人みたいな服を着てる。薄いベージュ色の布を服に仕立てました、みたいな。男の人はズボンで女の人はスカート。別に汚れてたり汚かったりはしないんだけど、何度何度も洗ってるからなにか色あせて見える。ボク達の世界みたいに色とりどりの服ってわけじゃないしアクセサリーみたいなものも目につかない。ただ髪の毛は色んな色があるけど。

あ、でもチョコチョコ『ボク達の世界』にもあるような服を着てる人が居るなあ。って言っても作りが単純なTシャツとかワンピースとかだし、色も落ちていたものばかりだけど。ロゴとかもないみたいだし。

「なんていうか、ボク達の世界より裕福じゃないのかな。綺麗な服を着てるのは他の人よりも裕福そうな人だし」

「そうだろうな。それが『この世界』全てに言えることなのかこ

の町に限ってのことなのかはわからないけど。あ、でも城があったことを考えると多分後者か」

「ってことは――」。

「あんまり裕福じゃない町に警察なんていう組織があるかどうかわかんないってこと？」

「それもある」

それ“も”あるって……まだ何かあるの？

「晃が今言った事の可能性自体、無くは無いけど結構低めなんだよ。集落とかならまだしも町ってものが成立してる以上治安を維持する組織が全く無いってわけじゃないだろうし。貨幣制度だって確立してるみたいだしさ」

ああそっか。

「だけど、その組織がどんな性格なのかわかんないんだよ」

「性格？どうゆうこと？」

「つまりだな、その組織の性格が昔の日本の治安維持法とか治安警察法とかみたいなのかもしれないってこと」

「なんでいきなりそんな考えがでてくるの？」

「ここが裕福じゃない理由を考えたら『重税』って単語がでてきたんだよ」

……なるほど。国民に『重税』なんてものを課するような国の警察なんて優しいものじゃないって事か。その分福祉が充実してるってわけでもなさそうだし。

「もちろん、ココがどっかに治められてるんじゃないって独立した感じの町っていう可能性もあるけどさ。でも仮にそっちだとしても警察なんて組織はそれほど立派なモンじゃないと思うよ。無一文の俺達が言うのもなんだけど貧乏そうな町だし」

だから楓は『そのような』警察って言ったのか。……なにその洞察力、翔とは別の意味ですごすぎる。

『誰かとめて——————ん？何かあったのかな？』

—————ん？何かあったのかな？

そんなことを思っただ正面のまっすぐな道に目をやると、人ごみの中からいかにも悪そうなやつが『どけオラァ————』とかなかにか聞き取り辛い言葉を叫びながら、明らかに女物のカバンを抱きかかえながら走ってきた。

そしてそのまま翔の肩に

ドンッ！！

とぶつかってさっっていく。

—————ゴッッ！！！！

「あがあっ！！」

その拍子に翔は軽くよろけて近くの木で出来た柱に頭をぶつけた。そしてそのままの態勢で翔の動きが止まった。

「ったく……なんなんだろう今の奴は。翔、大丈夫？……………」

翔？」

「……………ククク」

あ、この無気味な笑い方は……あと3秒くらいかな。

「ククク……」

あと2秒。

翔がスウーと大きく息を吸った。

あと1秒。

0。

の柱にぶつけたところを擦りながら息をついて軽く笑った。

「ふう、これにて一件落着つてとこだな」

「「「……………」」」

なんだか少しこの男が気の毒に思えてきた。

「ハア…ハア…こっちにカバンを抱えた男が走ってこなかった！？」

ん？なんか後ろから女の人の声が…。

「あ！！私のカバン！！あなたが取り戻してくれたの！？」

「ええまあ。はい、どうぞ」

そういつて翔が女の人にカバンを渡す。じゃあ引っ手繰りにあったのはこの人なのか。

「ありがとう！！ホンットにありがとうっ！！この中に大事なものが入ってて…ああ良かった！！もしこのカバンを獲られたままだったらもう私路頭に迷うところだったのよ！！」

そう言って女性はカバンをギュッと抱き締める。どうやら状況が状況なだけに、翔と初めて会った人が必ず経験する『目つきの悪さへの恐れ』を感じてはいないみたいだ。

だって翔の目つきの悪さは自他共に認めるほどだからね。『初対面でこっちから話し掛けられない人No.1』で二位以下をありえないほど大きく離してのダントツ一位に輝いた事は記憶に新しい。それにたしか…『敵に回したくない人No.1』でもダントツ。

…………え？ミスター？フフン、それはボクが一位に輝いたよ！翔は確か…三位だったね。後は…公表されないほうで『お兄ちゃんになって欲しい人No.1』だったかな。まあその気持ちは判らないでもない。翔は意地悪だけど、何だかんだ言って結局最後には助けてくれたりするし。

……あ、よく見たらこの人、ちょっときつそうな人だけど綺麗だ。すれ違ったら振り返っちゃうくらいかな。それに周りの人よりもい

い服着てるし。もしかしたら翔この人に見惚れて——ないや。むしろあれは『なんかもうめんどくせえ』とか思ってる顔だ。

「そうですか。じゃあ俺達はこれで」

「あ！ちよっと待って！！」

若干翔が嫌そうな顔をした。

「あなた達は私の命の恩人とも言える人だから、ぜひともお礼をしたいんだけど…」

「謹んでお受けいたします！」

「「「……………え？」」」

切り変わるの早っ！！なにその超いい笑顔。どれだけ嬉しいの？それにこういうのって普通は一回やんわりと断って、それでも相手が引き下がるから引き受けるもんじゃないの？ボク達三人どころか女の人も『え？』って言ってたじゃん。

「そ、そう、良かったわ。……じゃあ申し訳ないけど一度家に戻ってもいいかしら？もってる荷物を置いてきたいのよ。付いてきてくれる？」

「わかりました！」

そして女性はクルッと後ろを向いて、翔がそれに着いていく。

「ちよっと待ってよ！この人はどうすんの！？」

あすかが翔に向かってそう言うのと、翔が何か言う前に近くの男の人が『そいつは俺達が処理しとくから行っていいぜー』と言ってくれた。みると周りの人もウンウンと頷いている。

……………処理？

「ありがとうございます」

と、翔は周りに二、三度軽く頭を下げると再び女性に着いていく。そしてボク達三人はその後ろを着いていく。周りの人は皆良い人ら

しく、ボク達の通行を邪魔しないように横にずれてくれた。

「……ねえ晃ちゃん、普通男の人ってさ、初対面の女の人に『お礼がしたい』って言われたらついて行くの?」

歩きながらあすかがボクにそう尋ねる、

「ボクは女なんだけど…まあ人によっては行くと思うよ」

「…それは一体何が目的で:「おい、秋月いー」は、はい!!」

突然翔に呼ばれてビクツとしつつ楓は翔の所に行くとなにやらヒソヒソっと耳元で囁かれた後何かを受け取って、そこで止まってボク達の到着を待っていた。…む、なんか楓の顔が赤い。

「…楓ちゃん、顔が赤いよ」

「え!?!べ、別に全然そんなことないですよ!?!」

そんなことあるよ。どうせ翔の顔が近くにあって恥ずかしかったとか耳に翔の呼吸を感じてとかそんなのでしょ。

「そ、そんなことより!翔さんから伝言があります。えっとですね、『あの女の家では俺の話に合わせてくれ』って言っていました」つまり、翔はあの女の人に色々と聞くってことなのかな。

「…ねえ晃ちゃん、普通男の人ってさ、女の人とどっか行く時って下心とかないの?」

「だからボクは女なんだけど…まあ人によってはあると思うよ」

「確かにあの女の人と何かあったら困るんだけどさ、お礼をするって言ってる人を最初から利用するつもりなのってどうなのかな…」

「……翔らしいよ」

「…なんと言うか、期待、みたいな物は無いんでしょうか」

「そんなものが翔にあったらとくに楓かあすかの彼氏になつてると思うんだけど」

「「……………」」

無言になる二人。

「と、とにかく!わたし達は翔ちゃんの話に合わせればいいんだよね!」

無理矢理気合を入れるあすかとは対象的に、楓は申し訳なさそうに
して言った。

「あの…伝言はまだあるんです。その…『日向はボロが出そうだ
から黙っててくれ。ご褒美上げるから』…と」

『コレです』と言ってあすかの手をとって、その上にピンク色の包
装がされた飴玉を一個乗せる。

「ひどっ！！翔ちゃんはわたしをなんだと思ってるんだろ！？」

う……流石にコレは…ちょっとあすかが可哀想だ。

けど翔の気持ちもわからないでもないから何も言わないでおこつ
と。楓も黙ってるってことは同じ事を考えてるんだろうし。

プクッと顔を膨らましたあすかが飴の袋をピリッと破いた。……あ、
ちゃんと食べるんだ。

そしてそれを口の中に入れると、『あ、ピーチ味だ♪』という言葉
と共にさっきまでの不機嫌そうな顔が一瞬で溶けた。

「まったくもう……これで味がハツカとかだったら暴れてるとこ
ろだったよ！」

そう言いながら飴を口の中でコロコロと転がすあすかの表情は、不
機嫌そうな顔を作りつつも幸せそうな感じが隠し切れていなかった。

「……ヒソヒソ（本当にあすかってボク達と同一歳？）」

「……ヒソヒソ（法律上はそうです）」

「なになに？何の話ー？」

緊張感の欠片もないままこんな感じでボク達は歩いていた。

非現実 そんなのばかり もう嫌だ（前書き）

投稿、遅れてしまって申し訳ありません。

さて、今回の話では恐らく皆様も聞き覚えがあるであろう単語がいくつか出てきます。

ですがそれは、パクリではありません。一応私の中でいくつか理由があつてのことです。

「ふざけんなパクリじゃねえかファック」とお思いの方、どうか寛大な心にて、お許しください。

非現実 そんなのばかり もう嫌だ

「着いたわ。ココが私の家よ」

……ふう、なんやかんや結構歩いたな。あいつらは後ろでなにやら楽しそうに話してたけど、俺はあの女に話し掛けられなかったからずっと歩いてるだけだったし。まあ別に話したいわけじゃなかったからそれはそれで良かったけど。

「遠慮なくどうぞ。それほど広いところじゃないけど」

「え？荷物を置くだけじゃないんですか？」

「最初はそのつもりだったんだけどね。何処に行くかも決まっていないうちに外を歩き回るのは面倒でしょ？だったら行く前に決めちゃおうと思ったのよ」

「は、はあ…」

いやまあ、いいんだけどさ。

でもいくらひったくりを捕まえてくれた相手とはいえ見ず知らずの人間に『礼をするから着いて来てくれ』とか、あまつさえ『家に入れ』とか無用心じゃないか？

……まあいいか。俺達の話はあんまり大勢人がいるところじゃしたくなかったし。むしろラッキーだ。それに俺だけならまだしも日向達女の子も居るから警戒心が薄まったのかも。

「そうですか。じゃあ、おじゃまします」

……ふむ、言っちゃあ悪いが確かに広くは無いな。まあ一人暮らしみたいだからそこまで不自由はなさそうだけど。……ん、靴は脱ぐのか。なんつーかますます日本の文化と似通ってるな。この人、ロシア人みたいな顔してるくせに。

「おっじゃまっしまーす！」

「おじゃまします」

「おじゃまさせていただきます」

「ええ、どうぞ」

——パチンツ

明るくなった……ってことは電気が通ってんのか。見た感じじゃ外に電線とかもなかったのに。でも実際に明るくなったし、見落としただけ、か。

ってことはさっきの音はスイッチ？でもそれにしてはあの音、若干こもった感じだった気がすんだけど……てか発光源はどこだ？見つからない。

とまあ、他人の家をジロジロと見るのは失礼な事だとわかっていながらも俺は周囲を見回す。

テーブルがあって、筆筒があって、奥にはキッチンがあるようで、いくつかある使用用途不明なオブジェを除けばこの人の家は見た感じ俺達の世界とあまり変わりが無いようだ。木を主体とした造りの、どこか温かみを感じさせるような家。うっすらと埃をかぶっていることが気にはなるが、まあ想像するにこの人は掃除嫌い、若しくはここが自宅ではないと言うことだろうか。

「今飲み物を持ってくるから、少しの間ここに座って少し待ってね」

「あ、はいすいません、ありがとうございます」

そう言われて指差されたソファーに素直に座る。……うお、すげー柔らかい！

「晃ちゃん晃ちゃん！このソファーすごいよ！絶対高級だよ！」

「ダ、ダメだよあすかそんなに跳ねちゃ！怒られるよ！」

……あいつホントに高校生？

「…翔さん」

「なんだ？」

「…ライト、見つかりました？」

「…お前も気付いたの？」

「…はい。翔さんがキョロキョロしてたので」

あいかわらずよく見てる奴だ。言われてもう一度良く探してみる。綺麗な木目が描かれた天井には、やはり何一つ見当たらない。この部屋明るく照らす光源も、それにぶら下がる紐も、それに何より、先ほどの女性が押したと思しきライトのスイッチすらも、近くの壁には見受けられない。

……ああ、もういつか別に。

もしかしたら光源を隠すことが『この世界』での常識、もしくは最先端のおしゃれなのかもしれないし。

そう適当に結論付けてソファーに深く座りなおす。本音を言えばこのまま眠りに付きたい位のやわらかさだ。『前の世界』の俺のベツドすらも凌駕^{りようが}する。

「どうぞ。熱いのでゆっくり飲んでくださいな」

「あ、どうも」

歩き通しで喉も乾いてたし、ありがたく頂くことにする。どっちかつつーと冷たいのが良かったんだけど、まあ文句は言うまい。

そう思っただけに色彩豊かな絵が描かれた湯のみを手にとる。ほう……中々に良い香りではないか。俺がこれまでの人生で飲んだ安物の緑茶とは一線を画するぞ。

「……………あれ？」

何で、濃い灰色？え、ちょ、これお前、明らかにこの色は工場の

排水じゃんか！なんでこんなにいろと香りが矛盾してるのさ！

「飲まないの？」

……マジかよ。この人平然と飲んでるし。

「あ、いや、あの俺、猫舌で熱いもの苦手なんです」

「わ、私なんです」

「ボクもです。アハハ…」

「わ、わたしもなんです。えへへ…」

何とか笑顔で取り繕う。因みに俺は本当に猫舌であるが、この場であいつらの嘘を暴く必要性は無いだろう。みんなでそつと湯飲みを机の上に戻す。

「あら、そうだったの、ごめんなさい。じゃあ今度は冷たい物を…」

「いやいや！お構いなく！」

「そう？ならいいけど」

……ふう、危なかった。これで今度は虹色の飲み物とかを持ってこられたらどうしようかと思った。

「それじゃあ改めてお礼を言わせて頂戴ね。あのカバンには本当に大事なものが入ってたのよ。あれを盗まれてたらお先真っ暗だったわ。どうもありがとう」

「いえ、人として当然のことはしただけですよ」

とはいえ、そう言われても俺としてはムカついたから追いかけただけだから頭下げられてもなんとなくスツと心に入ってこないのだが。

「……ボソッ（なーにが『人として当然のこと』だよ…）」

「……何か言ったかね北条晃君？」

「べっつにーなんにも言ってないですよー」

くっ！！！晃のやつめ。いちいち変なところで口を出しよって……。ってかアイツ絶対女って事をカミングアウトしてから性格変わったろ！！

「それでお礼の話なんだけど、何か食べたいものでもある？なんでも奢らせて貰うわよ」

おっといけない、本題を忘れてしまふところだった。

お礼：食事、か。確かに『この世界』の食事に興味がない、といったら嘘になる。先ほどの汚い飲料（お茶とは認めない）から想像するに、やはり『俺達の世界』では見られないような食材や料理が出てくるんだろうけど：でも違うんだよな。欲しい情報はそんなじゃない。

「その、お礼の話なんですけど食事とかじゃなくてですね、他にお願いしたいことがあるんです」

「そう？あんまり無理なことじゃなければいいけど」

秋月をちらっと見ると、しっかりと目が合った。反対方向を見ると日向と晃とも目が合う。……。どうでもいいけど日向は黙ってる役なんだぞ？そんなに気合を入れなくてもいいんだからな？

コホンと咳払いをし、しっかりと女性を見据え、改めて真剣な面持ちで本題に入る。『この世界』を知るために。『この世界』で生きていくために。

「この町のことを、ひいてはこの世界のことを教えて欲しいんです」

目の前の女性は少し驚いた顔をした後、怪訝そうに俺を見た。ま、そりゃそうだよな。俺だって急にそんなこと言われれば『何言ってるんだコイツ』って思うし。

「あなた…どうして私が歴史の教師だってことを知ってるの？」

——なんて偶然。

「そうなんですか！？わーすごい偶然ですね！！」

ええい、黙ってろって言ったのに。日向のヤツ会話が始まってから30秒も経ってないのに約束破ったな！後でハツカ飴を無理やり口に放り込んでやる！！

「アラ？知ってたんじゃないかったの？」

……話が思うように進まないな。理想と現実の壁を感じる。

「……別にこの世界の歴史を教えて欲しいっていう意味じゃないんです。なんていうか……常識、を教えて欲しいんです」

「常識？…どうゆうこと？」

「実はその…俺達、『記憶喪失』、ってヤツなんです」

「ええええええええ！！？」

予想通り、今度はスゲー驚いてるなあ。うへへ、どうやら壁は数ミクロン程度の厚さだったらしい。

「き、『記憶喪失』って…あの？」

「あの？って聞かれても…まあそうです。多分あなたが想像してるもので間違いないと思います」

俺がそう言うのと教師は泥水（にしか見えない飲料）を一口すすって息を吐いた。

「……少し事情を聞かせてもらえないかしら。覚えてることとかを教えてもらいたいんだけど」

よし、適当にでっち上げてフォローは秋月に任せよう。臨機応変はあいつの得意分野だと俺が今決めた。

「えっとですね、俺達が覚えてるのは自分達の名前とお互いが知り合い同士だったこと位で、他のことはほとんどなにも覚えてないんです。ですから、残念ながら教えられることが無いんですよ」

「……災難ね。いつから記憶があるの？」

この辺で少し暗い表情でもしておくかな。淡々と話しても信憑性が無いだろうし。

「……気付いた時には、俺達は町の外にいました」

「町の外！？外ってことは、あの平原にいたの！？」

「そ、そうですけど……」

「何にも襲われなかった！？」

「は、はい、特になんともありませんけど……何かあるんですか？」

「……あの平原には森から出てくる凶暴な獣や魔物が時々現れるのよ。なんにも無かったのなら良かったけど、運が悪ければ命が無かったかもね」

そうだったのか。あの草ばっかのところにねえ……てか森から出てくるって事は、俺達相当危なかったんじゃない？森の近くにいたし。いやー良かった良かった。獣やら魔物やらに襲われて死ぬなんて真っ平ご免だからな。ハッハッハ。

………ん？……マモノ？………魔物！？

そんなのいるのかよ!! えっちょっマジで!? 『ココ』ってそうゆう世界!? そっち系!?

「あの…獣はわかるんですけど…『マモノ』ってなんですか?」
———そうか。秋月は、あと日向と晃もゲームとかマンガとか読まないから、いきなり『マモノ』なんて言われてもピンとこないのか。じゃあ俺も知らないフリをしなきゃダメなのか。めんどくせーなーもー。

「なに? あなた達魔物を知らないの? っていうか『記憶喪失』ってそんな根本のところまで忘れるものなの?」

「……はい。だからこそこの世界の常識を教えて欲しいって頼んだんです」

「じゃあどうして魔物はわからないのに獣はわかるのかしら?」

「すみませんが、俺達にもその理由はわかりません」

「ってことはその辺りから話さなきゃいけない、のか。ちよっと大変ねえ」

時間も無いからあんまり長くならないで欲しいんだけどなあ。こっちの勝手な都合だけどさ。

「じゃあこれからこの世界についてのお話をさせてもらうわね。その中でさっき言った『魔物』の話も出てくるから。えっとお〜どこから話せばいいのかしら」

「歴史の先生にこんな事言うのも悪いんですけど、出来れば歴史とかその辺りは省いてもらいたいですけど」

「だーいじようぶよ。それくらいわかってるから。流石に『記憶喪失』の子達にこの世界の変遷の話をしようとは思ってないわよ」

ああよかった。いきなりそんな話をされたらどうしようかと思っ
たよ。つか『記憶喪失』は疑ってないのね。

「あ、話をする前に一つ質問ね。あなた達って基本的な単語はわ
かるのよね？例えば、『学校』とか『国』とか」

「それくらいなら大丈夫です。わからない言葉があったらその都
度話の邪魔にならない感じで聞きますから」

「そう、ならいいわ。じゃあ始めようかしら……あら？飲み物
がもう無いわね。ちょっと取ってくるわね。あなた達も冷たい物い
る？」

「いやいや！まださっき貰ったのが残ってるので！」

「そう？じゃあまた少し待っててね」

そう言って女性は席を立つ。

……危なかった。また変な色の液体を持ってこられちゃかなわな
いからな。

あ、そうだ。

「晁、何かあったらお前もチョコチョコなんか言ってくれ。俺と
秋月だけじゃ不自然だろうし」

「ボクが何か言っているの？」

「お前ならそこまでうかつなことを言わないだろうからさ。つっ
てもあんまり無理しなくていいから。適当に相槌を打ってるだけで
も構わないし」

「わかった。がんばるよ」

「ねえねえ、わたしも話したいよう」

ダメって言っただろ！わがまま言うな！

………なんだその捨てられた子猫のような目は………ぐ………
分かったよもう！！分かったからその目をやめろよな！！くそう……
残り少ないピーチ味の飴をあげた意味が無いじゃないか。

「……ちゃんと言葉を選べよ」

「うんっ！！」

バカッ！声がでかい！

「あら？なにか相談でもしてるの？」

「あ、いえ、別に何でもないです」

「たたく……これだから小学生は……」。

「そういえばまだ自己紹介をしてなかったわね。私の名前は【フラー】デラクル」。名前でも家名でも好きなほうを呼んで頂戴。職業はさっきも言ったけど教師。よろしくね」

雰囲気的には名前を先に言うっぽいな……。

「俺は【翔 玄野^{くろの}】って言います。こちらこそよろしく願います」

「私は【楓 秋月】です。よろしくお願いします」

よしよし、秋月は俺が意図したことをちゃんと理解してくれたみたいだな。

「【晃 北条】です。よろしくおねがいします」

「【あすか 日向】です！よろしくおねがいします！」

日向も気付いてくれたか。良かった良かった。『日向 あすかです！』なんて言ったら後で罰ゲーム三回のつもりだった。

「……ふうん、珍しい名前ね。あまり聞いたことがないわ。もしかしたらあなた達この辺りの地域の人間じゃないのかもしれないわね」
ふうん、日本人の名前って珍しいのか。その辺りはよくわかんないな。どうして『異世界』ってだけで日本人の名前が少なくなるんだろう。

「まあいいわ、取り敢えず話を始めるわね。最初は国とかの大きな話から……まあこの辺は大雑把な説明にするから適当に流しちゃってね。その後この町の事とかさっきの話に出た魔物とか、そう言った細かい話をするから」

……頼んどいてなんだけど、色々覚えるのめんどいなあ。どうせ

地名とかも『セントビンセント及びグレナディーン諸島』みたいなカタカナで長いのはっかだろうし。その辺も秋月に任せよっと。

「まずは『世界』の話。まずこの世界は一般に【スピラ】って呼ばれていて、【スピラ】には四つの大陸があるわ。ちょうど北東、南東、南西、北西にね。小さな島もいっぱいあるけど大きいのはこの四つで、私達がいるのは南東ね。それぞれ大陸には名前がついてるけど面倒だから今は私達がいるトコだけ覚えてくれればいいわ。この大陸は【エスタ】っていうの。略してるわけじゃなくて正式名称が【エスタ】。短いから簡単に覚えられるでしょ？」

……【スピラ】に【エスタ】ねえ。なあんかどっかで聞いたことがある気がするけど…まあ何でもいっか。ってか世界の呼び名ってなんだよ。…あ、『地球』の代わりに『スピラ』なのか。

「そして四つ大陸の中にはそれぞれ『国』があって、その国々が治めている『町』や『村』、『学校』なんかがあるの」

学校、か。ちゃんとした教育機関はあるわけだ。

「じゃあ次は細かい話のほうね。私達が今いるエスタには四つの国があるの。大陸と違ってこっちは北、南、西、東でわかれていてそれぞれの国が土地を治めてるわ。」

うん、単純でいい。近畿地方みたいに変な区切られ方をしてたら堪らんからな。

「この町は東部の北寄り、つまり大陸全体からみれば東北東のあたりにあるわ。ここを治めてる国の名前は【アレクサンドリア】、町の名前は【ナルシェ】。ちなみにこの町は石炭とかが採れるわ。炭鉱町ってやつね」

今度は【アレクサンドリア】に【ナルシェ】か。…やっぱりどっかで聞いたことある気がするんだよねー。

「ココ以外にも町はいっぱいあるけど面倒だから今はいいわね。」

話にあがったりしたらその都度話すわ。後は：そうね、この町の外に広がってるのが【獣ヶ原】。基本的に草ばかりね。そしてあの森は【ムーア大森林】と呼ばれているわ。よほどのことが無い限りこの二箇所には近づかないほうが賢明。さっきも言っただけど獣や魔物がわんさかいるから。それで『魔物』の話なんだけど：『獣』はわかるのよね？」

一応頷いとくけど：まあ俺達の世界にいたようなのしか想像は出来ないけどな。てか【獣ヶ原】も【ムーア大森林】も聞いたことが：ああもういいや考えるのめんどくせえ！！

「『魔物』っていうのは読んで字の如く『魔』の『物』よ。詳しく話したいのは山々なんだけど、その生態や性質なんかは殆どわかってないの。捕獲が容易な種のいくつかは研究されているけれど」

女性――フラー・デラクールさんの話を心中で突っ込みつつも黙って聞いていた俺だったが、この簡易授業が始まって初めて生徒側から声が上がった。この中世的な声は晃だ。

「あの、すみませんが『魔物』っていう字を何かに書いてもらえませんか？：文字の記憶はあるんですけど、なにぶんボク達の記憶が合っているという確信が無いので：」

「文字の記憶……か。そうね、じゃあ書くものを持ってくるからまた少し待っててね」

そう言って教師は部屋を出て行く。

「……ナイス晃！！」

このついでに俺達の世界との文字についての正誤まで確認しようとは：晃のヤツよく思いついたな！

晃が俺に何か返そうとするも、すぐに教師が戻ってきた為にすぐに正面に向きなおした。とりあえずこの教師が持っているものは俺たちも良く見慣れた白い紙と鉛筆だ。

「おまたせ。『魔物』というのはこう言う字ね。ちなみに獣はこう」

——おお、まさかの一致だ。完全無敵にニホンゴだよおい。秋月は：うん、やっぱり驚いてる。多分俺もあんな顔をしてるんだろう。

「わたし達が知ってるのと一緒にだ！！よかったね、みんな！！」

「あら、じゃあ字は書けるのね。よかったわね」

よかったけど：よかったけどなんか釈然としないんだよなあ。なんでこんな都合よく話が進むのか。

「さて、一応この世界については大雑把に話したけど、これ以上は私には何を話せばいいかわからないの。だからあなた達で私のほうに質問してくれる？出来る限りわかる範囲内でそれに答えるからいきなりそう言われても何を質問したらいいものか。聞きたい事は色々あるが、聞くべき事も色々あるし。」

「：少しよろしいですか？」

ん？秋月？

「いいわよ。何？」

「今の話を聞いて改めて思ったんですけど、私達はこの世界についてなにも判らないんです」

「でしようね。国や町の名前はともかく、魔物すら知らないとなると」

「ですから私達の間で少し整理したいんです。デラクールさんへの質問を」

「どういうこと？別に思いついたことをドンドン言っちゃって構わないわよ？」

「いえ、そうなるといつまで経っても終わらないかもしれません。デラクールさんにもデラクールさんの予定があるでしょうからあまり長くココに居座るわけにも行きませんし」

「別にこの後の予定は無いから気にしなくてもいいわよ。それにこれはあなた達へのお礼なんだから」

「……お願いします」

真剣な秋月を、まるで探るような目で見つめる事数秒、教師がため息混じりに口を開いた。何かを考えていたようだが、何を考えていたのかは分からない。

「……まあいいわ。別にダメって言う理由も無いしね。どれくらい時間が欲しい？」

「10分：いえ、5分でいいです」

「そう？わかったわ。じゃあ私は外にいるから終わったら呼んで頂戴」

「…申し訳ありません」

「いいのよいいのよ、あなた達も話したいことがあるんでしようし」

なんかこの人、見た目はキツそうな感じだけど案外優しい人なのかもしれない。人は見かけに寄らないって本当だよな。特に俺がいい例だよ。

「あ、その前に一つ聞きたいことがあったわ。あなた…たしかクロノ君って言ったわよね」

「え？あ、はい。そうですね…なんですか？」

「あなた達って知り合い同士なのよね？」

「ええまあ。何処にいたかとか、どうして一緒に居るのかとかはわかんないんですけど、記憶を失う前からの知り合い同士なのは間違いないですよ。なんとなくそれはわかるんです」

う…、なんでニヤついてんだ？

「男の子ってあなた一人だけよね」

「へ？晃が女だって事わかったんですか？他の二人と違って俺とおんなじ男の格好してるのに」

「まああなた達の服装は珍妙で私には良く判らないけど」

………珍妙。

「なんていうか、『雰囲気』かしら。なんかこう、女の子からしか出ない雰囲気があるのよ、そのアキラちゃんね。ちなみにアスカちゃんとカエデちゃんからも同じような雰囲気が出てるわよ」

『雰囲気』ねえ。それはとてもすごく胡散臭い。………なんで晃も日向もそっぽ向いてんだ？……秋月も？

「俺には全然わかんないんですけど」

「まあ男の子にはわからないかもしれないわね」

「そうですか。まあ別に何でもいいんですけど、質問ってそれだけですか？」

「ああそうそう、もう一個だけ。この子達の誰か…クロノ君の彼女？」

——————ピクッ×3

………はあ。何かと思えばそんな質問かよ。この世界にも『彼女』とかっていう概念があるんだな。

「………残念ながら違いますよ。見れば分かるでしょう」

くそう！！！！『そうですよ！！可愛いでしよう！！』———って言いたい！滅茶苦茶言いたい！堂々と言い放ってやりたい！！

「………あーこれは………あなた達も大変ねえ」

「「「………はい」」」

あん？なんで三人とも肯定？大変なのはこっちの方だって言うのに。一体いつになったら俺に彼女ができるのさ！！お前ら俺で妥協しろよ！！もう『前の世界』の好きな人なんて良くね？どうせすぐには会えないんだしよお！！

「………まあいいわ。じゃあ少しの間でてるから。終わったら声か

けてね」

「あ、すみません。すぐに終わらせますんで」

「全くあなたは………そんなこといいから君はもうこの子達とお話してあげなさい!!」

え? え? なんで怒られたの? ——行っちゃったよ。

「なあなあ、何で俺怒られたん? なんか失礼な事言ったかな」

「私には解りかねます」

「ボクも」

「わたしも」

何もそこまできっぱり言わなくても。

「まあいいや。あの人はああ言ってたけどいつまでも待たせるのも悪いし、さっさと話し合っちゃおう」

「はい」 「うん」 「はい」

三人ともとりあえずつい今しがたの雰囲気を払拭してくれた。どうやら三人にとってもこの雰囲気の中での会話から逃れたかったらしい。

「取り敢えず晁と秋月ナイスな。晁はよく文字についての情報も引き出してくれた。秋月もこの場を用意してくれてサンクス」

「別にボクは単純に疑問に思っただけなんだけどね」

「結果が良ければ動機は何でもいいんだよ。よくやったな。よし、おっちゃんが頭撫でてやろう」

「…えへへ」

「私のほうは少し失敗ですね。最後のほうがちょっと強引過ぎました」

「大丈夫だろそんなモン。むしろアレくらい強引のほうが『不安なんです』見たいな感じが出てて良かったんじゃない? よしよし、おっちゃんが頭撫でてやろう」

「……あう」

「ちよつとーわたしも誉めてよー晁ちゃんと楓ちゃんばかりず

るいよー」

「ええい、わかったわかった。お前もよく静かにしててくれたな」

「…言葉だけー？」

「はいはいわかったよもう。はい、良い子良い子。撫でてやるから」

「子供扱いしないでっ！」

どっからどう見ても子供じゃないか。ったく……。

「はい、じゃあ真面目な話な。とりあえず何聞いたほうがいいと思う？」

「はいはいはい！」

いきなりお前か。

「…ハイ、どうぞ日向サン」

「あのお城の事が聞きたいでっす！」

あら、案外までもだ。

「オツケー、んじゃそれが一個目ね。…あ、そうだ。メモとっていたほうがいいか。誰かルーズリーフかなんか持ってない？」

「自分の使えばいいじゃん。何でボク達に聞くの？」

「ンなもん俺が持つてるわけ無いだろ。授業に使う物は全部学校に置いてきたわ」

「……………」

「あ、私が用意しますよ」

「おーサンクスサンクス。あ、書くものもな」

「……ねえ翔、前から不思議に思ってたんだけどさ、翔のカバンって何が入ってるの？」

「あん？そんなもんお前……色々だよ色々」

変なこと聞くやつだな。他人のカバンの中身なんてどうでもいいだろうに。

「あ、それわたしも気になってたんだ。翔ちゃんのカバンって基本的にペラペラだけどさあ、時々膨らんでるよね」

「今もそうみたいです。私も知りたいです」

ええい！なんだこいつら急にグイグイ来やがって！

「今はそんなことどうだっていいだろ。人を待たせてんだから早く質問決めちゃおうよ」

「ぶうーじゃあ後で教えてね」

「わかったわかった」

ま、別に絶対に教えたくないってわけじゃないしな。今日はエロ本も入ってな……いや、いつも入って無いようんそうだ間違いない。

「私達に必要な事は、衣食住の全てです」

「そうだね。ホームレス生活なんて嫌だし」

衣食住か。まさかそんな家庭科の教科書に載ってそうな言葉の大切さを身をもって体験する時がくるとは思わなかったよ。ホント、人生何が起こるかかわかんないな。

「じゃあ最初に『住』のどこを何とかしなきゃだね」

「うん。そうなんだけどねー」

「それが一番難しい問題でもあるんですよ」

「そうだな。少なくとも二部屋用意しなきゃいけないし」

俺とあいつら三人の……ん？なんで不思議そうな顔してんの？

「…二部屋？あっそうか。わたし達と翔ちゃんの分か」

「そっか。そういうやもうボクも女の子だって言っちゃったから、修学旅行の時みたいには行かないんだね」

「忘れてました…」

………え？何？俺が言わなかったら同じ部屋だったの？えっちよっマジで？

うっそおお何で俺言っちゃったのおおお！！？

「ではデラクールさんにはその辺りの事を聞いてみる事にしましょう」

「でも身元不明の人間を住まわせてくれるようなところなんてあ

るのかなあ」

「そんなの探してみなきゃわからないって」

………何時までも嘆いててもしょうがないし、気を取り直そう。…
………はあ。

ってか一つ気になってたことがあるんだよな。もしかしたら…今俺達が悩んでいることが一気に解消できるかもしれない。

「なあおいみんな、あの人ここにも学校があるって言ってたよな。しかも私立じゃなくて国立の」

「ええ。この世界に国立とか私立とかの区別があるのかわかりませんけど…どうして私立ではないと？」

「別に確信があるわけじゃないんだけどさ、俺が思うにあの人の話を聞いてるだけじゃどうやら国立だけっぽいんだよ。国に治められてる『町』や『村』と並立に言ってたからさ」

「それで？翔ちゃんは何か思いついたの？」

「そんなに焦んなって。国立しかないって事はどうしても学校の数が少ないって事だろ？っつーことは学校から家が遠い生徒っつーのはどうしてるんだと思う？」

「そっか！！『寮』か！！」

そうだ。『この世界』での長距離移動の手段がどうなっているかは知らんが、少なくとも電車やらバスやらはないだろう。この町の中も外も自動車が走れるような舗装はなされてなかったし、そうなるとしても毎日通う施設の近くに住まなければどうしても時間的に無理があるはずだ。

「寮ですか。思いつきませんでした」

「いやあ、偶々ですよタマタマ」

ハッハッハ。……うん？

「どうした日向、微妙な顔をして」

「そう簡単に学校って入れるものなのかな。試験とかあると思う

んだけど。それに入学金だって無いし、そもそも学校に入るのだって住所不定だったらダメだと思うよ……？」

……日向の癖に鋭いな。日向の癖に。小学生の癖に。

「その辺は俺もわかってる。だから取り敢えずあの人に聞いてみよう。教師らしいし」

「そうだね。何事も聞いて見なきゃわかんないよね！」
コイツ切り替えはえーな。いや、単純なだけか。

「あとは……この世界の時間の概念を聞いておいたほうが言いと思います。先程『5分待ってくれ』という頼みは滞りなく聞き入れてくれましたけど」

「時間って……あとは一日の長さとか一年が何日かとか？」

「そうです。あとはもうちょっとそれを細かくですね」
細かくって言う……秒とか時間とか？

「あ！お金の単位も！多分『円』じゃないと思うの。どこかで働くにしてもそうゆうことを知らなきゃダメでしょ？」

「おっ冴えてるねあすか。たまにはいい事言うね」

「へっへくん、こう見えてもわたしはやる時はやるんだよ！」

なんか俺が口挟まなくてもいい感じだな。面倒だからしゃべんなくてもいいか。疎外感なんて感じてないよ。

「働き口を紹介してもらうとかは？ちょっと欲張りすぎかな」

「いえ、この際ですから頼らせてもらいましょう。見つかるどうかは判りませんけど」

「そうそう、『馬鹿と鉄は使い様』って諺もあるくらいだからね！」

「……あすかさん、それを言うなら『立ってる者は親でも使え』だと思っんですけど」

「あーそうとも言うね」

「そうとしか言わないよ」

話は休むことなく続く。俺はもうなんか空気が。これがホントのエ

アーマンってか。ほっとけ！

あ、でも…もう時間かな。

「そろそろ声かけたほうがいいんじゃないか？」

「あ、そうですね。呼んできます」

「おう、サンキュ。じゃあ日向、あの建物のことはお前が聞いてくれ。残りは俺らが適当にやるから」

「うん、わかった！！」

……よし！これで余計なことを言われずに済む。

秋月が扉を叩いて『もう話は終わったよアピール』をする。多分そこにいるだろうし。

案の定扉は開き、そこから家主が入ってきた。

「話は終わったみたいね」

「お待たせしてしまつてすみません」

「いいえ、大丈夫よ」

この人本格的に優しいな。ホント教師の鏡だよやマジで。

「ねえねえ、外に居る間にいい事思いついたんだけど聞いてくれる？」

「あ、はい。なんですか？」

「あなた達、歳いくつ？」

「……はい？」

「だから歳よ歳、ねーんーれーいー。私が見たところ、私の受け持ちの生徒達とそんなに変わらないように見えるから、16か17くらいだと思うんだけど、あつてる？」

もしかして時の歩みも俺らの世界と変わらないのか？なんか都合がいいっちゃあいんだけど…いや、悩んでも変わらん。とゆうかなんで歳なんか聞くんだろう。

「はい。俺も他のヤツもみんな16です」

「ならちようどいいわ！あなた達、うちの学校に入学しない？寮もあるから住むところには困らないわよ」

——入学？……………入学！？

「「「えええ！？」」」」

入学！？え、なに、俺の妙案が即行でちゃった！？なんだこの虚しい感じ！

「い、いいんですか！？」

「ええ。別にあなた達なら問題ないわね。それとも嫌だったかしら？」

「いやいや！全然そんなことないです！！ないんですけど…：そんな簡単に行くもんなんですか？」

「行くわよ。だって私、先生だから」

そういう問題なの！？？どんだけ権限強いんだよ！！

「いいんですか！？えっと…：フラァーさん！！」

「もちろんよアスカちゃん。あなた達は私の命の恩人だからね」
命じゃなくてカバンだろうに。

「あの…デラクールさん」

「なに？アキラちゃん」

「あの…入学させてくれるって言ってくれているのはすごくありがたいんですけど…：ボク達お金とか持ってないんですけど…」

「お金なら大丈夫よ。流石に全額出してあげるとは言えないんだけどね。一応裕福じゃない家庭の子供でも入学できるように奨学金って言う制度があるから、その手続きくらいはしてあげるわ。それに在学中に少し働きさえすればお小遣い程度はどうとでもなるし、貯まったら返してくれば良いから」

奨学金まであるのか。なんというか…：凄いな。色々と。

「ですが…入学試験のようなものはないのでしょうか？」

「そんなものないわよ。入学に必要な条件なんて何処の学校も一緒でしょ？あなた達は立派にその条件を満たしてるじゃない」

「なんですかそれ」

「へ？もしかしてそんなことも忘れちゃったの？」
デラクール女史は『やれやれ』とでも言いたげな顔をして話を続けた。そして、俺達は『俺達の世界』と『この世界』との最たる違いを、聞いた。

「決まってるじゃない。魔力よ」

……………ん？

「……………あの、すいません。ちょっと良く聞こえなかったんで、もう一回いいですか？」

「だあかあらあー魔力よ、ま・りよ・く！どの学校でも入学条件は魔術を使うために必要な魔力を保有している人間でしょ！」

——『魔力』、か。

——それに、『魔術』、ね。ハハハ。

秋月も：笑ってる。日向も晃も：笑ってる。なあんだ、みんな『魔物』は分からなかったのに『魔力』は分かったんだあ。すごいなあ。

「…むう、何笑ってるのよ！！」

そんな事言われてもさあ。アハハ。

……………ふう。

はい、せーの————

って!!!??」

「ち、ちよつとアスカちゃん、落ち着いて落ち着いて!! ほら、アキラちゃんもカエデちゃんもクロノ君も座って座って!!」

お、おお……俺としたことが無意識に立ち上がったみたいだ。深呼吸しとこう深呼吸。スーハースーハー……よし、なんとか落ち着いた。

「ままま魔術ってマジかよ!??」

あら、全然落ち着いてなかった。やはり精神と肉体は別物ってことか。

「マジもなにも……ていうかあなた達は何をそんなに驚いてるの?」

「だって魔術って、魔法のことでしょ!?? わたし達魔法が使えるんですか!??」

「んー厳密に言えばちよつと違うんだけど……なあに? あなた達そんな世の中の基本的なことまで忘れちゃったのお?」

……あ、そっか。俺達『記憶喪失』だったんだ。

つっ―ことはなんだ、『魔術』とか『魔法』って言葉自体は知ってるのにも関わらず、それが空想上のものじゃなくて実際に使えるって事だけを知らないのっておかしいことだよな。

じゃああんまり驚いてちゃダメじゃん!! ヤバイヤバイ、マジで落ち着こう。スーハースーハー……よし、脳内深呼吸のお陰で今度こそ大丈夫だ。

「すみません。その……『魔力』とか『魔術』の話聞かせてくれませんか?」

「……まあいいけど」

今度こそ肉体のほうも大丈夫なようだ。

ってかあの先生もちよつと俺達の事おかしいって思い始めちゃったんじゃない? 不味くない?

「みんな落ち着いたかしら」

「はい」「ええ」「はい」「そこはかとなく」

てかさつきも錯乱気味に思ったけど、みんな『魔物』は知らないの

に『魔術』とか『魔法』は知ってるのな。……ああ、『ハリーポッター』とかで知ってんのか。でもあれでも魔物が出てきたような……どうでもいいか。

「いい？世の中には二種類の人間が居るの」

「なるほど、男と女のことか」

「どうしてこの話の流れで私が男と女の話をしなきゃいけないのよ！片方は生まれつき『魔力』を持たない人間、そしてもう片方はそれを持つ人間ね。この世界にはいくつか学校があるけど、全ての学校の入学条件は『魔力を持っていること』なの」

「あの……フラーさん」

「ん？なあにアスカちゃん」

「フラーさんも魔術が使えるんですよね？」

「そりゃそうよ。魔術を使えない人間が学校の教師に成れるわけ無いでしょ？」

「その……フラーさんの魔術を一回見せてもらえませんか？」

「構わないけど、どんなのがいいの？」

「なんでもいいです」

「じゃあ……はい」

うおっ！！あの女が指を鳴らしたら急に真っ暗になりやがった！！

「もう良いかしら」

もっかい鳴らしたら明るくなった。ってことは俺達がここに来た時に聞いた音はスイッチを入れた音じゃなくて指を鳴らした音だったのか。通りでくぐもった音だったわけだ。

「すごいすごいすごーい！！すごいよ晃ちゃん！！魔法だよ魔法！！」

「うん！！すごいね！あすか！！」

「おい！！ちょっとお前らマジで落ち着け！！ふし……ン、ンンッ！！」

不信に思われるだろうが！！

「……………コレは夢でしょうか」

「自分のほっぺ引っ張ってみ」

「いふぁいふぁいふぁいふぁい！！いふぁいれす！！」

うーむ、たまにこのコもおかしいんだよなあ…。どうして両側を引っ張るのか。片側だけでいいじゃん。

「ねえ、さっきも聞いたけどどうしてあなた達そんなに驚いてるの？」

くっ、やはりその質問が来たか……………なんとか誤魔化さなくては！

「す、少し記憶が混乱してるだけなんです。気にしないでください」

「そうゆう問題じゃないわよね。だってあなた達、魔術はもうとっくに見たでしょ？」

「え？あ、ああ。ここに来たばかりの時は部屋が真っ暗だったんであなたが指を鳴らしたのが見えなかったんですよ」

「違うわよ。もっとその前」

……………前？はて、いつのことだ？

あの良くわからん黒いドロドロのことか？いや、でもこの人がそんなこと知ってるはず無いし…何のことだろ。

「前って、いつですか？ボク達はそんなもの見た覚えありませんけど」

「何を言ってるのよ。クロノ君が使ったのを目の前で見てたんじやないの？」

「はぁ！？俺！？」

え？俺使ったの！？いやいや、使ってないよ！

「だってあなた、あの泥棒を捕まえる時に《身体強化》したんでしょ？さっき外に居た時ちよっと現場の方まで行ってみたらみんなそう言ってたわよ？」

あん？しんたいきょうかぁ？なにそれ。てかたったの数分でどうやってあの場所まで…。

「クロノ君が《身体強化》を使って泥棒を捕まえたのを、あなたはさも当然のように目の前で見てたんでしょう？　っていうことはあなた達も魔術のことを覚えていたからその時驚かなかったんじゃないの？」

「……あああはいはい、だからさっきからこの人は何度も『何で驚いてるの？』って言ってたのか。」

つまり、どうして魔術を知っている人間——つまり俺達四人——が魔術のことについて、そして魔術を使える人間（この場合は俺か？）を見ていたのにも関わらず、今の話で驚いてるのかってことだったのか。

さて、どう説明したものか。————— 適当に本当のことを言えばいいか。

「あのーすいません」

「…なによ」

あ、ちよっと不機嫌になっちゃったか。まあ無理も無い。あんだけ不自然なことを重ねねば。

「一つその件についてお話したいことがあるんですけど」

「…だからなによ」

「別に俺魔術なんか使ってないですよ。思いつき走っただけです」

「……………はい？」

「それにアレくらいなら俺達みんな出来ますよ。てか魔術の使い方なんて知りませんし」

まあ俺以外は『走る』方はしっかりと試してないけど、ジャンプ力もあんま俺と変わらなかったし、あれくらいできるだろ。

「……………ちよっと待ってちよっと待って。じゃあ何？　あなたはあの男に走ってぶつかったただけなの？　魔術を使わずに？」

「そうですよ」

体当たりじゃなくて蹴りだけど。

「どんな体の構造してるのよ……！！！」

どうわっっ!!! 怖っっ!!!

「嘘をつかないで!!! そんな人間いるわけ無いでしょうが!!!」

「ち、ちよっと落ち着いてください!!!」

さっきと状況がまるっきり逆じゃないか!!!

「ほら! お前らもボーっとしてないでなだめるのを手伝え!!!」

「は、はい! デ、デラクールさん! 落ち着いてください」

「どおーどおーどおー!!!」

「怖くないよ!!! なんにも怖くないよ!!!」

結局このギャーギャー言ってる教師をなだめるのに60秒くらいかかった。

魔術！ 魔術！！ 魔術！！！！（前書き）

今回の話は各キャラの会話が多分に含まれております。

よく「キャラが勝手に動く」という言葉を小説等で目にしますが、それをここまで実感できたのは初めてです。

魔術！ 魔術！！ 魔術！！！！

『たまには別視点もいいんじゃないかな　く楓く』

「ごめんなさい、少し取り乱したわね」

「い、いえ、大丈夫です」

はあ………疲れました。まさか翔さんの一言でああなるとは思いません……いえ、それは私達がこの身体能力のことを知っていただけで、デラクルさんの態度の方が普通なんでしょう。人が走っただけで地面が掘れるなんて現象、目を疑いますし。

「さてと、そうなる少し問題が発生することになるわ」

問題：一体なんでしょうか。

「さっき言った入学のことよ。私はあなたが魔力を使えるものだと思ったから入学の話をしたわ。でももしあなたが……とても信じられないけれど、ただの身体能力であるのだとすれば、入学必要条件である『魔力保有者であること』ってのを満たしていないことになっちゃうのよ」

「……なるほど。じゃあ俺達は入学出来ないって事ですか？」

「別にそういうわけじゃないわよ。確実に入れるという保証がなくなっただけ」

「えっと、じゃあ他にも入学が可能になる条件があるんですか？」

「違うわ。結局のところ、さっきも言ったけど入学するに当たって必要不可欠なのは魔力の有無。要するに魔力が在るか無いかを調べて、在ればいいだけ」

「…なら、もし無かったらどうなるんです？」

「その時は…残念だけどこの話は無かったことになるわね」

ということはまた最初から考え直し、ですか。住む所を探して、

お金を稼ぐ方法を教わって。……元々入学という話は、私達にしてみれば『駄目で元々』でしたしデラクルさんが厚情からしてくださったものなんですけど……やっぱり期待が大きかっただけばかりしちやいますね…。

「……わかりました。それで、どうやって魔力があるかどうか調べられますか？」

「別に難しいことをするわけじゃないわ。上を見てくれる？」

上？——発光している天井があるだけで、他には特に何も無いように見えますけど。

「もう判つてると思うけど、この天井は魔術によって光ってるの。あ、もういいわよ」

「それで？」

「詳しい話は端折^{はしよ}るけど『魔術』って言うのは基本的に想像なのよ。だからこの天井も『光れ』って思えば光るの。けどただ思っただけで光らせるのはちょっと難しいから、さっきの私みたいに指を鳴らしたりしてちょっとした合図を自分にしてあげるわけ。『指を鳴らせば光る』ってね」

「でも俺達は魔力の使い方を知りませんよ」

「そんなもの今はいらないわ。魔力を持ったものが『光れ』と思えばこの天井は光るのよ」

……つまり、私達がこの天井を光らせる事が出来れば晴れて『魔力保有者』、何も起こらなかつたら……ただの身体能力が高い『ヒト』ということ、かあ。

「せんせー、質問でーす」

「はい、なんですかクロノ君」

いかにも先生という雰囲気でデラクールさんが答えた。その仕草は当然のように慣れたもので、デラクールさんの授業風景が想像される。

「『光れ』だったら光るんですよ？」

「ええそうよ」

「じゃあ『消えろ』だったら……ってうわ！！消えた！！」

——え？え？真っ暗！！

「……はい、クロノ君合格おめでとう。早く明るくして頂戴」

「あ、はい、スイマセン」

あ、スツて明るくなりました！翔さんがやったんですよ！？

「すごいです！翔さん！！」

「翔ちゃん魔法使いみたいだったよ！」

「合格一番乗りじゃん！おめでとう、翔！」

「え、あ、ああ、ありがとう」

翔さんも何が起こったのかわかってない顔をしている。

「ねえねえ翔ちゃん翔ちゃん！どうやったの！？」

「え？いや、別にあの先生の言う通り、特別なことは何もしてないんだ。ただ真っ暗になる部屋を想像してたら急にパツと暗くなっちゃって……」

「……多分クロノ君の『消えろ』って言葉に魔力がこもったんでしようねー。それにしてもすごいわねー初めてなのにろくに意識もせずに魔術を使っちゃうなんて。先生関心しちゃうわ」

「……全然そうは見えないんですけど」

「してるわよ。ただ本当だったらもうちょっと雰囲気出してからやりたかっただけよ。なのいきなり話してる途中でやつちゃうから、ちよつと拍子抜けしちゃっただけよ」

「……どーもすいませんね」

翔さんが謝る必要は無いと思うんですけど……デラクールさんの気

持ちもわからないでもないって言うか…。

「まあいいわ。じゃあもうドンドンやっちゃって」

……目に見えて適当になりましたね。

「次はボクがやって良いかな。こういうのは先に終わらせておきたいんだ」

なんとなく微妙な空気の中、次を希望したのは晃さん。遠慮がちに手を上げながら周囲…私とあすかさんを伺っている。

そういえば晃さん、学校でも発表する時はいつも早めに終わらせてましたね。翔さんはいつも期限ギリギリになって適当に終わらせてましたけど。きちんとやれば絶対良い成績が取れるはずなのに。

「えっと…指を鳴らせば良いんだよね。………あーもうすつごく緊張する!」

「ええい、落ち着け! 案外簡単だから!」

「う、うん。じゃあ…行くよ。………っ!」

————パチンツ!

あ! 暗くなりました!

「や、やったよ翔! ……ボクにも出来たよ! ……」

「ああ、良かったな。とにかく早く明るくしてくれたまえ」

ふふ……言葉はそっけないけど、なんとなく優しい感じがします。

「はい、合格おめでとう晃ちゃん。コレであなたもうちの学校の生徒よ」

「…なんか俺の時と態度が違います?」

「気のせいよ」

「じゃあ次わたしがやりたい！！楓ちゃん、いい？」

本当のことを言えば私も最後にはなりたくないですけど…。

「ええ。構いませんよ」

どちらが先にやろうと結果が変わるわけではないし、別に……いいですよ。

「あ、そうだ。ねえねえフラァーさん」

「ん？なに？」

「わたし指鳴らすのできないんですけどどうすれば良いですか？」

「…え？え、えっとおゝ…そうね、さっきも言っただけ指を鳴らすのは単なる合図だから別に他のものでも構わないのよ」

「じゃあこうやって手をパンッて叩くのもいいですか？」

「ええ。問題ないわよ」

あすかさんって指鳴らせなかったんですね。…あすかさんには申し訳ないですけど、なんていうか、納得できます。

「じゃあいつくよおー。——『消えろ』！！」

——————パンッ

あー！！消えました！！

「翔ちゃん翔ちゃん翔ちゃん！！ちゃんと消えたよ！！わたしも“まじゅちゅつかい”なんだよ！！」

「…………ボソッ（これが天国か…いや、理想郷かもしれんな…）」

「あ、あすか！！翔に抱きついてないで離れてよ！！翔が苦しんでるよ！！それに思いつきり噛んでるよ！！」

「えー別に首絞めてないよ。それに翔ちゃんは何も言ってないよ？」

「いいから！！速く離れるの！！！」

……あすかさんはまた翔さんにくっついてるんですか。

と言いますか、この世界に来てから私いい事が全然ありませんよ！！あすかさんは翔さんにくつついてますし、晃さんなんてあの草原であんなに翔さんと…み、密着して！！しかも抱きかかえてもらったりなんかしちゃって！！ずるいですよホントにもう！！！！

「アスカちゃんもおめでとう。後はカエデちゃんだけね」

「……っ」

———。そっか。あとは私だけ、でした。

「他のみんなも出来たことだし、カエデちゃんも魔術が出来ればみんなで入学できるわ。がんばってね」

デラクールさんが軽く言った言葉を聞いて思う。

——私が出来ればみんなで合格？

……私が出来なければ私だけ、不合格？

「……どうしたのカエデちゃん、顔色悪いけど。もしかして緊張しちゃったかしら」

「あーもーフラァーさんが変なこと言うからですよ！」

「え、私がいけないの！？」

「そうそう、あすかの言うとおりですよ」

……私だけ、駄目だったらどうしよう。

……私だけ、出来なかったら、みんなに迷惑かけちゃう。

……みんなは優しいからもし私が出来なかったら、私だけを置いて入学なんてしない。

……みんな、私を気遣ってくれる。

……でも、駄目。

……私は、絶対に、『私のことは良いですから、みなさんだけでも入学なさってください』なんて言ってしまう。
そんなのは、本当は、嫌なのに。

「あ！！消えた！！消えたよ晃ちゃん！！！」

「うん！！楓も出来たんだ！！」

「おめでとうカエデちゃん。これでみんなで入学出来るわね！！」

——え？私は何もやってな………？

何かが…私の手に…。

もしかしたら……これは…。

「翔……さん？」

翔さんの……手？

「…うん。俺が消した」

「うひゃっ！」

翔さんが、耳元につっ！！！

「…ゴメンゴメン、あいづらに聞こえないように喋んなきゃいけ

ないと思ってさ」

「どうして…?」

消したんですか?

「秋月……怖がる心配なんてないって」

———っっ!!

「『光れ』って強く思うだけだ。大丈夫、秋月なら出来るさ。俺が保証する」

翔さんが離れるのを感じて、でも手だけはギュッと握っててくれている。

翔さんはきつと…微笑んでくれているんでしょうね……。

そしてどうせその笑顔は、子供に見られたら確実に泣かれるようなもので。

———覚悟は、出来ました。

いえ、その必要ありません。

だって、翔さんが、私には『出来る』と言ってくれたんですから。出来るに決まっています。

「…………『光れ』」

――ほら。

……あ、手が離れちゃいました。

「あなたもクロノ君と同じで合図無しで出来るのね。いきなり暗くするから驚いたわ。フフ、凄いいじゃない」

「先生先生、やっぱり俺の時と態度が違うような気がするんですけど」

「気のせいよ」

「コレでみんなで学校にいけるね!! 楓ちゃん!!」

「ええ、そうですね」

こうしてあすかさんと手を取り合って喜びあえて、本当に…良かった。

「ねえ楓、なんですぐに明るくしなかったの？」

「べ、別に理由なんてありませんよ？」

消した人と点けた人が違うなんて言えませんか…。

「あれ？なんか楓ちゃん、左手が右手に比べて暖かいよ？」

「え!？あ、コ、コレはその、さっきから手をずっと握り締めたからですよ!!」

「どうして？」

「さ、最後だったので、つい緊張しちゃいました…。」

言えません：『翔さんに手を握ってもらったからだ』なんて：時間が空いた理由以上に言えません！！！！

「……なんか怪しいね。あすか」

「……うん、怪しい」

「ほらお前ら、さっさと席につきなさい。お話を聞かなきゃいけないんだから」

「「……はーい」」

ほっ。

「じゃあ改めて聞かせてもらおうわ。あなた達、うちの学校に入学する？」

儀礼のような言葉だろう。ここにいるすべての人が答えが分かっているけれど、それでも私達は答える。しっかりと、声を合わせて、

「「「はい」」」

と。

「わかりました。では正式にあなた達を【アレクサンドリア立教育機関】の生徒として認めます。はい、終わり」

……え？なんですかそれ？

「あの、いくつか質問があるんですけど」

「はい、どうぞクロノ君」

やっぱり翔さんから質問に行く。

それもそうですね。あすかさんは：『あまり口を挟むな』と言われてましたし、晃さんはあまり先生に対して話し掛けるような人ではありませんし。

そう言えば、こうして言葉の最後に相手の名前を付けるところはやっぱり先生なんだなあって思います。

「【アレクサンドリア立教育機関】ってのが正式名称なんですか？」

「うーん、正式名称と言われると…ちよつと違うわね」

「どういふことですか？」

「基本的に『学校』というものは一国につき一つしかないのよ。だからこの国で『学校』と言えば一つしか指さないの。だから本来ならこの国で学校のことを口にする時はそれ以外の言葉をつける必要が無いのよ。他の学校は『アレクサンドリア』のところにその国の名前がはいるだけだし」

「じゃあなんで『学校』って言葉じゃなくて、『教育機関』なんて呼ばれてるんですか？」

「学校が出来た時にはまだ『学校』って言葉が無かったから。だから『教育機関』なの。後々になって『学校』って言葉が出来て、一々『教育機関』なんて呼ぶのが面倒になったから今では『学校』って呼んでるのよ」

「へえ、詳しいですね」

「む、当たり前よ。コレでも歴史の教師なんだからね」

……ああ、そういえばそういう設定でしたね。

「んじゃもう一つ質問。『学校に新しく生徒を入学させる』なんてことを歴史の先生が勝手に決めちゃってもいいんですか？なんかもっと手続きとか必要ないんですか？」

「それは全然問題ないの。さっきも言ったけど学校への入学条件は魔力保有者であることなのね。それに加えて適当な年齢であること。ここまではいい？」

「はい」

「じゃあこの世界の人間の中で、魔法を使える人はどれくらいの割合だと思う？」

「…半々、くらいですか？」

「違うわ。約4割弱」

4割弱、ですか。聞くだけだとそんなに少なくもないような気がします。…つまり、40人居るクラスがあって、その中の10人が使えるか使えないかって事ですよね。そう考えてみれば確かに少ないかも。

「残りの6割の人間は魔術の使えない、いわゆる普通の人間よ。そしてこの世界では魔術が使えるか使えないかで待遇が大きく変わってくるわ。一部では選民思想みたいなものもあるしね。あとは単純に所得の差もある。どうしても魔術が使える人間じゃないと出来ない仕事というのがあるから」

「…なるほど。だからどんな家の子供でも入学出来るように奨学金制度があって、入学に試験が無く、教師には魔力保有者を自由に入学させることが出来るって事か。いや、むしろ積極的に入学させろって言われてる感じかな？」

「そう、完璧に正解。あなた中々鋭いわね」

ふふん、そんなの当然です！翔さんは頭がいいんですよ！ただ面倒くさがりでやる気がなくて根気がなくて諦めが早いだけなんですから！！好きな人が他人から誉められるのって少し誇らしいですね！

「さて、学校のことはもういいわね。細かいことは明日でいいでしょう。じゃあ最初の話に戻るわね。何かこの世界のことと質問あるかしら？」

「はいはい、わたしからです！」

あすかさんはすごく元気が良いです。やっぱり喋りたかったんでしょうか。

「あの町の外にあったお城みたいな建物はなんですか？やっぱり見た目どおり誰か王様でも済んでるんですか？」

「お城？…そんなものあったかしら」

「ありましたよ。遠くにでしたけど」

「…………ああああ！アレの事ね。フフ、あれはお城なんかじゃないわよ」

「じゃあなんなんですか？」

「アレがあなた達が通うことになった学校よ」

「「「えええー！？」」「」」

あのとても大きい建物が学校ですか！？確か何かの映画で見た…
…ええと…何でしたっけ……まあ覚えてませんけど、あの魔法学校
くらいありましたよ！！

「驚くのも無理ないわ。あの学校は【エスタ】に在る四つの学校の
うち、一番大きい学校だから。あなた達が『学校の大きさ』に対
してどんな認識があるのかは判らないけど。あ、でも他の学校もあ
そことあまり変わらないわよ」

「へえーじゃあわたし達はあそこに住めるんですよね！？」

「クス、そうよ。まあ正確にはあそこじゃなくて寮だけど……似
たようなものよ。よかったわね」

「やったあ！！スゴイね晃ちゃん！！」

「ち、ちょっとあすか、立ち上がなくていいから…座って座っ
て！」

あ、そう言えば私も『時間』の事を聞く事になっていました。

ですけどさっきの年齢の話から推測するに、どうやら時間の流れ
もあまり変わらないようですね。一日の時間も一年の時間も。じゃ
あ後は…お金の事ですか。

ですがそれも入学する事になった今となっては、さほど急いで聞

くような事でもありませんね。

「じゃあ最後に一つだけ良いですか？」

「あら、もう最後でいいの？」

「まあ今のところは」

私達が聞こうと思っていた事は聞く必要がなくなりましたからね。あすかさんと晃さんはお金の事を訊かない翔さんに不思議そうな顔をして翔さんを見ていますけど、後で説明してあげましょうか。翔さんは絶対してくれないでしょうし。

「学校の事についてなんですけど、いつ頃からになりそうですか？主に入寮が」

「明日よ」

そんなに早く出来るんですか！？

「はあ、明日ですか。ありがとうございます」

「なあに、クロノ君は他の子と違ってあまり驚かなかったみたいね。期待してたのに」

「……もう今日は驚く事に疲れたんですよ。今なら何を言われても冷静に受け止められますね」

「あらそう。実は私、産まれた時は男だったのよ。一昨年性転換おとししたの」

「「「ええ！！？」」」

「……冗談よ。あなた達が驚いてどうするのよ」

「俺は嘘だって事がすぐにわかりましたからね」

「……ふうん。後学のためにその理由を教えてもらえないかしら？」

教師が後学のために嘘の見分け方を教わるって言うのはどうなんでしょうか。生徒がついた嘘を見分けると言う事なのか、自分の嘘を見分けられなくすると言うことなのか……どちらでしょう。

「うーん、言葉じゃ説明し辛いですね。なんて言うかこう……『感覚』ですかね。俺自身よく嘘をつくのでなんとなく判るって言う感じですね。もちろん確実なものじゃないですけど」

「なによ、結構あやふやなのね」

「そりゃそうですよ。他人が考えている事なんて判るわけ無いでしょう？あとは精々少しだけしぐさに出るくらいですよ」

「あ、それは私も聞いた事あります。確か嘘をつくとき視線が右上のほうに行ったり手が不自然に動いたりと言うものですよね」

「そうそうそれそれ。それにしても秋月、お前よく知ってるな」前に心理学か何かの本に書いてあったのを覚えてたんですけど：今ここでそんな事言ったら『記憶が戻ったのか』と言う事になってしまうかもしれませんので、ここは黙っておきましょう。

「話が逸れたわね。元に戻しましょう。それで学校の事なんだけど、一応入寮も入学も明日からということになるわね。幸い新学期になってからほとんど時間が過ぎてないから授業の遅れも無いから、その辺の事は気にしなくて良いわ。まだ一学期だし、あなた達是一年生になるから」

私達は高校二年生なんですけど……まあアメリカとか中国も日本とは学年の分け方が違いますし、似たようなものでしょう。

「はい、それを聞いて安心しました。劣等性にはなりたくないですからね。ハハハ」

……なあーにが『安心しました』ですか。翔さんは遅れてたって全く気にしないでしょくに。

「あ、そういえば一週間とか一ヶ月とか……歳月の話はまだしてなかったわね。別に今しなきゃいけない話でもないけど……どうする？」

あ、丁度話があがりましたね。お願いしちゃいましょうか。

でも……なんというか『この世界』、不思議なほどに『私達の世界』と似通っていますし、恐らく同じでしょう。

「私達の世界では一週間って言うくくりがあって、七日間で一週

間なの。一週間が四つで一ヶ月、それが12で一年ね。ちょっと覚えづらいかしら」

「いえ、全くもって問題ないです。簡単に覚えられました」
同じ物ですからね。

「じゃあ次ね。その一週間の七日間にはそれぞれ呼び名があるのよ。その曜日によって学校や仕事なんかが有るか無いかが決まるから、こっちのほうもしっかり覚えてね。一週間の最初の日が【ヘリオス】。言い方としては『ヘリオスの曜日』ね。次が【セレネ】、次が【アレス】、次が…」

「ちょ、ちょっと待ってください。そんなにドンドン言われても覚えられませんって。秋月、メモってもらえる？」

「あ、わかりました」

どうしてこんなところだけ違うんでしょう……それに聞きなれない言葉でしたし。

「もうちょいゆっくりお願いしますよ先生」

「はいはい、わかったわよ。じゃあもう一度ね。まず最初が【ヘリオス】よ。この日は仕事も学校も基本的にお休みの日よ。もっともお店なんかはお客さんが沢山来るから稼ぎ時だけどね」

【ヘリオス】……日曜に当たる曜日でしょうか。

「次が【セレネ】。休み明けだから無気力な人が多いわ。因みに今日はこの曜日なのよ」

【セレネ】、と。

「後は別に説明なんて無いから名前だけ言うわね。いい？ カエデちゃん」

「あ、はい、大丈夫です。お願いします」

「三日目が【アレス】、そこから順に【ヘルメス】、【ゼウス】、【アフロディテ】、【クロノス】よ。そしたらまた【ヘリオス】に戻るの。『第二ヘリオス』なんて言い方もするわ」

えっと……もしかしてこれって全部神様の名前なんじゃないですか

？『ゼウス』と『アフロディテ』は聞き覚えがありますし。

あすかさんと晃さんも不思議そうな表情をしていますね。…いえ、あすかさんの場合は『何その言葉』という感じですか。翔さんは気付いてるみたいですが……なにか怪訝そうな表情でもありますね。

「どうしたの？クロノ君。なにか思い当たる節でもあった？」

「…いえ、なんでもありません。それより、他に暦関係で覚えておいたほうがいい事ってありますか？」

「そうね、あとは月の呼び方。別名があるってことも覚えてない？」

「はい、何も」

「そう、じゃあ教えてあげるけど、曜日と違ってこっちのほうはあまり呼ばれないからそこまで無理して覚えなくても大丈夫よ。こっちの人でも言えない人が結構いるから。普通に一月、二月…って呼べばいいだけだしね」

「ということは今から説明されるのは私達で言う『睦月、如月…』とかと同じでしょうか。」

「まず最初が【アインス】。因みに今月ね。二月が【ツヴァイ】、三月が【ドライ】よ」

【アインス】、【ツヴァイ】、【ドライ】って…まさかコレ…

…ドイツ語の数字の数え方？

「そして次が…」

「…【フィーア】、【フუნフ】、【ゼクス】、【ジーベン】、

【アハト】、【ノイン】、【ツェーン】、【エルフ】、【ツヴェル

フ】…ですか？」

「…あら？思い出したの？」

「…ええ、最初を聞いたなら思い出しました」

へえ、翔さんってドイツ語の数え方も知っていたんですか。私はゼクス辺りまでしか知りませんでしたよ。

「さて、私の講義もこの辺りまででいいわよね。もう他に質問は無いんでしょ？」

「はい、大丈夫です」

「じゃあ私はちょっと出かけてくるから留守番お願いね」

「え？ちよっと、何処行くんですか？」

「決まってるじゃない、学校よ。あなた達の事を機関長に話してくるの」

機関長………校長の事？

「そうじゃなくて……見ず知らずの私達を自分の家に置いていくんですか？」

「なあに？あなた達、泥棒でもするの？」

「なっ！しませんよ！」

「じゃあ問題ないじゃない。それに家を出ると言っても30分くらいで帰ってくるから大丈夫よ」

「え、あんなに遠くまで行くのに往復30分もかからないんですか？」

「まあね。その辺は魔術のお陰ってやつよ」

『魔術』———どうやっているのかは知りませんが便利ですね。

本当に魔力があって良かったです。

「それじゃあ行ってくるわね。あ、あまり家の中は漁らないでね。危険なものとかも多々あるから。それにクロノ君、私の筆筒は開けちゃダメよ」

「開けないよ!!」

………本当に行っちゃいましたね。大雑把というかなんというか……見た目にそぐわない性格の持ち主ですよ。

「ったく、なんなんだあの教師は！いい奴だと思って損した！ホントに開けて漁ってやろうか！」

「…そんなことさせないよ」

「じ、冗談だよ冗談。そんなに怖い顔すんなって晃」

「…本当ですか？」

「本当だよ！秋月までどうしたんだよ！冗談に決まってるだろう！？」

「…なら良いですけど。」

「それにしても翔ちゃん、なんでさっきは月の呼び方を言えたの？」

「あん？ああ、あれか。あれは何でかは知らないけどドイツ語の数字の数え方だったんだよ。英語で言う『ワン、ツー、スリー』ってやつだ」

「へえー、面白い偶然もあったものだね。ここまでわたし達の世界と似ているなんて」

「それだけじゃない。曜日のほうも俺達の世界のものなんだ。秋月は気付いた？」

「はい！」

全部神様の名前って事ですよね！

「どういうこと？ボクもどこかで聞いた事あるような気がした事はしたんだけど、全然わからないよ」

「わたしなんてこの世界特有の言葉かと思ったよ」

なんていうか…晃さんとあすかさんが知らない事を私と翔さんだけが知っていると言う状況は、やっぱり少し嬉しいです。

「まあ二人が判らないのも無理は無いな。アレは全部北欧神話に出てくるの神様の名前なんだよ」

ほーら、やっぱり！

「そしてあの曜日の当てはめ方は古代ギリシアで使われていたものと同じなんだ。もっとも、本当に使われていたかどうかはわからないらしいけどさ」

.....。

「へー、相変わらずよくそんな事知ってるね」

「俺はそうゆう神話とかが好きだったからちよくちよくそれ系の本とか読んでたからさ。それにしても秋月、こんなマイナーな知識までお前も良く知ってたな。流石に頭良いな」

「そうそう、楓ちゃんもすごいよ！」

「え！？あ、タマタマですよ！タマタマ！」

……た、たまにはこうゆう事もありますよね！

「それにしても学校、か。まさかまた通う事になるとはなあ」

「ボクとしては少し嬉しいな。これでやっと普通に女の子として通えるしね！」

「せっかくまた通う事になったんだから翔ちゃんも真面目にやってみなよ」

「けっ、絶対ヤダね」

「ふふ、駅までの帰り道の時と同じような話になってますね」

「そういやそうだねー。なんかわたし達って緊張感ないねー」

「それはお前ら三人だけだろ。俺なんか山椒の3倍くらいピリピリしてるっての」

「はいそれダウト。翔の何処がピリピリしてるの？普通緊張してる人はそんなにダラッとソファーにもたれかかったりしてないと思うよ」

「……ところで話は変わるけれど」

なんともまあ強引な話の变え方ですねー。

「お前らってさ、『魔術』とか『魔法』とかについてどれくらい

の知識がある？俺はソコソコホニヤラトウルトウルトウって感じ
なんだけど」

なんですかそれ。

「…うーん、わたしはほとんど何も知らないなあ。ゲームとかは
全然やらないから。精々あの有名なファンタジー小説とかで少し知
ってるくらいだよ。漫画も少女漫画ばかりだし」

「ボクもあすかと変わらないな。『秘密の部屋』までは映画で見
たよ」

「あ、私もそうです」

「へっへーん、わたしは『アズカバン』までだよ。わたしの勝ち
！」

「なっ、ボクだって小説なら『炎のゴブレット』の『上巻』まで
読んだもんね！ボクの勝ち！」

「お二人ともまだまだですね。私は『謎のプリンス』まで読みま
したよ」

「「負けたー！」」

「…何無駄に張り合ってるんだよ。ちょっと静かにしなさい」

あう、怒られてしまいました…。

「でも面白いよなあ。考えただけで光ったり消えたりするんだよ
？ほら」

あああ、そんなにパパパパと明るくしたり暗くしたりしたら目に
悪いですよ。

「なんで急にわたし達に魔力なんてのが生まれたんだろうね。前
の世界じゃそんなの無かったはずなのに」

「…あーそれはあれだよ日向、また例によって例の如く考えても
判らないってやつの類なんだよ。悩んでもしょうがないよ」

「そっかあ、そうだよねえ」

「それにしても不思議ですよね」

魔力のある人はどうやってその魔力を使ってるんでしょうか。た

だ思い浮かべるだけで使う事が出来るなんて…それも『使っている』
という自覚無しでなんて。

「他にどんな事が出来んだろ。ちょっと試してみよう」

「ダ、ダメだよ翔。もし変な事が起きちゃったらどうするの？」

「そうだよ翔ちゃん！」

「ダイジョブダイジョブ、俺を信じろって。な、秋月」

「え？あ、はい、そうですね」

何を言われたのか判らないまま返事をしちゃいましたけど…大丈夫
夫でしょうか。

「よし、じゃあやるか！」

「…もう、何が起きても知らないよ？」

翔さんは何をやる、と？

「………つっても、なにをやればいいんだ？」

「ガクッ。何も考えてなかったの？」

「じゃあさじゃあさ、風起こせないかな、風！こう、ヒューン
って！！」

「…風か。なんとなくイメージしづらいけど…まあやってみつか
！」

え？あ、魔術を使うんですか？

「俺もあの先生を見習って指を鳴らしてやろっと。じゃあ行くぞ
？せーの………」

パチンッ

わわわわわわっつつつつつ！！！！！！スカートがスカートがスカ
トが！！！！！！

「………日向さん、秋月さん、どうもありがとうございます。
白かったり水色だったりです。ペコリ」

「ち、ちよっと翔ちゃん！！もっと弱くやってよ！！！」

「そ、そうですよ!!何をやってるんですか!!!!」

「……………堂々とスカートめくりをするなんて、さすが翔、勇氣あるね」

「ち、ちがう!!不可抗力だ!!決してわざとではない!!」

「^{です}「問答無用!!!!」」

バシン!!バシン!!

「へぶっつ!!!!」

あら、おもわずてがでてしまいましたわたしったらとんでもないことを。

「……………いっつてえ〜。お前らなあ、両サイドから同時に叩かれたら勢いが殺せなくてダメージが増えるだろうが!!」

「あーらごめんあそばせ」

私は黙ってましょう。

「ったくよお。ホントにわざとじゃないのに。…あ、そうだ晃、今の脳裏に焼き付いた絶景のお陰でちよつと聞きたい事が出来ただけど、良い?」

……あらいやだ、もう一度叩かなければいけないんでしょうか。

「全然構わないよ。なに?」

「いやなに、そんな大層なことじゃないんだ。ふと思ったんだけどさ、お前今どんなパンツ履いてるんだ?」

ボグッ!!!!

「がふっつ!!!!」

バッターン

……………今の晃さんの手、グーでしたね。

「な、な、な、何を聞いているのかな君は!!!!?? 女の子に向かって!!!!」

「ま、待て、待ってくれ。別にいやらしい意味じゃ…」

「その質問のどこがいやらしくないのさ!!!!」

「ス、ストップストップ!!!! 痛いイタイいたい ITAI!! 蹴るな!!!!」

「……………一応晃さんを止めますか。一応。」

「ほーら晃ちゃん、ドウドウ」

「晃さん、落ち着いてください」

ああ、まだフーフー言ってます。

「イテテ：ほら、早く落ち着けて」

「翔が変な事聞くからこうなったんだよ!!!!」

「だーかーらー別にいやらしい質問じゃないって言ってるだろ？そりゃちよっと聞き方が悪かったかもしれないけどさ…」

「じゃあどういう意味なのさ!!!!」

「だからさーお前ってずっと男のフリをしてたわけだろ？だから下着とかはどっちを履いてのかなって思っただけなんだよ」

「……………まったく、言葉が少なすぎですよ。『どんなパンツ履いてるんだ?』なんて…………ただの変態じゃないですか。」

「……………基本的には男物だよ。じゃないと万が一見られたときに大変だからね。でも家の中では女物だったかな」

「ふーん。お前も大変だったんだな」

それはそうですね。私だったらいきなり『明日から男として生きろ』なんて言われても絶対に無理ですから。…………本当に大変だっ

たのでしょうね。

「よっしゃ、話を元に戻そう」

なんだか私達っていつつもすぐに話が脱線してしまいますよねえ。誰のせいでしょうか。

「取り敢えず風を起こす事は出来るみたいだな。ほれ、お前らもやってみ」

「…ヤダ」

「…イヤです」

「はあ？ どうしてだよ」

「ボクと違ってスカートがまくれるからでしょ？」

そういうことです。

「そんなもん簡単だよ。さっきあの先生が言ってたろ？ 魔術は『想像』だってよ。だからすこし弱めの風を想像すりゃいいんだよ」
ああ、確かにそうですね。

「翔さんは先ほどは何をイメージしていたんですか？」

「俺？ 俺はアレだよ、駅のホームにいる時を想像したんだよ。毎日受けてるからさ」

「だからあんなに風が強かったのか」

そういうことですか。理由だけには納得です。

……いえ、でもそれなら何故下から上向きに風が？

「じゃあ今度はわたしが一番にやってみるね！ …あ、そうだ。ねえねえ翔ちゃん翔ちゃん」

「何度も呼ばなくても聞こえてるっての。なんだ？」

「わたしにも指の鳴らし方を教えてくれないかな？ やっぱ手を叩くよりもそっちのほうがカッコイイし！」

「あー…あれは中々聞いただけじゃ出来ないんだよ。だから後で教えてやる事は教えてやるから今すぐってのは諦めてくれたまえ」

そうですねえ……確かに教わっただけじゃ出来ないんですよええ。

あと口笛とかも。私は出来ますけど。

「ええーじゃあわたしだけ手を叩くのおー？なんかかっこ悪いよ」
「んーっとじゃあ言葉を言うのはどうだ？」

「『かぜ！』って言うの？それもちよっと…」

「ちがうちがう、『風よ！！』って言うんだよ。『よ』があるかないかで結構違うね？」

「………うーん、それならいいかも。そうだなーじゃあわたしは扇風機の『弱』位の風を起こしてみようかな」

「おうがんばれ。出来るだけ鮮明にな」

「がんば、あすか」

「がんばってください！」

「じゃあいつくよおー。………『かぜ』よっ！！！」

あ、髪の毛が風で……。成功ですね！

「出来た！出来たよ！！」

「おう、よくやったな。誉めて使わす」

「やりましたね、あすかさん！」

「いやーあすかでも出来るんだねー」

「当然だね！！」

「じゃあ次はボクが…」

コンコン

——デラクールさんが帰ってきたみたいですね。

「入るわよー」

「あっちゃー残念だったね晃ちゃん」

「んー別にいいよ。また今度やるから」

「あら？何かしていたの？」

「ええ、少し魔術を試してみたんです。とは言ってもついさっき始めたばかりでしたので、翔さんとあすかさんだけですけれど」

本当は私もやってみたかったんですけど…別に今でなくても良い

でしょう。晃さんの言う通り明日でも構いませんしね。

でももし眠って、目覚めたら元の世界だったらどうでしょうか。ありがたい事はありがたいんですけど、それはそれで少し残念です。

「……魔術？あなた達、出来たの？」

「はいっ！さっきわたしと翔ちゃんが風を起こしたんですよ！」

「へえ、すごいじゃない。もしかしたらあなた達、他の人よりも才能あるかもしれないわよ。それより部屋の物は何も壊してないわよね？」

「あ、それは大丈夫ですけど：『他の人より』ってどうゆうことですか？」

「だってあなたとアスカちゃんはまだ魔術の使い方について習っていないでしょう？それなのに『風』を起こせたって事は、もしかしたら才能があるかもしれないって事なのよ」

「……？どうしてでしょう。」

「先ほどデラクールさんは『魔術は想像だ』とおっしゃいましたよね？と言う事は魔力の有る人はすぐにでも魔術を使う事が出来るんじゃないんですか？」

「違うわ。確かに私はそう言ったしそれが魔術使用時におけるものとしても重要な事ではあるけれど、でもそれを実際に行うのは口で言うほど簡単なものではないのよ」

「…良くわかりませんね」

「つまり、いくら一概に『想像』と言ってもキチンとした『やりかた』ってものがあるのよ。ただ想像するんじゃないってその想像に魔力を乗せられるような想像の仕方、ただ魔術を使おうとするんじゃないって魔力がとおりやすいような魔術の使い方、とか色々ね。その辺りの事は本来学校で教わる事なんだけど、それなのにあなたたちは入学前の今すでに魔術が使えるって言うから、もしかしたら才能があるんじゃないかと思ったのよ。もっとも、親が魔術を使えるような家庭だったりすると入学してすぐに魔術が使える子もいる事はあるから、もしかしたらあなた達もそうだったのかもしれないわ

ね」

「では記憶を失う前の私達がどこかの学校の生徒だった、と言う事は考えなかったんですか？」

他の学校の生徒が、記憶は無くしたけれど魔術の使い方だけは忘れていなかった、と思われる可能性も無い事は無いんじゃないかな、と思いますて。

「その考えもあったわよ。あなた達の服装は私からしてみれば生地といい造形といい見た事無いものだったけど、カエデちゃんとアスカちゃんが、アキラちゃんとクロノ君が同じ服を着ているってことはどこかの制服かもしれないと思ったわ。でもその考えもなくなっただわ」

「では、何故？」

「魔術を習い始めるのはあなた達の年齢からなのよ。しかも、さつきも言ったけどまだ新学期が始まってからほとんど時間が空いていないの。だからまだあなた達の年代の人はやっと魔力という物がどういうものか、自分の属性はいったい何なのか、それと一番簡単な《身体強化》くらいまでしか習っていない筈なのよ。にも関わらず今、魔術を使った。だからね。それにここから最も近い学校は少なくとも国境を越えなければいけないのよ？いくらあなた達に才能があったとしても、この時期に他国に来ることはありえないから」

まゝた新しい言葉が出てきましたねえ。今度は『属性』ですか。まあ大体想像はつきますけど。

「フラーさんフラーさん、属性ってその人の趣味嗜好のことですか？」

……そんなわけ無いでしょう。真顔で何を言っているんですかあすかさんは。晃さんも笑ってますし、翔さんに至っては痙攣してますよ。

「……いまいちあなたの言っている事が判らないけどとりあえず違う事だけは確かだわ。『属性』って言うのは魔術の種類の事よ。自分が持っている種類の属性の魔術なら使えるんだけど、持っていない

い属性の魔術は使えないのよ。例えば、アスカちゃんはさつき『風』の魔術を使ったんでしょ？ だったらあアスカちゃんは『風』の属性保有者ってことになるのよ」

「へえ。他にはどんなのがあるんですか？」

「ん。申し訳ないんだけど、その辺りの事は明日調べるからその時にしない？ そろそろ私疲れちゃったわよ。もう結構な時間なんだけど」

え？……あら、何時の間にか窓の外の景色が真っ暗でした。

「というわけで、そろそろご飯にしない？ 今から外に食べに行くのも面倒だから私が何か作るわ。とは言ってもたいしたものは作れないんだけどね」

「いいんですか？ ありがとうございますフラァーさん！」

あーすごく良い笑顔ですねー。

「…それよりも俺は風呂に入りたい」

「あーボクも」

あ、私もお風呂に入りたいです。

「申し訳ないんだけどこの家にはシャワーしかないのよ。この家を買う時に、普段は私も寮に住んでるからお風呂は無くてもいいかなって思ったから。ごめんなさいね」

「あう、そうなんですか。残念です」

「……お風呂入りたかったなあ」

「まあシャワーだけでもお借りできて良かったじゃないですか。もしデラクールさんにお会いしていなければ野宿だったかもしれないんですよ？」

「俺はシャワーだけでもまったく問題ないがね」

「翔さんと私達と一緒にしないでください。女の子はみんなお風呂が好きなんです」

「私も女だからその気持ちはすごく判るわ。寮に入ればちゃんとお風呂があるから今日のところは我慢して頂戴ね」

「いえいえ、うちのわがまま娘三人が文句なんぞを言って申し訳ありませんね」

私は言ってませんよ！

「それよりもあなた達、着替えはどうする？私の服を貸しましょうか？」

「ぜひお願いします」

「あ、ボクもボクも」

「わたしもー」

「はい、了解。それで……クロノ君はどうする？」

「なんですかそのニヤニヤした顔は！女物の服なんて借りるわけ無いでしょう！！俺は着替えくらいちゃんと持ってますよ」

「…ちっ」

「……え？舌打ち？」

「じゃあ用意するから少し待っててね」

「うおい！無視か！」

「でもなんで翔ちゃん着替えなんて持ってるの？」

「あん？今日は六時間目に体育があったからさ。一々制服を着なおすのは面倒だったから帰りは私服で帰ろうと思って持ってきたんだけど、結局私服は教室に置いたままで更衣室に持っていくの忘れたから、しかたなく制服着てるんだよ」

「ふうん、運が良かったね」

「ま、コレも俺の日頃の行いがいいお陰だな」

「ねえ翔、そんなボケにボクは突っ込まないからね」

「ボケじゃないし！本心だっつーの！」

「ま、まあまあ、あすかさんも晃さんもそんな猜疑心さいぎしんに満ちた顔は止めましょうよ。こういった面白い冗談を本心から言うのが翔さんなんですから」

「…ねえねえ、全然フォローになってないよね。それにそもそも全然俺の言ってる事を信じてくれてないよね」

「なに騒いでるの？服、持ってきたわよ」

「あ、ありがとうございます」

「アキラちゃんとカエデちゃんの問題ないんだけど、アスカちゃんには少し大きいかも知れないわ」

「あ、いえ、全然大丈夫ですよ」

「それでコレがクロノ君のぶんよ」

「だからいらないつつの！！しかもそれが一番女っぽい服じゃないか！！何でそれだけヒラヒラしたものがいっぱいいてるんだよ！！！」

「あらイヤね、年上に向かってそんな粗雑な言葉遣いはダメよ」

「そうだよ翔ちゃん。フラーさんはわたし達の命の恩人と言っても過言じゃないだからね？」

「そうそう、あすかの言うとおりだよ翔。ちゃんと敬語を使いなよ」

「それに結構可愛い服じゃないですか」

「あーもーなんなんだこいつらは！めんどくせえー！！」
あら、少しからかい過ぎちゃいました。

「さてと、じゃあ私はご飯の準備をしてくるわ。その間にあなたはシャワーを浴びてきちゃってね」

「あの、私手伝いましょうか？」

「お客さんにそんな事はさせられないわよ。良いから浴びてきちゃいなさい。あ、シャワーはあの部屋よ。タオルとかは適当に使って良いから」

「はい、わかりました。ありがとうございます」
本当、優しい人ですねえ。

「んじゃ、誰から入る？」

「わたしはいつでもいーよー」

「ボクもいつでも」

「私もです」

「なんだよみんな適当だなあ。じゃあアレで良いか。背の順で」
あー背の順なんて言葉、久しぶりに聞きました。

「じゃあわたしからだね。じゃあ行ってきたーす！」

「はい、行ったらっしやい」

「なるべく早めにね」

「滑って転んで頭打ったりすんなよ」

「わかった！気をつけるね！」

そこは『そんなことしないよう！』じゃないんですね。

「つつてもやることねえなあ」

「確かに暇だね」

あう、私も晃さんや翔さんみたいに横になりたいですけど……ス
カートですし。しょうがないからソファーにもたれかかりましょう。

――――はあ……暇ですねえ。ボーっとす
るのにも疲れてきましたし。

お手伝いもしなくて良いと言われてしまいましたし……あ、そう
いえばカバンの中に……ありましたありました。お昼休みの食後に
やるためにこういった玩具は常備してあるんですね。

「私トランプ持ってますけど……なにかやります？」

「おトランプか。やろうやろう」

「でも3人しかいないよ？」

「いーのいーの、単なる暇つぶしなんだから」

「じゃあ罰ゲームはどうします？」

「別に無しでもいいっしょ。俺達だけで罰ゲームありのトランプなんて不公平だからな。やる時はちゃんと日向も入れないと」

「じゃあなにやろうか」

「ババ抜きでいいんじゃないですか？」

「あーいいいいいよ。んじゃ配るから貸して」

カードを配るのは翔さんが一番うまいんですね。あと切るのも。相変わらず速いです。

「ねえ翔、ひとつ聞いて言いかな？」

「あん？なんだよ」

「ちゃんとババ一枚抜いた？」

「……そーゆー大事な事はもっと早く言えよ！」

「ボクのせい！？」

「ならジジ抜きにしません？回収するのも面倒ですし」

「あーオツケーオツケー。さすが秋月、晃とは頭の出来が違うね

え」

「ババ抜きなのにババを抜き忘れたヤツが何言ってるのさ」

「うっさいうっさい。ほら、配り終わったから早くやるぞ」

「コレって同じカードは手札から抜く時に裏にするんでしたっけ

？」

「そりゃそうっしょ。じゃないとなにがジジなのかわかったちゃうかもしれないだろ」

「え、なに？余ったカードって『ジジ』っていう言い方するの？」

「じゃあ晃はあのカードをなんて呼ぶんだよ」

「いや、特になんとも呼ばないけど」

確かに『ババ』は常識ですけど『ジジ』っていうのはあまり聞きませんよね。

「まあ何でもいいじゃないですか。それより早く始めましょう。私は捨て終わりましたよ」

「ボクもだよ」

「俺もオツケーだ。…なんだ、みんな少ないな」

私と晃さんが2枚で翔さんが3枚ですね。

「なんか短期決戦だね」

「いやいや、こう言うときに限ってジジが回って中々決着がつかないもなんだよ」

「じゃあ誰から引きます?」

「一番枚数が多い翔からで良いんじゃない?」

「俺としては最初に引いてもらいたかったんだけど……まあいいや。ほら晃、手札をしよう見せい。……これだ!——よし、一枚減った!」

「じゃあボクは楓からだね。——あ!同じだ。ボク上がり!」

「はやっ!」

「うーん……なんか早くあがっちゃうとつまないなあ」

「けっ、それが一位の宿命だよコノヤロウ」

あーとっても悔しそうですね……私も少しそうですね。私も晃さんにちよこつと嫌味の一つでも言っておきましょうか。

「最後の二択でジジを取り合うのも結構楽しいですからね」

「そうそう、一位の人はそこで俺達の無駄に盛り上がる戦いを見てな。ほれ、はよう引きいや」

「あ、はい。——あ……私も上がっちゃいました」

「……………」

なんか……とても申し訳ない気持ちに……。

「あっはっはっは!……いやあ……とっても白熱した戦いだったね翔!!手に汗握っちゃったよ!」

「ぐっ……………」

まさか一周で終わってしまうとは……あら？あすかさんが上がってきたみたいですね。なんとも早い……やっぱ子供は早くお風呂から上がりたくなるんでしょうか。

「ただいま。次は誰がはいるう〜？」

「晃あ！お前さっさと行け！」

あ、八つ当たり。

「翔もそう言ってることだし……ねえ楓、ボクが先に行ってもいいよね？背の順からしてもさ」

「あ、はい、どうぞ」

「んじゃ行ってくるね」

「早く行けての！」

晃さん、すごくいい笑顔でしたね…。

「なにになに？なんで翔ちゃん拗ねてるの？」

「拗ねてない！」

「いま三人でジジ抜きをやっていたんです。そしたら翔さんがあっさり負けてしまったんですよ」

「あ〜そうなんだ。まったく、そんな事くらいで拗ねるなんて翔ちゃんもまだまだ子供だなあ」

「お前に言われたくないし拗ねてもいない！！ほら、もう一回やるぞ！」

「相変わらず翔ちゃんは負けず嫌いだね。これって罰ゲームあり？」

「いえ、三人でやるのは不公平だという事で今回は無しです」

「ほら、配り終わったぞ」

「あ、ちゃんとさっきのジジ入れ替えた？」

「……そーゆー大事な事はもっと早く言えよ！」

「わたしのせい！？」

なんかさっきも同じようなやり取りをしましたねえ。

「まあ適当に入れ替えれば良いじゃないですか」

「そうそうその通りだ。さすが秋月、日向とは頭の出来が違うねえ」

「入れ替え忘れてたくせに何言ってるの」

「うっさいうっさい。ほら、入れ替えたから早くやるぞ。あ、捨てるカードはちゃんと裏にしろよな」

「わかってるよ。――――あ」

――――あ。

「ん？どうした二人とも」

これは……………。

「ごめん翔ちゃん、…手札なくなっちゃった」

「…私です」

ということとはつまり、翔さんの手札もなくなるわけで。

……………ジジ以外は。

「……………もう……………ジジ抜きやめようか…」

「う、うん。わたしはかまわないよ！」

「そ、そうですね。少し休憩にしましょう！」

えっと…なにかこの雰囲気を払拭するような話題がないものでしょうか……………。

「そ、そういうえばデラクールさんにお借りした服、私達の世界の物とあまり変わらないようですね」

あすかさんはTシャツにハーフパンツですね。ただ多分デラクールさんが着ていたら膝上なんでしょうけどあすかさんが着ると膝下です。Tシャツの丈は……………あのアレのせいでちょうど良いみたいですけどおー。

「うん。生地はわたし達の服よりもちょっと荒い気がするけど別にチクチクするわけじゃないし、全然問題ないよ」

それは安心です。翔さんは……………まだ復帰していないみたいです。

……今のうちに聞いておきましょうと。

「……ボソボソ（あの……：下着はどうしてるんですか？）」

「え？ ああうん、……ボソボソ（流石に下着を借りるわけにはいかないし、かといって翔ちゃんがいるし、つけないのも不味いから我慢して同じの着てるよ）」

あー……やっぱりそうですよねえ。

早い内にデラクールさんに服が買えるお店を聞かないと……！！

「あん？ 何話してんだ？」

「えっ！？ いや、なんでもないですよ！ なんでも！」

「そうそう！ 翔ちゃんは気にしなくても良いよ！」

「な、なんだよすごい剣幕だな」

こんな話聞かせられないですよ……。

「次どうぞー」

あ、晃さんも早いですね。

「あれ？ もうトランプは止めちゃったの？」

「ん？ ああ、あんなモンもうやっとられんわ」

「なんか今日の翔ちゃんはスッゴク弱い」

「ええい、いらんことを言うな！」

「なに？ あすか達の時も負けたの？」

「うん。アレはまさに翔ちゃんがわたし達に手も足も出なかったって感じだったよ。ねー楓ちゃん」

「え、ええ。そういうことになりますね」

まあゲームが始まる前に決着がついてしまえば確かに何も出来ませんよね……。

「ぬあーに言ってんだよ。あんなの偶然だろグウゼン！」

「あれ？ 『運も実力のうち』じゃないの？」

「うぐっ……！」

「なんでもいいけどさ、次は誰が行くの？ 流れ的には楓だと思うけど」

確かにここまで女の子が続きましたし。背の順でもそうですし。

「先に行ってくれ秋月。男の俺が急に間に入るのもなんとなくおかしいような気がするし、何より俺はやっぱりこのチビッコとオカマをボコボコにしなきゃいけないんだ」

「オカマじゃない！」 「チビッコっていわないで！」

「はあ、わかりました。じゃあ私が行きますね」

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい」

「いってら」

さて、そうと決まれば着替え替え、と……。

「よし、やるぞ二人とも！俺の本当の実力を見せてやる！七並べで勝負だ！」

「よおーし、望むところだよ！」

「ねえ翔、配る前にさっきのジジを入れてジョーカー一枚抜いた？」

「……………」

このやり取りも三回目ですね。

はてさて、まだ後に翔さんがいらっやいますし、私も早めに上がらないといけませんね。さっさと服を脱いじゃいましょう。――
――脱いだ服は…部屋の隅に置いておけば良いですか。……あれ？この扉、鍵がついていませんね。……………まあ大丈夫でしょう。翔さんも向こうでトランプしていますし。

さてと……これまたデカデカと『洗体料』と書かれていますね。隣には『洗体料』と『洗顔料』ですか。他には見当たらないという事は…シャンプーだけですか。

まあデラクールさんも普段は学校で寝泊りしているとおっしゃっ

ていましたし、恐らくこの家に泊まることは殆どないために他のものが無いんでしょう。いや、そうに違いありません。そうであってください。

それにしてもコレ、どこにも『シャンプー』とか『ボディーソープ』などのカタカナが書かれてありませんね。いえ、正確にはカタカナ表記の英語が。カタカナ自体はちらほらありました。

もしかしたらこの世界では英語文化が無いのでしょうか。……いえ、ですが先ほどデラクールさんは『シャワー』という言葉は使っているらしいましたし、そういうわけじゃないのかもしれない。コレだってもしかしたら商品の特性上わざと日本語表記されているのかもしれないし。あ、ですけど今私達がいるのは日本じゃないから……えっと……ア、アレクサンドリア語？……言いづらい。

――色々と考えながら手を動かしていたらもう全ての工程が終わっちゃいました。

やる事が髪と身体を洗うだけならそれほど時間もかかりませんし、あすかさんや晃さんが早かったのも同じ理由でしょう。それじゃあ早くあがっちゃいますか。

えっとタオルは……あ、ありましたありました。確か自由に使っているとおっしゃっていまし、ありがたく使わせてもらいましょう。ううーやっぱりお風呂上りに同じ下着を着けるのは少し抵抗がありますけど……仕方ないですね。

あ、私もあすかさんや晃さんと同じような服です。なにやらあまり覚えが無い触り心地ですけど。じゃあ、出ますか。

「私もあがりました。……って何で翔さんはうつ伏せに倒れているんですか？」

「え？あ、ああお帰り楓。えっと、コレはちょっとした不幸が重

なっちゃった結果なんだよ」

「不幸？どうかしたんですか？」

「あのね、楓ちゃんが行った後にわたし達は七並べをしてたのね」

「それは知ってますけど」

「うん。それでさ、カードも配り終わったからゲームを始めたの。

そこまでは普通だったの」

まあなんら問題は無いですね。

「それで最初は翔からだだったんだけど、翔がいきなりパスをしたの」

……あーなんとなくこの後の想像がつかしました。

「その時はボクも翔の作戦だと思ったから二人ともパスしたんだよ。三回までしかパスは使えないけど、少なくともボクは手札的にパス使い切っちゃってもいけそうな感じだったし」

「わたしもそうだったから空気を読んでパス。そしたらまあそのまま流れるように、ね……」

翔さんがまたパス、晃さんとあすかさんもパス……それが続いてお終い、という事ですか。

「翔ちゃんはその時から今までずっとあの体勢なの」

「結局翔が持ってたカードの殆どが七並べでは足を引っ張るカードだったんだよ。もしこのゲームが大富豪だったらボク達があっさり負けてただろうね」

なんとまあ……この手のゲームならいつもは鬼のように強いはずですけど……今日は余程運が悪い日だったんでしょうね。もしくは罰ゲームが無かったからとか。

「でも翔さんには申し訳ないんですけど、そろそろ起きてもらわないと……」

「あーそうだね。早くシャワー行ってきたもらわなきゃね」

「おーい翔！早く起きなよ！！」

「うう……どうして今日はこんなに運が悪いんだ。くそう、神め！！」

「こんなことくらいで恨まれてたら流石の神様だっていい迷惑だよ。ほら翔！起きなつてば！」

「はあ…わかったよ。まったく…：晃はせっかちなんだから。おい秋月、そこにある俺のカバンを取ってくれ」

「あ、はい。ヨイシヨ…：ツツ！？ど、どうぞ」

な、なんでしょう…：何故かすごく重かったんですけど…：。例えるなら教科書を購入してそれを一気に持って帰る時くらいでしようか。いや、それ以上か…：。

私からカバンを受け取った翔さんはゴソゴソと中を漁って着替えを取り出していますけど…：あのあまり大きくないカバンにどうやって服を収納していたんでしょうか。まだ沢山物が入ってるみたいですし。

「よし、じゃあ行ってくる」

「はい、いってらっしゃい」

「行ってらっしゃい」

「滑って転んで頭を打たないようにしなよ！」

「大丈夫だ。しっかり受身は取るから」

そこは『そんなことしないよ！』じゃないんですね。

「…：よし、行ったね」

「ん？どうしたの？晃ちゃん」

「決まってるじゃん。翔のカバンの中を漁るんだよ」

「ダ、ダメですよ！人のものを勝手に触るなんて！」

「そうだよ！それに翔ちゃんは後でちゃんと見せてくれるって言うってたし」

「でも翔のことだし、いつのまにか有耶無耶にされちゃうかもよ？」

それは…：否定できませんけど。

「それに楓とあすかは気にならないの？コレの中身」

「うゝゝん、気にはなるけどおゝ」

確かに気にはなりますけど、私と同じであすかさんもなんとなく気が進まないみたいです。

「じゃあいいよ。ボク一人で見るからね」

「おーい！言い忘れてたけどー！」

「「「!!!!」」」

し、翔さんはまだ入ってなかったんですか！。

「勝手に俺の物に触ったら後で折檻^{せっかん}な！触ったか触ってないかは後で確認すればわかるから。因みに、連帯責任ね。そんじゃ」

と、言う事は晃さんが触ったら私も……違う違う、私とあすかさんも折檻！？

……………折檻？

「あ、危なかったあゝ。翔の声が後少し遅かったら触っちゃってたよ……」

「もう、絶対に触っちゃダメだからね！わたしまで怒られちゃうじゃん！」

「わ、わかってるよ。流石にあそこまで言われたらそんなことする勇氣は無いって」

「さて、どうしましょうか。私達もトランプします？」

「ボクはそんな気分じゃないなあ」

「わたしも。翔ちゃんが出てくるまでお話でもしてようよ」

「何を話すの？」

「うゝん……………思いつかないや」

「では、何をお話するかから考えましょうか」

「とは言ってもさあ、ボク達が3人の時の話題って大体いつも同

じだよねえ」

「まあ、そくだよねえ」

つまり、好きな人の話。畢竟するに、翔さんの話。

「そういえば、翔さんは今日何処で眠るのでしょうか」

「あーそれはボクも考えてた。この家って今ボク達がいる居間と向こうにもう一部屋、あとはお風呂場とキッチンしかないみたいだし」

トイレはまだ何処にあるか教わっていませんけど、多分あのシャワー室への扉の横にあるのがそうでしょう。

「じ、じゃあ翔ちゃんと同じ屋根の下で寝るってこと!？」

「まあ、そういうことになるのかな」

「むむむ無理だよそんなの!! 恥ずかしいよ!! っていうかなんで二人とも冷静なの!？ なんとも思わないの!？」

「い、いえ、私だって冷静ってわけではありませんよ」

ただ薄々と感じていた事ですから、改めて言われても冷静なふりが出来ているだけです。本当は結構焦ってます。

「ボクだって全く恥ずかしくないわけじゃないよ。ただボクは翔と同じ部屋で寝た事あるからね」

「「ええっ!!？」」

嘘……そんな……まさか……翔さんと晃さんが既にそういう関係だったなんて……!!

「ち、ちよっと二人とも、何か勘違いしてない？ ボクが言ってるのは修学旅行の話だって!」

「修学旅行? ……あ、そっか。晃ちゃんって男の子のふりをしてたんだもんね」

あ、ああ、そういうことですか。高校生になってからはまだ修学旅行はありませんから中学生の頃の話でしょう。晃さんは翔さんと中学生の頃からの付き合いでしたし。

「そ。だから別に今日同じ部屋で寝る事になっても、初めてってわけじゃないからね。その分落ち着いてるだけだよ。……ただ」

「ただ……なんですか？」

「……女の子としては今日が初めてなんだよね」

「そりゃあ、今まで晃ちゃん自分が女の子だって隠してたからね」

「あー……わかってたはずなのに口に出したら急に緊張してきた……！」

「……ふと疑問が湧きました。」

「そういえば晃さん、修学旅行の時ってお風呂はどうしていたんですか？」

まさかみんなで大浴場に行くわけには行かないでしょう。

「……うん、先生の中で一人だけボクの事情を知ってる人がいたからね。わざわざその人の部屋に行ってお風呂を借りてたよ」

なんか……『女の子の日』の子みたいですね。

「……ねえ二人とも。ふと思ったんだけどさあ」

「はい？　なんでしょうか」

「なに？　あすか」

なにやら、もじもじしていらっしやいますけど。

「……わたし達って翔ちゃんと同じお風呂を使ったんだよね。」

そして同じ香りの石鹸で髪の毛と身体を洗ったんだよね」

「……………」

「……………」

「……………」

「か、考えないようにしましょう」

「そ、そうだよな。うん、それがいいよ」

「あ、あははは」

「おい、どうした三人とも。そんなに顔を寄せ合いつつも俯いた
りして」

「「「!?!?!?!?」」」

「な、なんでもないなんでもないなんでもない!!」

「き、ききき気にしないで!!」

「うお……お前等顔が真っ赤だぞ。過去の恥ずかしい記憶の暴露
大会でもしてたの?」

ま、まあ恥ずかしい話っていうのはあながち間違ってもいません
けど!!

「そろそろ夕食が出来るわよ……ってどうしたのみんな。何かあ
ったの?」

「あ、先生。いやね、なんかこいつらが…」

「う、ううん! なんでもないです!!」

「ボ、ボクご飯運ぶのとか手伝います!!」

「私も行きます!!」

「わたしも!!」

「あ、ちよつとちよつと。お客さんんだから座っててって言っ
たじゃない!」

「…………あいかわらず変なやつらだ。まともなのは俺だけなのか」
後ろでツッコミどころ満載な台詞が聞こえましたけど、とりあえ
ず今は何も言わなくていいでしょう。

就寝15分前のテンション（前書き）

今回は短めです。申し訳ございません。

就寝15分前のテンション

「いやあゝ喰った喰った!! 腹いっぱいだ! 思い出もいっぱい!」

大人の階段のおくぼるうゝと。うん、いい歌だね。

ぶっちゃけさっきの飲み物と同じで見た目はおかしかったけど、味はすごく良かったな。意を決して喰った甲斐があった! もしかしたらあの泥水もおいしかったのかもしれない。

「なあに? まだあんまり食べてないじゃない。もうお腹いっぱいなの? アスカちゃんなんてあなたの4倍は食べてるわよ」

「あいつの腹は特殊なんですよ。都市伝説にもなってるんです。日向は喰っても喰っても腹が満たされない、なぜなら腹の中にもちっちゃい日向がいて、そのちっちゃい日向のなかにも更にちっちゃい日向がいて……というのが無限に続いているらしいですよ」

「わたしっていつの間にか化け物扱い!? 初めて聞いたよその都市伝説!!」

ま、そりゃそうだろ。俺が今作っただし。

「アスカちゃん化け物説は置いておくにしても、少なすぎるんじゃない? あなたぐらいの年頃の男の子なら普通はもっと食べるでしょう」

「翔は少食なんです。ボク達の中で一番食べないんです」

「俺の名前が『しょう』なだけに、なんてね」

「「「「……………」」」」

ヤバイ!! おもくそスベツた!!!

「で、でもさ、俺よりも秋月の方が食べてないと思うんだけど」

「…そうね。お口に合わなかったかしら」

「…いえ、そう言うわけじゃないんですよ。もともとコレくらいしか食べないんです」

ふう、何とか誤魔化したようだ。……いや、向こうが流してくれただけか。

「嘘言っちゃダメだよ楓。ボクとあすかしいない時はもっと」
な、ななな何を言ってるんですか晃さん!!」モガモガ」

なんという無駄の無いスピーディーな動きだ。実に素早く晃の口を塞いだな。いつもはもっとトロいのに……あれか、この世界に来た事による身体能力の向上のおかげか。

「……ふーん、そういうことね」

「ん? なにが『そういうこと』なんですか?」

「だからあ、カエデちゃんが少食に見せていた理由よ」

「ああ、それですか。俺も秋月が普段はもっと食べるって事は今始めて知りましたが、秋月も大変ですよねえ」

「……どうしてか気にならないの?」

「それくらい聞かなくてもわかりますよ。食事の量を減らす理由なんていくつかしかないでしょ」

「……あらそう? (好きな男の子の前でたくさん食べるのが恥ずかしいっていう女の子の気持ちがあったの? この子はもっと鈍感な子かと思ったんだけど…読み間違えたかしら)」

「なあ秋月、あんまり無理しないほうが良いぞ。身体に悪いからな」

「……うー」

おお、秋月がこんな表情をするとは……これはレアい。

てか日向と晃と先生はみーんなニヤニヤしてるけど、なんだなんだ？

「…翔さんは…その…あすかさんみたいにご飯をいっぱい食べる
ごによごによ（女の子の）方が良いと思いますか？」

「…ん？なんか『方』の前にボシヨボシヨ言ってた気がするけど
……まあ気のせいかな。普通に話が繋がるし。」

「そんなん食費がかさむから食べる量なんて少ない方がいいに決
まってるじゃん。それよりも運動するほうがいいぞ。健康にもな」

「「「………はい？」」」

「あん？なんだよみんなきょんととして。なんか間違った事言っ
た？」

「…ねえクロノ君、あなたはカエデちゃんに無理してご飯を減ら
さないようにって言ったわよね？」

「ええ、まあ」

「（それって『別に俺の前で猫かぶらなくても良いぞ』っていう
意味じゃないのかしら）………ねえクロノ君、改めて聞くけどあな
たは何でカエデちゃんが食事の量を減らしてると思ったの？」

「あれでしょ？ダイエツト」

「!!………そ、そうなんですよ！ちよつと最近食べすぎだったも
のですから、少し調節してただけなんです!!」

「だろおー？やっぱ正解だよな!!」

「え、ええ、恥ずかしながら」

はっはっは！俺にかかれれば他人の考えを読むことなど朝飯前だ！
もう夕飯の後だけだ。

「……ボソボソ（楓ちゃんはただ翔ちゃんの前でいっぱい食べる
のが恥ずかしかっただけなのね）」

「……ボソボソ（まあ確かにダイエツトも無くは無いらさうけ

ど)」

「ふふ、そうね（うんうん、やっぱり読み通りだったわ）」

「……ふう（翔さんの前ではあまり食べないようにしている、という事を知られてしまうよりもこちらの方がマシですね）」

「ま、なんでもいいわ。もうみんな食べ終わったみたいだしそろそろ寝る準備をしなさい。片付けはしておくわ。先に言っておくけどお手伝いは要らないからね」

ホント何から何までありがたい事だ。この先生の授業は他の科目よりも真剣に受けることを誓おう。

何に誓おうか。よし、じっちゃんの名に誓おう。じっちゃんの名前知らんけど。

「幸い歯ブラシは沢山あるからそれを使うと良いわ。今持ってくるから」

謎だ。そんなにいらないだろうに。

「あの…お聞きしたいんですけど」

「あら？何かしら」

「わたし達って何処で寝ればいいんですか？」

「この家で良いわよ。他に行くところ無いでしょ？」

「それは…そうなんですけど…」

そういつて俺をチラチラ見てくる日向。いや、三人。

まあ、だいたいあいづらが何を考えているか判るけどな。あれだろ、いくら友人とはいえ男と一緒にの空間で一夜を明かすのはちょっと…ってやつだろ。まあ俺も多少気恥ずかしいけど、問題は無いっしょ。

「大丈夫だよ。別に俺達だけってわけじゃないんだからな」

「私はこの後学校に戻るわよ」

ブフウウウー……

飲んでたお茶を盛大にコップの中に噴いてしまった。

「イヤイヤイヤ、それは不味いでしょう！いくらなんでも俺達だけにするのは！！」

「アラアラ？クロノ君はこの子達に何かするつもりなのかしら？」

「なんもやらねーよ！！そうじゃなくてほら、倫理的に不味いとかあるだろ！？」

「粗野な物言いねえ。別にクロノ君が何もしないのならなんの問題もないでしょう？」

クソッ！！明らかに俺らの反応を楽しんでやがる！！だってニヤニヤしてるもん！！

「あんたそれでも教師か！！教師ならこういう状況は止めるべきだろ！！」

「確かに私の職業はそうだけどね、あなた達はまだ私の生徒じゃないでしょ？だからあなた達が何をしようとも、私にはそれを止める義務も権利もやる気も無いわ。ここで寝るのが嫌なら野宿でもすることね」

グッ……！！なんてヤツだ。もうこの教師の授業なんて超適当に受けてやる！！魂に誓ってやる！！

「三人とも、それでいいかしら？」

「ボクは構いません」

「……はい」

「あう」

「決まりね。部屋割りは勝手に決めて。と言ってもここと向こうの二部屋しかないけど。布団は一応5〜6組くらいはあったと思うから適当に使ってくれて良いわ。じゃ、私は食器を片付けるから」

なんだなんだ、うろたえてくれてるのは日向だけなのか？

あ、でも兎とは中学の頃に修学旅行のときに一緒だったし、大丈夫か。まああの頃は女だってことを知らなかったわけだけど。今は

知ってるわけだけど。

それに秋月、そこまで沈痛な面持ちをしなくてもいいじゃないか。いくらなんでも悲しくなる。

……よし、気を取り直そう。

「……じゃあ部屋を決めるぞ。俺がこの部屋でお前等が向こうの部屋。それでいいな？」

てか、普通に考えてそれが一番まともな案。

「は、はい、それで良いです」

「あうあうあう」

「ボ、ボクもそれでいいよ」

日向はまだ戻ってこないのか。

「私はそろそろ行くわ。鍵は持つてるから戸締りはしっかりしてね。はい、歯ブラシ。家の中の物は自由に使って構わないから」

「はやっ！もう片付け終わったんですか？」

「食器を持って行って後は洗うように魔術で設定しただけだからよ」

お、おお、なんとも便利な……この世界なら手荒れとかを気にしなくてもいいのか。

「明日の朝起こしに来るから時間は気にせず寝ていいわ。それじゃあまた明日」

……あっけなく行ってしまわれた。

「……取り敢えず歯、磨こっか」

コクン、と頷く三人娘。

——はあ。まさかこんな展開になるとは。鬱だ。

いやね？可愛い女の子三人と同じ家で（一日だけだけ）過ごす

って言うこの王道漫画的小説的ゲーム的展開はさ、現実ではありえるはずが無いからいいなあとか羨ましいなあとか思ったりするわけじゃん。嬉し恥ずかしな体験とかを思い描いたりするわけじゃん。例えば間違って、あくまで間違って着替えを覗いちゃうとか、まあ色々。

でも実際にその状況になってみるとどうよ。ただただ緊張しかないわけよ。ぶっちゃけ全然嬉しくないわけよ。

……ゴメン嘘ついた。やっぱりちょっとは嬉しい。

それでもこの幸福感を軽く押し流すほどの不安感がある。俺の普段通りの行動があいつらにとっては不快なものだったりしたらどうしよう、とかさ。

なんにせよ、この状況を学校の男のやつらに知られたら今まで以上に俺への風当たりが強くなるだろうな。いや、風どころじゃなく毒かなんかに当たりそうだな。知られる事は絶対に無いわけだけど。

——あああ、色々考えてたら歯磨き終わっちゃったよ。あとは布団を敷くだけだよ。しかもなんかさっきから誰も喋らないし。そんなに俺は嫌がられてるのか。

……はあ、さっさと向こうの部屋から布団持ってこよ。

「……じゃあ俺の分の布団は持ってくるから。今日はもう寝よう」
三人とも、頷いてはくれたけど声は出してくれなかった。

……ん、押入れにびっちり布団が詰まってるけど、そういえばなんでこんなにあるんだ？

自分の分と、恋人がいるなら変な話もう一人分……はいらないか？
まああとは精々予備でもう一組くらいで十分なはずだろうに。

……気にしても仕方ないか。さっさと持っていこ。

「じゃ、俺はこれ持っていくから。おやすみ」

「お、おやすみ」

「……おやすみなさい」

「……おやすみ」

今度はちゃんと返事してくれたか。

ん、考えてみたら敷布団いらなないな。ベッド以上にフカフカなソファーあるし。でも俺には今更あの部屋に返しに行く事も出来ん。ヘヤノスミスに置いておこう。

———そーいやジーパンで寝るのは初めてだ。なんか外国人みたいだ。

……あ、今の俺はリアル外国人だった。

布団を頭まで被って目をつぶる。訪れる暗闇と、腕時計が時を刻む僅かな音。

……あの扉の向こうにはあいつらがいるんだよな。

ええいクソッ!! こんな状況下で眠れるわけないじゃないか!!
!!!!!!

「もう……ねちゃった？」

「…私は起きてます」

「…ボクも」

「なんだ、みんな起きてるんだね」

「…この状況で眠れるほど、私は精神的に強くないです」

「…そんなのボクもだよ」

「うう…眠いんだけど眠れないよう」

「うんうん、その気持ちよくわかるよ。僕は何度も経験してるからね」

「じゃあ少しお話でもしましょうか。そのうち眠れますよ、きっと」

「あ、なんか修学旅行の時みたいだね！」

「…そう言えばボク、こうやって女の子だけで寝たりするの生まれて初めてだよ」

「あれ？ 晃さんが女の子のふりをし始めたのって中学生の頃からでしたよね。じゃあ小学生の頃に体験してるはずじゃないんですか？」

「ううん、小学生の時は、運悪くこうゆう行事の時に全部病気で行けなかったの」

「じゃあ今まで男の子としか一緒に寝泊りしてなかったんだね」

「まあね」

「……不憫ですね」

「ま、ボクの話は置いてさ、こうゆう時は女の子って何するの？ やっぱり恋バナ？」

「うーん、そうだろうねえ」

「そうなんでしょうねえ」

「あれ？ なんでそんな感じなの？」

「わたしはいつもそういう話はしてなかったの。というか、さ

せてくれなかったの」

「どうゆうこと？」

「……………みんながお子様にはまだ早いつて……」

「…………。か、楓はなんで？」

「私の場合、友達が私はそう言ったモノには興味が無いだろうと
いつてしてくれなかったんですよ。実際にその時は興味がありません
でしたから別に気にしませんでしたけど」

「ふーん、二人とも大変だったんだね」

「……ううん、晃ちゃんが一番だと思うよ」

「……そうですね」

「アハハ、そうかもね」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………なんかさ、大変な事になっちゃったよね」

「………そうですね。まさか私達がこんなことになるなんて、想像
すらした事ありませんでした」

「………うん。まさか、女の子として翔とひとつ屋根の下で過ごす
事になるなんてね」

「……………」

「……………」

「じ、冗談だよ。こんなよくわかんない世界に来ちゃって大変だ
よね！」

「うん……でもさ、なんでかわからないけどわたし全然不安じゃ
ないんだよね。これからどうすれば良いんだろう、とかこの世界で
うまくやっていけるのになっていう心配はあるんだけど」

「それが『不安』ってやつでしょ」

「そ、それはそうなんだけどさ、なんというか：ほら、例えば迷子になっちゃった時に感じるような感覚ってあるでしょ？そういうのがないの」

「私は迷子になった事がありませんからあすかさんのお気持ちは推測しかねます」

「ボクもないからわかんないな」

「ええ！？ないの！？え、ええと……じ、じゃあ……」

「フフツ、嘘ですよ。私もあすかさんと同じ様な気持ちですから」「アハハ、うん、ボクもおんなじ」

「ぶうーひどいよ二人とも。わたしだけが迷子になった事あるみたいで恥ずかしかったよお」

「いや、迷子になった事無いのは本当の話だよ」

「私事です」

「………」

「でもさ、今のボク達っていきなり外国に連れて来られたようなものだよ。いくら言葉が通じるとはいってもこの世界についてはなんにも知らないのに、よくこんな楽観的に話なんかしてられるよね」

「やっぱり………翔さんのお陰、なんでしょうね。もしここに来たのが私達だけだったら今頃泣きながら野宿をしているか、デラクルールさんがいていた『魔物』とやらに殺されていたかもしれないから」

「フラァーさんに会えたのも翔がああ泥棒を捕まえたからだもんね。もしぶつかられたのがボクだったら追いかけるなんて思わないし」

「………そういえば翔ちゃんはもう寝たのかな」

「見に行ってみる？」

「でも眠っているのであれば邪魔になってしまいませんか？」

「大丈夫、一度寝たら翔が簡単に起きないのは二人とも知ってるでしょ？」

「あーそういうばそうだよ。いつだったかは朝学校に来てご飯の時まで寝てて、食べたらずぐに帰る、なんてこともしてたよ」

「修学旅行の時なんて早く起きた男子が枕投げしてても起きなかったし。それにさ、ボクの予想だと多分翔もボク達と同じで眠れてないと思うよ」

「どうしてですか？」

「だからボク達と同じだって。だってさ、ボク達って可愛いんだよ？」

「……自分で言うのはどうかと思いますよ」

「別に過大評価とかじゃなくて客観的に見た事実だよ。それくらいあすかも楓も自覚してるでしょ？ミスコンとかでも明らかになってる事だしさ」

「……まあ、そうですけど」

「それで、それになんの関係があるの？」

「つまりさ、翔にとって見れば扉一枚隔てて美少女が三人いるわけだよ。普通の男子なら緊張とかで眠れないはずだって」

「あ、なるほど！」

「でも翔さんってその『普通の男子』の範疇に含まれるんですか？それに翔さんは私達には慣れているでしょうし」

「……前半の事に関してはなんにも言えない。けどさ、後半の事はそれを言うならボク達だって翔にはある程度慣れているはずだよ。でもボク達は眠れない。ってことは翔も眠れてないはずだよ」

「じゃあ翔ちゃんが起きてるとしてさ、向こうに行って何するの？」

「お話だよオハナシ。話してればこの状況にも慣れるだろうし、そのうち眠くなると思うし」

「何のお話ですか？」

「そんなの決まってるじゃないよ。じゃ、取り敢えず行こ！」
「……はあ。迷惑にならなければ良いんですけど」

コソコソ——カチャツ——キィ————パタン

「寝ていらっしやいますね、あすかさん」

「うん。すぐく気持ちよさそうに寝てるね、楓ちゃん」

「……………」

「これぞ熟睡、という感じで寝ていらっしやいますね、あすかさ
ん」

「うん。今まさに夢の世界を漂っているだろうね、楓ちゃん」

「……わ、わかったよ認めるよ！ボクの予想は外れてたよ！」

「はあ……これはどうなんでしょう。私達のことを意識していな
いという事でしょうか」

「……なんか……ちよつとショックだね」

「こ、これはアレだよアレ、ほら、翔は今日三時間も体育やって
たから疲れてたんだってきつと！」

「クスッ、わかっていますよ。口には出しませんでしたけど最初
からそう思っていたんです」

「それにしても、寝てる時の翔ちゃんって起きてる時と全然ちが
うよねえ。なんかいつもより穏やかな感じがしない？」

「目が閉じてるから目つきの悪さがわかんないからでしょ？」

「あ—————そうかも」

「そういえば、修学旅行の時とかに寝言を言っている人とかいま

せんでした？」

「あ、いたいた！ボクは誰かが自分の彼女の名前を全力で叫んだのを聞いたことがあるよ」

「……イタイね、それは」

「……ええ、イタイですね」

「あの後起きてたボクと翔を含めた何人かの男子が笑いすぎて次の日おなかが筋肉痛になったよ」

「それは…色んな意味で大変でしたね。あすかさんは何かありますか？」

「……うーん、わたしはいつも早く寝ちゃうからなあ。聞いたことないや。楓ちゃんは？」

「えっと、中学生の頃に一度だけ。友達の女の子が『クリームシチューが……私のクリームシチューがあー…』と、言っていました」

「……どんな夢だろう、それ」

「……ん？二人ともっ！！翔も何か言ってる！！」

「えっ！ホント！？」

「あすかさん、静かにっ！！」

「……クスクスクス」

「……(?)」

「……ボソボソ（う、笑っていますね）」

「……ボソボソ（なんか…ちよつと不気味）」

「…フフ…ウフフ…やだなあ刑事さん…俺にはアリバイが

…ムニャムニャ…」

「……」

「……」

「……」

「……そろそろねよっか。明日も早いし」

「……………うん、そうしよう。早く戻ろう。早く」

「……………これ以上ココにいて翔さんを起こしてしまっでは申し訳ないですね」

「……………アレ？ねえ、また翔ちゃんが何か言ってるけど」

「ダメ！これ以上不気味な事を聞きたくない！」

「あ、でも今度は真剣な表情ですよ」

「え？そ、そう？じゃあ……………聞いてみよっか」

「……………そっか」

「…………ボソボソ（何が『そっか』なんでしょう？）」

「…………ボソボソ（そんなのボクにもわからないよ）」

「…………ボソボソ（まだ何か言ってる）」

「……………まだ……………少年Aで……………済むんだよな……………16

歳だし……………」

「……………」

「……………」

「……………」

コソコソ——カチャツ——キィ————パタン

「……………えっと…じゃあ、おやすみ」

「……………うん、おやすみ。お互い、絶対にいい夢見ようね」

「……………ええ、おやすみなさい」

「……………」

「.....」
「.....」

「.....眠れないっっっ!!」
「.....」
「.....」

学校へ行こう！

「……………ん、朝か」

窓から差し込む柔らかな太陽の光で目がさめた。

いつもならもっと寝覚めが悪いはずなのだが、今日はスムーズに意識が覚醒していく……………ような気がする。

やっぱりあれだな、『ねむれないよ!!』とか思っても流石に疲れすぎて眠っちゃったみたいだな。すぐに寝れたからすぐに起きられたってことか。俺の睡眠時間を容赦なく削り行く娯楽もないわけだし。フアアアーっとあくびを一つ。

「……………よし、顔を洗って歯を磨くか」

因みに俺は朝食前と後の二回とも歯を磨く。

ん？　そういう家の中がやけに静かだな…ってことあいつらはまだ起きてないのか。

普通こういった状況下では女の子が早く起きて俺を起こしてくれるもんじゃないのか？　いや、普通の基準が判らんけど。でもそれが“男の浪漫”ってヤツだろ。

……でもまあ早く起きたお陰で寝起きの間抜けな顔を見せる必要もなくなったし、コレはコレでラッキーだな。

パシャパシャと顔を洗い、歯磨きに移る。一瞬歯磨き粉と洗顔料を間違えそうになりつつも、真の男たる俺はそんなことには動じずに、さらに思考を張り巡らせる。

———どうなんだろう、あいつらを起こしたほうがいいのか。でも時間もわかんないしまだ起こすには早い時間だったらどうしよう。それに女三人が寝ている部屋に男が侵入するのはいいかなもの

か。いや、考えるまでもなく不味いってば。

となるとこのまま起こさずにおくのが賢明か。でもあの先生が来た時にまだ寝ていたりしたら異世界人として恥だろう。あ、違った、記憶喪失人だった。

なにより俺が起きてるのにあいっただけ寝ているなんてズルすぎる。俺と同じ時間寝ているわけだから起こしても問題ないはずだ。うん、そうに違いない。

口をゆすぎ、再び歯磨き粉と洗顔料を間違えて手に取りながらも身だしなみを整える。要するに顔を洗うって事だ。

さて、どうやって起こそうか。

ドアを叩く？——やだ、なんかつまんない。

大声で叫ぶ？——やだ、なんかつまんない。

フライパンとお玉でカンカン？——よし、コレで行こう。

俺は妹キャラでもなんでもないけど、前から一度やってみたかったんだ。

——洗顔終了、軽く髪の毛も整えて洗面所を出る。

キッチンでフライパンを……なかったからゴツイ中華鍋みたいな物を左手に、お玉を……なかったから菜っ葉包丁みたいな物を右手に、現在あいっつらと俺を隔てる扉の前。

フウ……よし!!

俺は気合を入れて中華鍋の裏側を菜っ葉包丁の刃じゃないほうで叩く。なんだっけ、みね？

「おっきろおおお——朝だぞおおお——」

ギヤインギヤインギヤイン!!!!!!

あーうるせつっ！！これなら誰でも起きるだろうな。気持ち良
くかどうかはともかく。

「ひなた ああー あきづき いいー あきら ああー」

ギヤインギヤインギヤイン!!!

てか音がおかしいだろ。普通は『カンカンカン』じゃね？ま、楽しいからいいか。

「はやくおきろ おお おおー」

ギヤインギヤインギヤイン……！！！！！！！！

部屋の中でドタドタと騒ぐ音を耳にして手を下ろした。いくら力が強くなつてると入つても、どうやら俺にとって中華鍋は重すぎる代物らしく、少々腕が疲れてしまいました。

数秒後、扉が開いた。

目の前には目をしょぼつかせ髪がボサっとしており今にも倒れそうなんだけど、それでも美少女には変わりない三人の女の子。なかなかレアな光景だ。一番ちっこいヤツは枕を片手に抱いている。ここにかメラがあつたら一枚パシヤリときたいほどだ。……しまった、携帯カバンに入ればなしだった。まあいい。

「よっおはよ」

右手を上げながら挨拶する。

「 「 「 …… ㄱ 「 「 「

✱?

「キヤアアアアアアアアアア」

「ブフツツ!!!」

枕を顔面に食らった。

若干いい匂いがしたのは俺だけの秘密だ。

「ったくよお、折角起こしに来てやったのに何で枕を投げつけられなきゃいけないんだっつーの」

目の前にはすっかり身だしなみを整えた日向、秋月、晃。三人とも見慣れたうちの学校の制服に着替えている。俺はめんどいからそのままパジャマ兼私服のままだ。

「た、確かに悪かったけどさあ、翔ちゃんが物騒な格好をしてたからいけないんだよ」

「………むう」

確かにあの時の俺は今思い出してみれば不審者感丸出しだったかもしれない。右手に菜っ葉包丁、左手に中華鍋という最初の町を出た勇者みたいな装備は、現実にはいちゃいけない存在だろうな。

あの時は ねんがんの お玉で フライパン カンカン が できるぞ とか思ってたから全く気付かなかった。

「まったく……中華鍋はまだいいとしてもなんで包丁だったのさ」

「お玉が見つからなかったの！」

そうだ、悪いのは俺に見つからなかったお玉だ。だから俺は悪くない。

「私達を口封じしにきたのかと思っちゃいましたよ……」

「あーわたしも思った」

「ボクも」

む……口封じ？ どういうことだ？

俺が三人にそのことを尋ねようとすると、その前に玄関から扉が叩かれ、開く音がした。

「……あら？ もうみんな起きてたの？ 早いわね」

「あ、どーも」

俺はなんかもうこの人に対して丁寧な話を話す気力を無くしていた。いや、感謝の念はがつりあるけれども。

他三人はどうやら俺の心境とは正反対のようで、俺に向けていたジト目を即座に切り替えて対大人用の挨拶を繰り返して出し、大人も『はい、おはようございます』といういかにも学校の先生っぽい挨拶を俺達に返す。

「さて、来た早々で悪いけどもうしっかり目覚めてるみたいだから学校に行くわよ。すこし早いけど早めに出れば余裕をもって行けるし。はい、これ制服だから。さっさと着替えてきて。大きさはあってると思うから」

そう言っただけで俺達一人一人になんか良くわからん服を渡していく。別に反抗する気もないし、取り敢えずさっさと着替えようと思う。

「なんでもう服を脱ぎ始めてるのさ!」

「お前は俺の上裸なんて見慣れてんだろ?別にいいじゃんか」

「あすかと楓もいるの!」

ああ……忘れてた。視界に入ってるのが晁と先生だけだったから。因みに先生は動じてない。

「ほら、行くよ!二人ともボーっと翔のほうを見てるんじゃない!」

「も、もうちょっとだけ…」

「あうう」

なにやってんだあいつら。ナチュラルに寝ボケるなんて凄い技術だ。……まあいい、服を着よう。

―――?

なんだこれ。どうやって着るんだ？

下半身はオツケー。何処となくリクルートスーツっぽい感じの生地、俺が知ってるのとあんまり変わらないズボンと、ちょっと高級感漂うベルトを装着し終えた。バックルに良くわからないエンブレムが彫ってある。

そして上半身。取り敢えずYシャツっぽいのは余裕で着れた。ボタンだったし。そしてその上に羽織るちよっとヒラヒラしている良くわからん黒いの服。これもまあ何とかなった。

問題はこのマント。こんなもん着たことないからどうすりゃいいのかわからん。

「コレの着方が判らんのだけでも」

「ん？ああ、両肩に留め具があるでしょ？……そう、それ。そこにマントのこの部分を引っ掛けるのよ」

ん？……おお、こうか。よし、出来た。完成。

「あら。結構似合ってるじゃない」

「そりゃどーも。ところでこのマントは何の必要性があんの？」

「色々よ」

なんか昨日といい今日といい俺に対してだけ適当じゃない？

「着替え終わりましたあゝ」

扉が開く音がする。振り返るとそこには当然、新しい制服を着た日向、秋月、晃がいた。

おおお………超絶似合っている。

どうやらこの世界でも女子の制服はスカートらしい。まことにありがたい事だ。

ただおしむらくは前の制服よりスカートの丈が長い事か。昨日のように、魔術によって簡単にはスカートが捲れない様にするための配慮なのかチクショウコノヤロウ。

「どう？翔ちゃん、似合ってる？」

日向がどこぞの漫画のようにクルッと一回転する。言っておくけど前方でも後方でもない、横にだ。

秋月が少しはにかんだ笑顔で俺に笑いかける。

晃が三人の中で一番恥ずかしそうにしており、軽く俯いている。いくら昨日すこし女子用の制服を着たからと言っても、やはり今までずっと男物だったんだから恥ずかしいのも無理ないだろう。

——さて、どう返答したものか。

当然、やつらの姿は素敵過ぎる。超似合う。超可愛い。

でもここで俺が『似合ってるぜ……』って言うのもなんとなく負けた気がして嫌だ。そして普通の言葉過ぎて嫌だ。だからココはあえて誉めん!! たまには貶^{おとし}してやる!!

「なんか、その…アレだな日向。妹が無理して姉の制服を着てみたって感じだな。秋月は…えっとあのー、そう、なんか上級生に向かって『お姉さまって…お呼びしてもいいですか』って言ってそうだな。晃は…アレだよアレ、あのーバレンタインダーにチョコを貰いすぎてホワイトデーに苦労しそうだな」

チクショウ!! 悪口なんて思いつかないよ!! なんだこいつら、完璧すぎだ!!

「……なに笑ってんだよ」

みると三人とも俺のほうを見てクスクス笑っていた。

「だってわたし達の悪口をいうのにすぐ言葉がつまってるんだもん」

「それに新しい制服の事に全然触れていませんし」

「翔の事だからどうせ素直にボク達を誉めるのが嫌だったんでし

よ」

ぐつつ！！こいつら、痛いところを……。

「ええい、うるさいうるさい！！似合っていないったら似合っていないだよ！！」

「……だからその笑いながら『はいはい、わかりましたよ』ってのはヤメロ！！」

「でも私は翔さんの今の姿は素敵だと思いますよ」

「うん！すごくカッコイイよ！」

「コレは惚れちゃうねー」

「……え？何？なんなのこの新手の羞恥プレイ。どういうつもりなの？俺をどうしたいのこの子達は。」

「べ、別にそんなこと言われたって全然嬉しくなんてないんだからな！！勘違いすんなよっ！！」

あ、くそっ！思わず『絶対に言葉どおりには伝わらない魔法の呪文』を言ってしまった！！……だからそのニヤニヤした顔を止めてお願い！！

「楽しんでるところ悪いけど早く行く準備をしてくれないかしら」

おおっ！神の声だ！

三人もデラクール女史の言葉で俺を茶化すのを止めてくれた…かに思えたが、まだクスクスと笑い合っている。

「ほら、時間がないんだからさっさと行くわよ」

「あの、朝ご飯とかは？」

別に朝飯なんてなくても生きていけるだろうに……いや、日向には無理か。日向化け物説はかなり有力だ。

「ああ、お弁当があるから馬車の中で食べるわよ。遅いか早いかは別にして、もともとその予定だったから」

「はい、判りました！」

となると、朝食の後に歯を磨くのは諦めたほうがいいかなあ。

まあ、そんなこんなで草原への入り口だ。つまりこの町の出口さ。あの教師の家を出て、昨日俺達が入ってきたところとは別の門まで歩くと馬車が一台留まっていた。デラクール女史は既に御者と話をしてお金らしきものを支払っているみたいだ。俺達はその後ろで田舎者感丸出しで馬車を見物している。

俺達の目の前に居る生命体は見た目だけなら普通の（つつても異常に大きいけど）馬とあんまり変わらない。でも何故かココにいる二頭の馬は鮮やかなショッキングピンクとエメラルドグリーンで、時々剥き出しになる歯が異常に鋭く、結果的にとても怖く怖い。あと良く見たら爪も鋭いし目つきもどこか親近感が湧く。

デラクール女史曰く、この奇妙な生物は肉食ではあるが温厚で、人間のような大きなものは食べないらしい。何故なら口が小さいから。『この子達が食べるのはもっぱら小動物よ』という言葉聞いて日向の身を結構真剣に案じてしまったのが本人にバレてしまい、蹴られた脛がズキズキと痛む。

名称はそのまま馬。でもいくら慣れ親しんだ名称だからといってこの不安感は拭い去れるものじゃない。どうやら三人も同じ感想のようだ。

「さあ乗って。あんまり高級な馬車じゃないから乗り心地はあんまりよくないかもしれないけどね」

そんなこと言われても今まで馬車に乗った経験なんて一度も無いし、俺の中の馬車の乗り心地のよさの基準がこれで決まる事になった。

「はい、お弁当。これもあんまりおいしくないけどね」

「お、昨日と違ってまともだ」

「……何か言った？」

「あ、いや、なんでも」

この弁当は俺達が知ってるのと同じ感じのアレだ。食材はよくわかんないけど。

つまり昨日の晩飯とあの泥水の見た目はこの教師のダメスキルってわけか。

――――ふむ、確かにあまりうまく無い。味は昨日のほうがよかったな。

「うう、フラーさんの料理のほうがいいかったです」

「あらやっぱり？ ありがとうアスカちゃん。お礼に私のお弁当のおかずあげるわ」

「いいんですか！？ ありがとうございます！ じゃあコレとコレとコレと……」

「ち、ちよっとちよっと！」

あああ、日向に飯をあげる時はちゃんと個数を言わないと沢山持つていかれるってことを言い忘れてた。ま、いいか。俺の飯じゃないし。

「あ、あすかさん、私のもあげますから落ち着いてください。はいコレ」

「楓ちゃんも！？ ありがとう！」

「じゃあボクも」

「おい晃、お前あんまり好きじゃなかった物の残りを押し付けてるだけだろ」

「う、や、やだなあ。そんなわけ無いじゃん」

「日向、晃の弁当から好きなものを持って言って良いぞ」

「わーい！！！」

「あ、コラ！！」

よし、この間に俺は弁当を食ってしまおう。獲られたくないし。

「ねえクロノ君、ちょっと聞いてもいいかしら」

弁当のおかずを根こそぎ日向に獲られたデラクール女史が話し掛けてきた。どうやらこれ以上弁当を食べるのは諦めたようだ。彼女の安っぽい弁当箱に残っているのはこのタイ米っぽい長めの米だけだし。

「どうしてアキラちゃんは名前で呼んでるのにアスカちゃんとカエデちゃんは家名で呼んでいるの？」

「……うーん、どう説明したものか」

確かに前に日向と秋月にも名前で呼んでくれてって言われた事はあるんだけど、俺はそれを断ったんだよね。だって彼女でも幼馴染でも兄妹でもないのに女の子の事を名前で呼ぶのは俺にとって恥ずかしかったし。

でも俺が晃の事を名前で呼んでいるのは晃のことを男だと思ってたからだからだし、ぶっちゃけあいつが女だって言われても今更呼び方を変えようとも思わない。なんとなく違和感がある。

でもでもあいつは女なわけだし、冷静に考えてみれば俺は女を名前で呼んでるわけだし、改めて考えてみたらなんかちょっと恥ずかしくなってきた。

……仕方ない。

「なにか大層な理由でもあるの？」

「いや、そう言うわけじゃないです。そうですね、今日からあいつの事を【晃】じゃなくて【北条】って呼び：「ダメッッッ！！！」うおっっ！！」

日向とゴチャゴチャやってた晃がいきなり叫んだ。その隙に日向はバイキング宜しく晃の弁当から搾取し続けている。

「ボクのこととは今のまま【晃】って呼んで！！！」
え？急になんだ？

「いい！？」

「あ、は、はい」

思わず頷いてしまった。

「「ちょっと待って（下さい）！！」」

「うおっ！！」

——またビビった。

何時の間にか晃と秋月と教師のを含む二人分以上の弁当を食い終わっていた日向と、こっちを眉をしかめて見ていた秋月がいきなり叫んだ。

「晃ちゃんだけ名前で呼ぶなんてずるいよ！！」
ずるいの？ なんで？

「そうです！！だったら私の：じゃなかった、私達の事も名前で呼んでくれたっていいじゃないですか！！不公平です！！」

「いや、だから俺は晃のことも北条って呼ぼうと：」

「「ダメ（です）っっ！！」」

「何でだよ！それに日向、お前は苗字も名前っぽいじゃないか！だからいいだろ別に！」

「理由になってないし！？」

あーもーなんなんだこいつらは！てかなんで日向と秋月も晃と一緒にになって叫んだんだよ！！不公平だって言うから直そうと思ったのに！

「あのさー、つまりクロノ君がみんなを名前で呼べばいいんじゃない？ なんでそんなに嫌がってるの？」

「……別に嫌ってわけじゃないんですよ」

そう、ただ恥ずかしいだけなんだ。後は人前（特に学校の男子の前）で日向と秋月の事を名前で呼ぶと俺への敵意が倍增するだろうことが簡単に予想がついたからだ。

「じゃあ呼べばいいじゃない。それに世の中家名で呼ばれるのが嫌な人なんていっぱいいるんだから」

「う……」

そう言われると困るな……。

「そうそう、フラァさんの言う通りだね」

「私達で慣れておいた方が良いでしょう」

「……はあ、しょうがない、か。」

「じゃあ……あすか、楓」

ぐうつつ………なんか超恥ずかしい！！相手を女だと意識して名前で呼ぶのは生まれて初めてだ。

「…………えへへ」

「…………ウフフ」

なんか目の前の二人も気味の悪い笑顔だ。

「あらあら、青春ねえ」

「フンッ！」

晃がなんかちょっと不機嫌になった。もう俺にはさっぱりだ。

学校に行く前だったのになんかもう疲れたよパトラッシュ…………。

「さあついたわ。降りて降りて」

「あ、はい。ほら、日な…あすかと晃と秋づ…楓も降りるぞ」

あの後練習と称して何度も何度もあすかと楓の名前を呼ばされたおかげで、脳内ではサラッと言える様にはなったけど、現実世界ではそうはいかない。超どもる。

でもあいつらはご機嫌だ。そんなに名前で呼んで欲しかったのか？わからん。所詮名前なんてモノを呼ぶときに必要だからつけられたものじゃないか。

馬車から降りた俺達を出迎えたのは。つい昨日通う事が決定した学

校だ。『この世界』に來た時に遠くから見たときよりもさらに大きく見える。

敷地の総面積はよく分らないが、とりあえず高さだけで行っても相当なものだ。恐らく『俺達の世界』の首都にあった某赤い搭よりも高く、それでいてピラミッドのような形をしてるもんだから、収容可能人数は数倍じゃきかないだろうな。

「ふおおお……。改めて見るとすごく大きい建物だねえ」

身長の低いあすかからすれば驚きも一入ひっしおだろう。小学生の頃、高校生がやたら大人に見えたのと同じ理屈だろう。

「それはそうよ。小さかったら魔術の練習なんて出来ないでしょ」
そりゃそうだ。

「ほら、あなた達は早速行かなきゃいけないところがあるんだから、急いで急いで」

「余裕を持って家を出たんじゃないんですか？」

「あなた達のやり取りを見ていたら途中で速度を上げるのを忘れちゃったのよ」

なんじゃい、わしらの責任にするんかい。勝手にニヤニヤ俺らを見てたくせに。

「フラーさんフラーさん、何処にいくんですか？職員室？」

「惜しいけど違うわ。今からいくのは『機関長室』よ」

まあ、校長室みたいなモンだろう。俺らは一応転校生だし。ああいや、転入生か。

それにしても機関長っていうとやたらカッコイイ響きがする。あれか、立ちシヨンの事を『大地に放尿』っていうとカッコよくなるのと同じか。

「ほら、早くしなさい。あなた達はやらなきゃいけないことと、受けなきゃいけない説明があるんだから」

げえやだなあめんどくさいなあでもまあ仕方ない大人しく従おうだってしょうがないし俺は諦めが早い人間だ。

こんな感じで俺は（脳内で）ぶつぶつ言いながら、前を歩く4人の後姿を眺めながら大人しくついて行く。

俺達が今通っている門は、大きさだけで言うと国会議事堂くらいの大きさはあるにも関わらず、デラクール女史曰くここは裏門らしい。しかも3つめの。思うに全然裏になっていない。裏門ってのはもつとよばいからこそ『裏』門じゃないのか。てかなんで裏門が3つもあるんだ。てかなんで裏門の癖にこんなに装飾が華美なんだ。

門を通り過ぎると俺の背丈の3倍ほどのこれまたでかい扉があり、コレを開くには何人くらいの力が必要なんだろうと思っている俺を傍らに、横にある普通の大きさの扉を開けて俺達は校内へと進入した。なんかさつきから『3』って数字を多用している気がする。

3人は（あ、まただ）周囲をキョロキョロと見回しながら歩いているのでやっぱり田舎者丸出だったのが、まだ授業が始まるには早い時間らしく辺りに人がいないことが救いだ。俺は体面を気にしてまっすぐ前を見つっしかりと歩いて行く。よって情景描写は出来なため各自で想像して欲しい。イメージとしては某魔術学校の内外装＋寂れた博物館の雰囲気。まあ後者は人が殆どいないからだろうけど。コツコツと俺達5人の足音が響いている。

「はい、ココに立って。『風』の魔術で一気に上がるから驚かないでね」

そう言うデラクール女史が立っているのは、なにやら良くわからないう小部屋の中にあっただかいマンホールみたいな石の板の上だ。少し窮屈そうだけど俺達5人が乗ることの出来る大きさではある。

ですが先生、その顔はどう見ても『フハハハ驚け!!』って言う顔ですね。よし、意地でも驚かない。

「じゃあ行くわよ」

デラクール女史が指を鳴らすと俺達に軽くGがかかった。エレベーターの時と同じだ。違う点はこちらはただ石の上に乗っているだけなのでうかつに動くと落ちるという事だ。正直怖い。その証拠に三人の女の子は恐怖で感嘆の声をあげることが出来ずにいるようだ。それをあの教師は悦に浸った様子で眺めている。

「はい到着。広く空いているところがあるから足元に注意してね」
む、その言い方はどこかで聞いたことあるような。

「うう…怖かったよう」

「あ…なんかボクすこし酔ったかも」

「フフ…ちよつと気持ちよかった♪」

あ、そういう楓は俺と同じでジェットコースターとかすごい好きだったからな。

「ほら、何してるの。ココよココよ」

何事も無かったかのようにあの女教師は金のかかっているような扉の前で手招きをしている。

実際、何回も乗っているんだろうし慣れているんだろう。

「ここが機関長室ね。じゃあ入るわよ」

その言葉で俺もあいつらも気を引き締める。この学校で一番偉い人に会うんだから、一応緊張しておかないとな。

—————コンコン

「失礼します。転入生4名をつれてきました」

デラクール女史は中から返事が聞こえてくる前に扉を開けた。多分昨日のうちに連絡が行ってたんだろう。

三人はデラクール女史の後に続けて『失礼します』と言って部屋に入っていくが、俺は失礼な事をするつもりなんて全く無いので無言で入り、そのまま扉を閉めた。その行為自体が失礼に当たるのかもしれないけど、気にしない。

部屋の中にはなにやら良くわからん爺さんが中々高級そうな椅子に鎮座しており、その風貌はいかにも偉そうなジジイであった。あの長くて白い髭もそれに拍車をかけている。

「ふむ、その4人がデラクール先生の言っていた『記憶喪失』の子供達かね？」

なんだ、話し方までいかにも偉そうだ。でも無理してこの声色を出しているようには見えないのでこれが素なんだろう。

デラクール女史の『はい』という言葉を聞いて、偉そうなジジイは再び口を開いた。

「ワシがこの【アレクサンドリア立教育機関】の機関長、【ルーファス・スクリムジョール】じゃ。まあワシの名前なんぞどうでもいいことじゃから、早速今この時必要な事をしましょう。主らの名前も報告されているのでな、自己紹介は不要じゃ」

なんとというアバウトさだ。このご老人は俺らのとこの校長とは違って話がわかるね。ジジイとか言ってごめんなさい。

とてつもなく軽い挨拶を済ますとジジ：機関長は手で何らかの合図をした。

するとデラクール女史が、持っていた自身のカバンから用途が窺い知れない色とりどりの鳥の羽のようなものを取り出し、機関長の机に並べ始めた。しかも沢山。

「コレはある特殊な魔物の羽で、この羽を使って自分の魔術の属性を調べるのよ。あなた達がこの学校で魔術を習おうとする以上自分の属性は絶対に知っていなければいけないものよ。他のみんなは既に終わらせてあるからあなた達はココでやるの」

『他のみんな』ってのは同級生になるやつらのこと？

デラクール女史が羽を並べ終えた。数えてみると、どうやら一人につき羽は12枚必要らしい。計48枚だ。

「さてと、それじゃあ各自羽を全部持って。持ち方はどうでもい

いから」

ふうん……どうでもいいのか。

一番左にいるあすかはパツと羽を右手と左手に半分ずつ持った。左から二番目にいる晃はスツと羽を一束にまとめて片手に持った。左から三番目にいる楓はフツと羽を扇子のように両手で広げて持った。

一番右にいる俺はガツと羽を右手で適当に掴み取った。

「確かにどうでも良いとは言ったけど……」

「え？これじゃあダメなんですか？」

「ダメではないけれど、そんな乱雑な持ち方をした生徒はあなたが初めてよ……」

ってことはこの世界の人間はみんな真面目って事なのかなあ。超イヤだ。

「他の子達はずっと緊張しているものの！これで自分の人生が決まるようなものなんだから！」

「え、そうなんですか……？」

「え？あ、いや、一概にそう決まってるわけじゃないんだけど……」

「デラクール先生、そろそろ始めてもらっても構いませんか？」

「あ、はい」

あすかに答えようとしてデラクール女史は機関長に話しをさえぎられた。ってかもう機関長の名前を忘れちゃったよ。なんだっけ……ジ……ジジイ……ああもうダメだわからん。人の名前って覚えようとしないとすぐに忘れちゃうな……。

こっそりと三人の様子を伺うと、人生が決まると言われて更に緊張し始めたようだ。俺は別にしてないけど。

……ほ、本当だからなっ！

「じゃあ説明するから良く聴いてね」

む、集中集中。

「とはいっても難しい事ではないわ。今あなた達が持っているその羽に魔力を通すだけだから」

「先生、ボク達は魔力を通せと言われてもやり方を知らないんですけど」

うんうん、その通り。

「あら？そう言えばまだ教えてなかったわね、ごめんなさい」

デラクル女史はそういつてウインクしながら片手を挙げた。まあ結構美人だから似合っていない事も無いんだけど、いかんせん歳が：「クロノ君、なにか？」いやなんでもないですすいませんごめんなさい。

「自分の中にある魔力が羽に流れ込んでいる状態を想像すればいいのよ。簡単でしょ？」

「えっと、本当にそれだけなんですか？」

楓の疑問も当然のものだろうな。なんとなく簡単すぎる気がするし。普通はもっと難しいものなんじゃないのかねえ。

「そうよ。魔力保有者はそれだけで魔力を物や肉体に通す事が出来る。そしてあなた達は魔力保有者。つまりあなた達はその方法で羽に魔力を通す事が出来るわ」

実に単純な三段論法だった。

「それじゃあ初めて頂戴。……そうね、どうせなら一人ずつ順番にやりましょうか。じゃあまずはアスカちゃんね」

「ふえ！？わ、わたし！？」

「ええ。だってあなたは昨日『風』を起こしたんでしょう？だったら確実じゃない」

「うう：翔ちゃんだってやったのにいゝ」

「ほらあすか、がんばってね」

「がんばってください、あすかさん」

「……わかったよう」

そういつてあすかは羽を持ったままの両手の力を抜き、ブランと下に延ばして目をつぶる。

そして、―――――集中

数秒後、あすかが持っている羽の半分位がまるで溶けたかのように消えた。

「……あ、あれ？なくなっちゃったよ？」

……え？なに？どうゆうこと？

前を見ると機関長もデラクール女史もポカンとした表情でこっちを見ていた。

「あ、あの、フラァーさん……羽がなくなっちゃいました……」

いかにも申し訳なさそうに話すあすかに、デラクール女史は慌てて言葉を返した。

「い、いいのいいの、なんの問題も無く成功だから。ちょっと驚いちゃってただけよ。じゃあ次にアキラちゃん、お願い」

……なるほど、羽が消えることは折込済みである、と。つまり羽が消えてしまっても問題はない……羽が残っていれば成功なのか。

「は、はい」

晃も少々緊張した面持ちで羽を持った右手を左手で包み込み、そのまま額の前に持っていて目をつぶる。

そして、―――――集中

数秒後、晃が持っている羽の半分位がまるで溶けたかのように消えた。

「……ふう、よかったあ。ボクのもちゃんと残ってくれたよ」

「よかったね！晃ちゃん……！」

「うん。あー緊張したあ」

二人ははしゃいでいるようだけど残っている俺達の気持ちを考えて

欲しい。楓は緊張を和らげるために深呼吸しているようだ。

前を見るとやはり二人ともポカンとしている。なんなんだあの顔は！なんか腹立つ。

「――じゃあ私もやりますね」

声がかからないため、楓は勝手に始めるようだ。

楓は両手に広げた羽を持ったままその手を胸の前に持っていき、目をつぶる。

そして、―――――集中

数秒後、楓の持っている羽の半分くらいがまるで溶けたかのように消えた。

「……成功したようです」

「やったね楓！」

「ねねね、楓ちゃんは何枚残ってる？わたし7枚？」

「えっと…私も7枚ですね」

「あ、ボクも7枚残ってるよ」

『奇遇だねー』なんて言いながら笑い合う憎いあんちきしょう達。くそ、まだ俺が残ってるんだぞ。盛り上がるならもうちょっと静かに盛り上がってくれよ！こっちはまだなんだからさ！……ああもう、心臓の音がでかいウザい！

「ち、ちよつとちよつと！！」

む、なんかデラクール女史が慌てた様子ですな。

「あなた達、本当にただの子供！？」

さあね。

楓がデラクール女史にどういう意味かを尋ねようとすると、興奮し

ているデラクール女史を嗜めた機関長が『話は後でするから先に終わらせてくれ』みたいな事を言ってきた。つってもどうやら機関長も動揺しているらしく、細かいところは聞き取れなかったけどさ。

——よし、じゃあ俺もやるか。

………なんかみんなの期待の目が怖い。機関長とデラクール女史はいわずもがな、三人の美少女もこちらにキラキラした目を向けている。

期待されるのは嬉しくなくは無いけど………期待にこたえられなかったらどうしよう。

ふう、と一回溜息をついて覚悟を決める。

無造作に羽を掴んでいた右手を前に突き出し、目をつぶる。

イメージするのは、小学校だったか中学校だったかで習った電気回路が体中を駆け巡っている光景。そしてその回路には魔力が流れている。さながらそれはまるで電気のように、血のように。

その魔力が俺の右手を介して羽に伝わっていくところを想像する。

———ま、こんなもんでいいかな？

ゆっくりと目を開ける。

突き出した俺の右手の中には、一枚も羽がなかった。

せつめくかい

「……………はあ」

自然と、溜息が、出た。

見ると、三人がなんとも微妙な表情で俺の様子をコソコソと窺っている。

ああそうだ、この顔には見覚えがある。こいつらの前でやった渾身のギャグが滑った時もこんなだったな。

もっともその時と今じゃ、全然重みが違うわけだけど。

「……………はは。わり、三人とも」

どうやら、俺には才能が無かったらしい。

自嘲を込めてそう続けようとしたところで、すっかり意識の外にあった女性の呟くような声が聞こえた。

『……………嘘よ』と。

「……………どうしたんですか先生うおわっ!!?」

なんか急にカバン片手に走り寄ってきたけど!!!

「もう一度!! もう一度この羽に魔力を通してみて!!!」

んあ?なんだこの剣幕。まさか、才能がなさ過ぎで逆に珍しいとか?……………ヘコむ。

もしかや昨日『風』が使えたのは何かの間違いだったのかではあるまいか…。

そんなこんなで俺は再び羽を握る事になったわけなのだが、さっき

と違うのは渡された羽の枚数が四枚だということだ。

俺は俺で何が何だかいまいち現状を把握できておらず、三人娘はきょんととしてるし、機関長は目を見開いて今にも脳卒中で倒れそうな様子だ。

「早くっっ!!」

わかったやもう、やればいいんだろやれば!! わかったからいい歳こいて大声を出すんじゃないや!!

今度は目をつぶらずに適当にやる。さっきみたいにわざわざ『血のように』だのなんだの考えるまでもないわ。

——ほら成功……いや、失敗か? 取り敢えず羽はシュワツと全部無くなった。

「これでいいですか」

俺が冷めた声色で言ってもデラクール女史は『ありえないわ』とか『嘘よ』とか小声で言いまくっている。

しかし、『もしかしてこのまま放置されんのか?』という俺の心配とは裏腹に、

「——どうやらデラクール先生は取り乱しておるようなんadena、ワシが替わりに主らに説明する事にしよう。少し長くなるが聴きなさい」

機関長の方は復帰したらしく、その長く白い髭をワサワサしながら、俺たちに向かって口を開いた。

「よいか、魔力保有者にはそれぞれ自分が使える魔術の『属性』と言う物がある。当然自分の属性ではない魔術は使えん。だからこそ自分の属性は必ず知っておかなければいけないもの。だからこそこの羽を使って検査したのじゃよ」

うん、そこまでは聞いたから判ってるぞ。知りたいのはそんなことじゃない。次。

「いま主らが流した魔力には主ら個人個人の属性が含まれておる。そしてこの検査は魔力をこの12枚の羽に通す事で12ある属性のうち、自分が一体なんの属性が使えるのかがわかる、と言う仕組みじゃ」

ふうん。なんかもっとハイテクな装置かなんかで一発で判るようになればいいのに。

「そしてこの羽は、その色に対応する魔力が流れ込んだ時、『消える』のじゃ」

へえ………え？ってことはつまり……？

どこかいたずらっ子の様な面持ちだった機関長の言葉を理解した俺達を見、彼は笑いながら言った。

「どうやら主らは誤解しておったようじゃな。羽は沢山残ったほうが良いのではなく『魔力を流した時どれだけの羽が消えるか』と言う事が重要なのじゃ」

そ、そうだったのかああー！！

「じゃあ全部消しちゃった俺って結構すごいんじゃない？」

「ぶうーじゃあたった5枚しか消えなかったわたし達はある才能が無いってことお？」

「なくんだ、悔しいなあ」

「残念ですねー」

「ふうん、所詮君達では俺に勝つことは無理だったらしいね。その程度がお似合いさ！」

「なんだとおー！」

「……………何を言っているのあんた達」

……え？

「あんた達は世の中を舐めてるの！？何が『あんまり才能が無い』よー！！」

な、なんだあー！？え、ちょ、ええ！？

「ち、ちよつと落ち着いてくださいー！！」

「何よ勝手な事ばかり言って……あんた達が才能ないっていうならこの世の殆どの人間が無能になるわよー！！」

くっ！！なんたる悲劇…いや、喜劇！この教師また暴走しやがったー！！

「ほら！お前らもボーっとしてないでなだめるのを手伝えー！！」

「は、はい！デ、デラクールさん！落ち着いてください」

「どおーどおーどおー！！」

「怖くないよー！！なんにも怖くないよー！！」

「機関長も見えてないで止めてくださいよー！！」

「ワシのようなジジイには無理じゃ。ほっほっほ」

『ほっほっほ』じゃない！！！！

なんだかんだでこの暴走教師が自我を取り戻すのに、前とは違って5分くらいかかった。

「と、取り乱したわね」

……全くだ。どうして俺だけ引っ掻かれにやなんのだー！！見ろ、左手の甲だ！

「さて、検査も終わった事だし、あなた達に問題よ。この世界の魔力保有者の平均保有属性数はどれくらいだと思う？じゃあ、アスカちゃん」

咳払いをしてから話し始めたが、今更冷静になられても俺の評価は上がらんぞ。なんてヒステリックな教師なんだ。

「えっとおゝ8くらいですか？」

「ちがうわ。じゃあアキラちゃん」

「…………じゃあ6！」

「それもちがう。カエデちゃんは？」

「9、位でしょうか」

「残念はずれ。正解は3よ」

「…………3？」

すくなっ。

「クロノ君、今あなたは羽を全部消したわ。つまりあなたは全属性保有者ということ。じゃああなたのほかに全属性保有者ってどれくらいいると思う？このスピラの中で」

【スピラ】 ってのはこの世界の事だっけ。っつーかこの国の人口すら知らない俺にそんなもんわかるわけないだろう。どう考えても無茶振りだっつーの。勘で良いか、勘で。

「1000人くらいじゃないんですか？」

「違う」

うん、そりゃそうだ。別に違ってても悔しくも何とも無い。

「この世界の歴史上、全属性保持者なんていうでたらめな存在は一度たりとも存在した事が無いわ」

「…………え？じゃあ俺って超すごいじゃん！え、何？教科書とかに載っちゃう感じ！？」

「教科書なんてもんじゃないわ。恐らく、この事実が知れ渡ればあらゆる魔術書に名前が載るわよ。これで私が取り乱した理由がわかったでしょ？」

…………おいおい、マジかよ、それ。

ふと左を見ると、三人がめっちゃキラキラした目で俺のほうを見ていおり、とても気持ちがいい。

「クロノ君、あなたに言っておく事があるわ」

真剣な表情で告げるデラクール女史を見て、俺も心持ち気を引き締める。

「あなたの属性の事はあまり迂闊に他人に教えないほうがいいわ」「どうしてですか？」

「属性っていうのは先天的なものだから、後からどれだけ努力しても他の属性を身に付ける事ができないの。だからあなたのその才能は他の人にとって見れば嫉妬の対象になるから、十分に気をつけてね」

……嫉妬の対象、ね。ま、そんな事だろうと思ったけどさ、まさか俺なんかが他人から嫉妬される瞬間が来るとは思わなかったな。こんな『よくわからん世界』に連れてこられた神様からのお詫びってか？

「それに：同じ事がアスカちゃんたちにも言えるわ」

「どうしてですか？確かに私達の保有属性数も平均を超えてますが、そこまで大きい差ではないと思うんですけど」

楓の疑問はもっともだ。平均が3、楓達は……残ってた羽が7枚らしいから、最初に貰った数から差し引けば保有数は5。確かに平均よりは上だけどそこまで妬まれるようなものじゃないはずだ。

「そう、数ではあまり替わらないわ。でも問題は数じゃないわ、種類なの」

種類？

「いい？一口に属性と言ってもその中は『低位魔術属性』・『中位魔術属性』・『高位魔術属性』という三段階に階級が分かれているのよ。攻撃力や危険度、そして希少度でね。とはいっても、攻撃力や危険度なんかは結局術者の能力次第だからこの区分はほとんど

希少度で決まっているようなものね。便宜上のものよ」

「つまり、私達の属性はいくつかが高位ということですか？」

「そのとおりよ。今から詳しい説明するから」

あーなんかもうめんどくせえなあ。俺はどうせ全部使えるんだし、適当に流しとけばいいか。

「ちゃんと聴いてね、クロノ君」

「はいしません」

チツ……伊達に教師やってないらしいな。

「まずは『低位魔術属性』からね。低位の属性は【火】【水】【風】【地】よ。さっきも言ったけど、低位とはいっても別に本当に低位なわけではないわよ。対応する羽の色は順に『赤』『水色』『黄緑』『茶色』。自分がその羽の色をもっていなければ、あなたはその属性が使えるわ」

デラクール女史の話を聴いてあすか達は自分が持っている羽を眺め始めた。俺には必要ない行動であり、よってちよつと寂しい。

「『中位魔術属性』は【雷】【草】【氷】【癒し】よ。対応色は『紫』『緑』『青』『薄橙色』。大体数人に一人くらいはコレのうちのどれかを持っているわ」

うすだいだい
薄橙色って……んだよ、肌色のことかよ解りづらい。あれ？人種差別的な問題で呼び方が変わったんだっけ？

ってかどうでもいいけど『中位魔術属性』って早口言葉っぽいな。ちゅういまじゅつぞくせいちゅういまじゅちゅっ………よし。

「問題は『高位魔術属性』よ。コレは殆どの人が持っていない属性で、この属性保持者は殆どが身分の高い仕事に就職したり研究者になったりするわね。割合としては一学年約200〜300人の中に5人居ればいいほうよ。当然全くない学年もあったりするわ。属性は【召喚】【重力】【光】【闇】、対応色は『薄紫』『紺』『

白』『黒』よ」

これまた強そうな感じだな。さすが高位。伊達に偉そうな名前をしてないね。

「じゃあアスカちゃん、あなたが使える属性を教えてください。」

「は、はい。えっと、無いのが黄緑色と水色と青と……肌色と薄紫色だから：【風】と【水】と……【氷】と【癒し】と【召喚】です」

肌色って言っちゃったよ。

「そうね、ありがとう。次はアキラちゃんね」

「えっと、黄緑と赤と紫と緑と黒だから、【風】と【火】と【雷】と【草】と【闇】、かな」

「カエデちゃんは？」

「無くなった羽の色は茶色、水色、緑色、薄橙色、紺色です。使える属性は【地】、【水】、【草】、【癒し】、【重力】ですね」

三人の属性を聞き終えるとデラクール女史は『ほらね？』と言わんばかりに俺達を一瞥し、大きな溜息をついた。

「……これでわかったでしょ？私は何故驚いていたか」

なるほど。属性平均数を上回り、なおかつその中に高位が入っていたからか。それなら確かに驚くだろう。

しかもその相手が、自分がたまたま拾ってきた『記憶喪失だ』なんて怪しいことを言ってるやつら4人ともなんだからな。

「あ、あと自分の属性を知られるって事はその人の戦力がわかるってことだから、普通は誰も好き好んでは教えないわね。気をつけなさい」

「……おっと、そろそろ時間じゃな。デラクール先生」

壁にかかっている時計を見て機関長はデラクール女史に声をかけた。ここに来るときに時間を確認したわけじゃなかったが、機関長の言葉から察するに何時の間にか結構な時間が経っていたようだ。時の流れは速い。『光陰矢のごとし』ってやつだ。

「あら、もうですか？わかりました。四人とも行くわよ。では失礼します、機関長」

「ウム」

俺達も機関長に声をかけて（今度は俺もちゃんと言った）部屋を出、来た時よりも早く歩き出したデラクール女史について行く。ここに来る時よりも人が増え、よってその時には無かった好奇の視線を感じながら、やたら^{わしそ}厳かな廊下を歩く。

「何処行くんだ？」

「……あなたねえ、今朝からずっと思っていたんだけど、一応今日からは私はあなた達の先生なのよ？敬えとは言わないけどもう少し丁寧な言葉遣いは出来ないの？」

「残念ながら出来ない」

俺はまだからかわれた事を根に持っているからな。一時のテンションに身を任せると確かにその瞬間は楽しいが、その後が怖いってことを思い知れ。

「……もういいわ、それで」

「あの、それで今から行くのは私達の教室ですか？」

「そうよ」

「おんなじクラスになればいいねえ」

「心配しなくても同じクラスよ。それに私が担任。とはいってもすぐに変わるけれど」

「どうゆうこと？」

「その辺りは同じクラスの友達にでも教えてもらうといいわ」

……簡単に友達が出来たら苦労しないんだよチクショウ！俺はこの三人とは違うんだよ！

「クロノ君、どうかしたの？」

「……なんでも」

はあ………どうせアレだろ、なんか良くわからんけど自己紹介とかすんだろ。ホントにやだ。ただでさえ人前に出るのが嫌いなのに何が楽しくてみんなの前で挨拶なんかせにゃならんのだ。

「そういやデラクル女史」

「……そんな呼ばれ方をしたのは初めてね」

「1クラスは何人で構成されているのだろうか」

「だいたい40人くらいよ」

——40人。40人もの人間の前で『翔 玄野です♪よろしく☆』なんて言える訳が無い。いや、例え何人でもそんなテンションで言うつもりは無いけれども。

それにあれだ、俺のほかにいるのが美少女三人とか不味いんじゃない？前の学校の時の二の舞じゃん。まあこの世界の美的感覚が俺らのトコと変わらなかったらの話だけど。

ああああ………めっちゃ鬱だ。

目の前では、あすか、晃、楓が俺の気も知らないで『緊張しつつも若干楽しみ』みたいな表情でキャッキヤと会話している。少しだけでいいからその度胸と愛嬌を分けてほしい。俺にはどちらも不足しているのだから。

トモダアチィ!!

『たまには別視点もいいんじゃないかな　　く???く』

学校に来て、教室に着いて、荷物を置いて、友人に話しかけたり、授業の予習を始めたたりしながらも、各々が思い思いの行動で時間を過ごして教師を待っている。

まだオレ達が入学してから数週間しか経っていないが、それでも既に派閥のようなものができているようだ。上辺だけの会話だけでも気の合うヤツラだったり、将来のことを考えて貴族に取り入ったり……ま、よくわかんねえけど。

机の上に頬杖をついてぼーっとしていると“束の間の”担任が扉を開いて入ってきた。いつもより少し遅めの時間だ。立ち歩いていた数人の生徒が慌てて自分の席につくのをボンヤリと眺めながら、オレは教師の言葉に耳を少し傾けた。

「今日は転入生が来ます。それも4人よ」

……転入生、ねえ。入学してからまだ全然経ってねえのに、んなこと言われても全く興味がでない。つーか入学が遅れた、の間違いじゃねえのか？

オレの周りにいるヤツラも似たようなことを考えているのか、少しざわついてはいるがそれも落ち着いたものだ。結局のところ、派閥が構成されてきたにせよ、いくらなんでも教師が喋ってる最中にコソコソと会話を始める仲でもないのだろう。

あゝあ、つまんね。

折角来る必要もねえ“学校”なんてのに来たってのになんも面白くない。こんなだったら家で修行してたほうがまだマシだったの。どうせ卒業したらうちの道場を継ぐだけだし。

まだ16歳だったのに親父が道場を継いだのなんだのとうるせえから、ワザワザ寮にまで入って入学したってのによ。周りのやつらは自分の魔力だの属性だの家柄だのをぐちぐち言っているだけ。実力でオレとタメ張れるヤツなんて、見たところ全くいねえし。

いや、せめて話が合うだけでもかまわないんだよな。『密接戦闘時における的確な足運びの方法』とか『効率的に敵の内臓を破壊する拳の握りかた』でもなんでも。……あー、でもその辺はオレにも少しは責任があるか。小さい頃から修行に明け暮れてたし。

「————よ。いいわね？それじゃあ入ってきて」

欠伸をしながら考えてるうちに教師からの話が終わっていたようだ。多分『静かにしなさい』とか、転入生の性別とかを言ってたんだろうな。やべえ、全然聞いてなかった。どうやら転入生とご対面のようだし、一応オレも見とかないとな。

まず初めに入ってきたのはやたら小さい茶髪の女だ。色々突っ込みどころがある見た目をしているが、とりあえず同い年には見えないほどに身長が低い。オレの鳩尾ぐらみぞおちいまでしかねえぞ、あれ。

次に入ってきたのは男……じゃねえな、男っぽい女だ。危ねえ危ねえ、制服じゃなかったら絶対に間違えてたぜ。……つーか、黒い髪なんて初めて見たな。世の中には変な色の頭もあったもんだ。

三番目に入ってきたのは……お、また女か。つーかなんかあいつの歩き方とかって貴族みてえだな。もし当たってたら絶対に仲良くなれそうにない。しかもやっぱり変な色の頭してやがるし。

教室に入ってきた計3人の女は、それぞれ異なる雰囲気を漂わせながら黒板の前に立った。

最初のチビは緊張感を前面に思いっきり押し出しているのが分かるし、二人目の男女も割と綺麗に隠してはいるが、その無表情さが逆におかしい。ただ黒い長い髪のあいつだけはどうも感情が読み取れねえな。……チツ、ますます貴族っぽくて、ヤな感じだ。

……あ？　そういうやなんで三人しかいないんだ？　さっき四人って言うってたよな？

「……あ、あら？　クロノ君？　早く入って来なさい」

「……………はい」

扉の向こうから聞こえた声は男のもので、しかもその声からは何かを心底嫌がっている感情がありえないほど簡単に読み取ることができた。何を嫌がっているのかはわからんが。

そして入ってきたのは変な頭をした男。全身全霊で気だるさを発している。

ガタイは…悪くはないがあんまりよくもねえな。背もあんま高くねえし見た感じ筋肉の量も平均くらい、か。

ってかあの眼。なんだあれ、超目つきが悪い。ってか、三白眼。しかも、『俺に近づくな』的なオーラを出してる気がする。……いや、単にどんよりしてるだけ、か？　よくわかんねえな。

よくわかんねえけど……ただ、まあ…

「ほらほら、騒がないの。特に男子！静かにしなさい！……ったく、じゃあ軽い自己紹介してもらおうわ。はい、どうぞ」

「は、はじめまして！日……【あすか 日向】って言います！よろしくおねがいますっ！」

「【晃 北条】です。よろしくおねがいます！」

「【楓 秋月】です。みなさん、よろしくおねがいます」

なんというか、

「……………【翔 玄野】です。…よろしく」

コイツ、絶対え面白えよ。

理由？んなもん決まってるだろ。雰囲気だ雰囲気。

「これでいいわね。じゃああなたたちは一番後ろの空いてる席に座ってくれるかしら」

「はい」

「はい」

「はい」

「……………」

「クロノ君、返事は？」

「……………了解」

一番後ろ？それはオレだろ。……………あ？いつのまにオレの後ろに机が四つ用意されてんだ？昨日までは無かったよな…っっ…事は今朝か。つまりオレが気付かなかっただけか。

ってことはなんだ、あいつらはオレの後ろか。——お、しかもあのクロノとかいうのがオレのすぐ後ろじゃん！好都合だぜ。

「じゃあコレで話は終わりよ。私がまたこの教室に来るまで、ト

イレ以外でココから出ない事。それじゃ」

会話を締めくくり、教師が教室を出て行ったとたんに騒がしくなる教室。クラス中の視線はオレの方向……ってか俺の後ろの転入生に注がれている。

勿論ただ注がれているわけじゃない。誰だったのかはわからないが、一人が席を立つと、それを切欠に他のヤツラも軒並み立ち上がった。転入生のほうへ近づいていく。

それにしても、オレ以外にもアイツに興味を持ったやつが多いなあおい。女子は多分3人の女子に話しかけに行くんだろうが、男共は当然アイツだろう。なんだよ…案外見る目があるじゃねえか。しようがねえな、この騒ぎが落ち着くまでオレは止めとくか。

……あん？後ろからアイツの声が聞こえねえな。ってかこの会話から察するに話し掛けられてるのはあの女3人ばかりじゃねえかよ。オレとしてはありがたいんだが、なんでアイツには誰も話しかけないんだ？

後ろを振り向くと、そこには人、人、人。転入生をクラス全員で取り囲み、それが原因で転入生が全く見えない状態だった。

——ただ一箇所を除いて。

オレの真後ろの席に居た人間だけは全く別だった。机に突っ伏し、

両腕を枕代わりにして目と耳と鼻をふさぎ、そのまま微動だにしない。

そしてクラスの連中はそんなコイツには全く会話を振らず、そればかりが無理やりにも背を向けて他の3人に話しかけている。それが多少無理な体勢であっても、だ。

ってかよ、話しかけないあいつらもそうだが、何でコイツは転入してきていきなりこんな状態になっているのかねえ。やつぱり面白いわ、コイツ。

「なあ、転入生」

少しの間の後、転入生はゆっくりと顔を上げる。

………おおお怖え。この目つきで上目遣いはヤベエ。どう見ても何人か殺ってるだろコイツ。

いや、でもどうせオレのほうが強いだろうし、喧嘩になっても勝てるだろうから別にビビる事はねえな。よし!!

「お前、確か【ショウクロノ】だよな。オレは【カイルードラゴニス】ってんだ。よろしくな!」

……いやさ、もうわかってたことなんだよ。最初から全部こうなる事は。もう予想ってレベルを超えて。なんつーの？この俺だけ全然話し掛けられない感じ。

俺の左方と後方と左後方はなんかもうすごいよ。デラクール女史が出てっからすぐに人が来たもん。男女問わず。

あいつらは沢山人がきて質問をめっちゃ浴びせられて、ちょっと困り気味っぽいけど俺は知らん。姿は見えないけどあいつらの視線を背中に感じる…ような気がするが、知らないったら知らないんだ。だから俺を見るな！俺は何もしてやれないし何もする気ないし！別に僻みじゃないぞ！！くそ！！不貞寝してやる！！入学早々いきなり眠ってやる！！

……ああ、目をつぶったならあいつらが受けてる質問が良く聞こえてきた…。

——ぬぁーにが『彼氏いるの？』だ。殺すぞコラァ！！

——『君達知り合い同士？』じゃない！俺もだ！！

「なあ、転入生」

……ん？……う、なんだこの金髪……超イケメンだ。なんつーかその、絵本の中の王子が出てきたような爽やかさだ。

「お前、確か【ショウクロノ】だよな。オレは【カイルドラゴニス】ってんだ。よろしくな！」

………え？

……今まさかこの金髪イケメン、俺に話し掛けた？ いや絶対そうだよ。俺の名前呼んだし。

え、うそ、やだ、ちよっと……超嬉しいんだけど！ 初対面のやつに話し掛けられるなんて小学生の時以来だ！……いやいや、変なヤンキーに絡まれたことはあったけど。

「あれ？ 違ったか？」

どうやら俺が中々返事を返さないから訝しく思ったらしい。まずい、まずいぞ！ せっかく話しかけてくれたんだからすぐに返さないと！
「いや、合ってる合ってる。えっと、【カイルⅡドラゴニス】だっけ？」

「おう！ カイルって呼んでくれ！」

なんだコイツ、なれなれしいな……なんて俺は思わん！！ むしろウェルカムだ！！ でもちよっと質問。

「なんでドラゴニスじゃダメなんだよ。カッコイイじゃん」

なんか強そうな名前だよ。火くらいなら吹けるんじゃないか？

「カッコイイかどうかは知らんが、オレは家名のほうで呼ばれんの慣れてねえんだよ。家が道場で、親父が師範やってっからさ。ほとんど名前の方でしか呼ばれねえんだ」

道場で家名だと親父さんと被っちゃうからか。まあこいつはどう見ても男だし、俺も名前で呼ぶのには抵抗無いからいいか。………流石にまた晃みたいいな事にはならないよな？

「わかった、じゃあカイルね。カイル、カイル…良い名前だな。

俺のことは好きなように呼んでくれい」

「お、そうか？ ありがとな。えっと、ショウ！」

そういつてカイルはニカツと白い歯を俺に見せつけた。

……感動だ。

こんなに早く同性の友達（まだ知り合いレベル？んなもん関係ないね）が出来たのは生まれて初めてだ。うっ……涙が出そうだ。

しかしそんな俺を気にもせずこの男——カイルは俺に話し掛けてくる。

「しっかしさ、お前ってよく怖がられねえ？」

「うん？まあね。初対面のやつには殆ど話し掛けられたこと無いな」

「だよなあ。だってめっちゃ怖えもんその目」

「うるさいな……。ってか自分で言うのもなんだけどさ、良く俺に話し掛けられたな」

「あー……まあな」

ん？なんか齒切れが悪いな。

「それよりさ、お前の名前とか髪の色とかって珍しいな。もしかして他の転入生とも知り合いか？」

「おお、一応あいつらは俺の友達だ。髪の色は……そうだな、俺達が住んでるところじゃ一般的な色だよ」

「どこそこ」

「いやお前それは言えないよ」

「なんでだよ。別にいいだろう？」

「なんとなく、いやだ！」

会ったばかりの奴に『異世界です☆』なんて言えるかつ！いやいや、会ってすぐじゃなくてもダメだけど。

「ま、いつか。それよりさ、あいつらの事も紹介してくれよ。オレ友達少ないから増やしてえんだ」

……ああ？

少ない？その顔で？なにそれ嫌味？…いや、逆に考えればその顔だから友達少ないのか？彼女のほうが多いとか。殺すぞ！！

……………おっと、取り乱したようだ。

「別にそれは構わないんだけどさ、今は無理だろ」

「いーや、大丈夫だね。お前が睨みながら一言『どけこのカスどもが！！』って言や全員のなくなんだろ」

「やだよ！入学早々俺を問題児にするつもりか！」

俺が多少声を荒げるとほぼ同時に扉が開く音がした。どうやらどこかに行っていたデラクール女史が戻ってきたらしい。カイルという名のイケメンはこちらに向けた身体はそのままに、首だけを動かして扉の方を見た。そしてその横顔もやたらカッコいい。ずるい。

「はい、じゃあこれから第三運動場で機関長のありがたあいお言葉を聴きに行くから、各自自分の椅子を持って廊下に並びなさい」
椅子をもって移動とか小学生か。

「あーあ、たりいな。どうせ無駄話だぜ」

「そうかもしれないけどさ、機関長は結構話短いよ」

「そうなん？」

「ああ。今朝学校が始まる前に会ったからわかるんだ。自分の名前なんか覚えなくていいとか言ってた」

「なんだそれ、最高だな！」

俺達は笑い合いながら立ち上がって椅子を持つ。その雰囲気はもうすでに友達。クク：このペースならば友達百人も夢幻ゆめまぼろしではないな！後ろでは今まで周りに集まっていた生徒達が椅子を取りに戻るため、各自の席に戻った事で質問攻めから開放された三人の姿があった。当然、疲労しているっぽい。俺は左に居た、すでにヘトヘト感が漂

っているあすかに話し掛けてみた。

「おう、やっと開放されたみたいだな」

「……ふう。すごく疲れたよう。翔ちゃんが羨ましいなあ」

「けっ、お前は誰からも話し掛けられない人間の寂しさがわかないからそんな事が言えるんだよ」

「あははっ、そうだね」

「……いや、だからって朗らかに肯定しないで欲しい。

「はあ、でもホントに疲れたよ」

「ええ。少しは遠慮していただきたいですね」

む、晃と楓か。

「それはアレだろ。ニンキモノの宿命だろ」

「ただ物珍しいだけだと思いますけど」

違うよ。可愛い良いからだよ。もしおまえ等がブサイクだったら寄ってきたのは半分以下だったはずだもの。

「おい、ショウ」

ん？なんでコイツは俺をこんな咎めるような目で……ああ、忘れてた。紹介するんだったな。

「そうそう、こいつは今知り合ったばかりの【カイルⅡドラゴニス】君だ。諸事情によって家名で呼ばれるのが嫌なんだってさ。家が道場でどうやら友達が少ないらしい。上辺だけでも仲良くしてやってくれ」

「なんだその紹介文！しかも上辺だけでもってなんだ！」

『そんなん決まってるだろ！あんまり仲良くなって欲しくないからだ！』

とは言えないから『冗談だよ』と無難に返しておく。

「……まあいい。そんなわけでオレのことはカイルって呼んでくれ。えっと、ヒナタにアキヅキにホウジョウ、であってるよな？」

「うん、よろしく！」

「よろしくね」

「よろしくお願いします」

俺個人としてはヨロシクして欲しくない。あー…つってもカイルって俺に最初に話し掛けてきたよな。つまりこいつらには興味ないってこと？ってことはもしかしてコイツ、男が好…いや、深く考えないでおこう。非常に危険だ。

「それにしてもさ、カイル君よく翔ちゃんに話し掛けられたね。

普通は怖くて話し掛けられないのに」

うっさい！！

「ああ、まあ確かに怖かったけどな。それよりも好奇心のほうが勝ったんだよ」

「好奇心ってどうゆうことかな？」

「んー言葉では言い表し辛えんだけどさ、なんつーかこう、面白そうっていうか…。あ！そうそう、オレんちって道場やってっからなんとなく『こいつ強えな』ってのが判るんだよ」

「…今の『あ！』というのが少し気になるんですけど…。でもまあカイルさんもそう思ったんですか？」

「え、本当に強いのか？予想、当たってた？」

「…今の『え、』というのが少し気になるんですけど…。ええ、間違いない強いと思いますよ」

止めてくれ楓、あすか、晃、そんな目で俺を見るのは。止めてくれカイル、そんな戦闘狂みたいな目で俺を見るのは。だいたい俺は強くないぞ！格闘技なんて習った事ない！

ってか四人とももう普通に会話してるのね。羨ましいよ、その社交性。

「ねえ、そろそろ行こうよ。遅れちゃうよ？」

「あーそうだな。大丈夫かあすか。ちゃんと椅子持てる？なんならカイルに持ってもらおうか？」

「もてるよ椅子くらい！」

「なんでオレの名前が出てくんだよ！普通は『俺がもってやろうか？』だろ！」

「ボク、椅子をもって移動なんて久しぶりだなあ。楓は最後にやったのっていつ？」

「私は小学生の頃ですね。晃さんは？」

「んーボクは中学だね」

おのおの適当なことを話しながら、同じく椅子を持って歩いている人の流れに乗って第三運動場とやらに向かう。

しかし、椅子とか持つのダルイな。そもそも足が四本もあって持ちづらいし。

……待てよ、この世界は魔術とかがあるんだからそれを使わない手はないな。よし、ちよっくらやってみよう。椅子がフワフワと浮いてるところを想像してっと。

——————パチンツ

「おー浮いた浮いた。これで楽チンだ」

どうやら浮いただけでなく俺が歩けばきちんとして来てみたいだ。やっぱ魔術とか超便利。

「お？なんだシヨウ、お前ももう魔術使えたのか」

そういやまだ学校始まってから少ししか経ってないんだよな。魔術はあんまり習ってないんだっけ。

「何？『も』ってことはカイルも出来んの？」

「当たり前だろ？オレんちは道場だったろうが」

そう言うとかイルは俺と同様に指を鳴らして椅子を浮かす。カイルの言葉から推測するに、『この世界』の道場ってのは魔術も使うらしい。

「あー翔ちゃんとカイル君だけ魔術を使うなんてずるいよお」

「別にあすかもやればいいだろ？」

「やりかたわかんないもん…」

「まったく、昨日風を起こしたろうが…」

「適当にさ、椅子が浮いてるところを想像すりゃいいんじゃないかね？」

「あーそっか」

『かぜよ!』といってあすかも椅子を浮かす。どうでもいいけど椅子の向きが逆さまだぞ。どうして足が天井を向くように浮かしたんだよ。

「ねえ翔、ボク達にも教えてよ」

「はあ？別に教えることなんか無いって。確か晃はあすかと一緒に『風』が使えたら？あすかと同じようにやればいいんだよ」

「んー、わかった」

『風よ!』と言って晃も椅子を浮かす。なんとなくあすかのほうが晃に比べて発音がアレな気がする。ちなみに向きは俺達と同じように足が下を向いている。

あすかと晃がはしゃいでいるのを見ると、何故か楓が小声で話し掛けてきた。楓のことだからパパッとやっちゃうと思ったんだけど。

「あのー、私は『風』持ってないんですけど…」

あ、そうか。デラクール女史に属性のことはなるべく伏せとけって言われてたから小声なのか。

「そうだな、じゃあ楓は『重力』で浮かせばいいじゃん」

「でもそんな局所的な重力変動を起こす光景なんて想像できませんよ」

「俺だってそんな無理だよ。わかんないけどさ、取り敢えず椅子が浮くトコを思い浮かべればいいんじゃないかね？俺だってなんの属性使って椅子浮かしてんのかわかんないし」

「…やってみます」

軽く目をつぶって楓が指を鳴らす。するとなんてこともなく椅子が浮いた。全然心配する必要もなかったね。

「なんだなんだ、お前らみんな魔術使えんのかよ。ちえ、折角俺

だけ楽しようと思ったのによ」

「まあね。仮にカイルだけが魔術使えたんだとしたら椅子は全部カイルに持ってもらってたから関係ないけどさ」

「……なあシヨウ、オレとお前ってまだ初めて話してから10分経ってないよな？」

「だから？」

「なんでそんなラフな……いや、やっぱなんでもね」

よくわからん奴だな。もしかして思春期特有の変な行動か？

「今翔さんはなんの属性を使っているのかは判らないんですよね？」

ん、楓か。

「ああ。物を浮かす事が出来るのは『風』と『重力』のどっちかだろうから、それなんだろうけど」

「ということはつまり、魔術を使用する際には属性を意識しなくてもいいと言うことでしょか？」

「そう……だな。多分そうゆうことだろ。走る時だって『この筋肉を使って身体を動かそう』とか意識してるわけじゃないし」

つまり風を起こそうと思えば『風』が勝手に使われるし、火をおこそうと思えば勝手に『火』が使われるし、今みたいに物を浮かそうと思えば勝手に『風』か『重力』かが使われるって事だろう、多分。属性を意識しなくて言い分とても楽だ。

「シヨウとアキヅキ、置いてくぞ！」

「はい！翔さん、急ぎましょう！」

「りょーかい」

そんなこんなで俺達は第三運動場に向かって両足を働かせた。

「あーつつかれた!!」

俺達は機関長の話、そしてその50倍の時間をかけたであろう副機関長の話を聴き終え、教室に戻ってきていた。折角機関長の話は20秒弱で終わったのにあのハゲのせいで台無しだ。

ちなみに行く時も帰ってくるときも俺達5人は注目されていた。それはそうだ、椅子を手で持たずに浮かせていたのは見る限りじゃ俺達だけだったからね。それと俺以外の奴らの容姿的にも。あと何故か教師達に咎められるような目で見られてたような気がしたし、もしかしたらまだ魔術は使っちゃいけなかったのかもしれないな。

「それにしてもさ、副機関長が言ってた『来週の行事』って何の事だ？デラクール女史もそんな事言ってた気がするけど」

「あ、それボクも気になった」

「なんだお前ら、四人ともなんも知らねえのか？」

どうやら俺と晃だけではなく、楓とあすかも不思議そうな顔をしていたらしい。ま、急な転入だったんだし、俺達が知らないのも道理だよな。

「来週はクラス分けの試合があるんだよ、一年生の。そんでその試合での戦績とか、属性とかその他もろもろを考慮してクラスを改めて決めるんだとよ」

「試合？ってかクラス分け？今のクラスのまま一年やってくんじやないの？」

「はあ？そんなわけねえだろ。強いやつと弱いやつが同じ教育を受けたって意味ねえじゃん」

……そうか、この世界はそういう考え方なのか。

「でもその教育方法では学力や実力に差が出来てしまうのではないだろうか？」

「なんか問題あんのか？」

「例えば、いじめの対象になるとか…」

「はっ、それが現実なんだよ。だからこそ魔力や属性が少ないやつは学をつけて学者になったりするし、頭の悪いやつは強くなって兵隊にでもなるんだよ。第一いじめられたくねえなら学校なんか来んなつーの。世の中には魔術が使えないから学校に来れないやつだって居るんだし」

「は、はあ、そうですか」

うん、正論だ。全く持って正しいと思う。この世界のあり方にちよつと感動してしまった。女三人は何処となく納得してないみたいだけど。

「でもさあ、まだ殆どの人が魔術なんて使えないんでしょ？一週間なんてちよつとの時間の授業で勝負になんの？」

「ああ。いくらまだ授業が始まってないつつても才能のあるやつは大体もう魔術くらい使えてるもんなんだよ、オレやお前らみてえにな」

……才能、か。確かに才能だけならあるのかも知れないけどさあ、俺はともかくあいつらは喧嘩すらまともにした事無いと思う。晃はちよつと俺の喧嘩に巻き込んだ事あるけど。

「今現在魔術を使えねえやつらはこの一週間でその使い方を学ぶ。使えるやつは1対1の勝負に慣れる。慣れてる奴は更に自分に磨きをかける。それがこの一週間の目標だろうな」

「でもボクは他人に痛い思いをさせたくないよ。殴ったり、魔術で攻撃したりさあ」

「私事です」

「暴力はいけないよお」

だろうな、やっぱり。

「そうか？じゃあ棄権すりゃいいさ。大会への参加自体は強制だが棄権も認められてるからな。ただ…」

「ただ何だ？」

「シヨウはちゃんと戦うんだろ？」

「まあね」

俺は別にキチンとした大会とかでだったら他人を傷つけるのに躊躇ないし。いや、むしろただの喧嘩でも躊躇なんてないし。降りかかる火の粉は払わねばなるまい。

「ってことはだ、オレとショウは勝ち抜くぞ。当然オレは小さい頃から訓練してっから結構強えし、見た感じショウも強い：っぽい。つまり、オレ達は多分一番上のクラスになるはずだ。だがお前らは棄権するとしたら……」

カイルの言葉を聞いて三人がはっとした。ってかカイル、俺を買いかぶりすぎじゃない？

「お前らはショウと同じクラスにはなれないぞ。むしろ正反対の最下位クラスだ」

「やるよ!!」 「やる!!」 「やります!!」

同時に三人が傍に居た俺がビックリしちゃうくらいの声で叫んだ。

「絶対にボクも戦って勝つよ!!」

「私も一番上のクラスになる!!」

「対戦相手なんて粉微塵にしちやいます!!」

なんかひとり気合の入った表情で怖い事言ってるんだけど。

「ボソボソ（おい、カイル）」

「なんだよ」

「ボソボソ（何でお前あいつらを炊きつけるような事をしたんだよ）」

「あいつらも強そうだからだ。現時点で魔術を使ってたしな」

くっ!! コイツ……やはり戦闘狂か!?

「あとさ、その大会の優勝者は常識の範囲内でなんでもお願いを叶えてくれるんだってよ」

ん、どうゆうこと?

「つつても学校に関する事だけだけだな」

「なんだつまらん。じゃあ『金をよこせ』ってのは無理か」

「そんなもん頼むなよ」

「うるさい、俺達はいま貧乏なんだよ！」

異世界人舐めんな！実家があるお前とは違うんだよ！なあーにが『実家が道場だ』だ。俺だって友達の姉の先輩の父親が政治家さ！

「カイルさんは何か考えているんですか？」

「いや、なんも。特に何かしてもらいたいわけでもねえし」

「ふーん、夢の無いやつだ」

「金をよこせて言うやつよりはマシだと思うがよ」

「ウルサイダメレ」

——と、デラクール女史が戻ってきたようだ。どうやら彼女も副機関長の長話にはウンザリしたらしく疲労感が見え隠れしている。そして入室と同時に好き勝手に喋っていた俺達を含むクラスメイト達は各自、自分の席に戻った。

「えーっと特に連絡事項はなし、だから今日はココまでね」

……え、授業ないの？超ラッキーじゃん！！

「あ、そうそう。【アキラⅡホウジョウ】、【アスカⅡヒナタ】、【カイルⅡドラゴニス】、【カエデⅡアキヅキ】、【ショウⅡクロノ】の5名はこの後私についてきて頂戴。はい、じゃあみんな帰っていいわよ」

………え？

クラスメイトから名前を呼ばれた俺達への視線がおくられてくる。左を見るとあすかも不思議そうな表情だ。

「ほら五人とも、行くわよ」

デラクール女史の声で俺は立ち上がりながらカイルに訊いてみる。

「おい、お前何かやったの？」

「なんもやってねえよ。お前らこそなんかあるんじゃないか？」

「：思い当たる節はないけど」

でも俺達は転入生だし、もしかしたらお話かなんかがあるのかもしれない。この学校における教育目標とかなんとか。……うわ、想像するだけでもめんどうだ。

そんな感じで色んな事を考えながら、俺はもう何度目か判らないほど体験したデラクール女史の後ろについて歩くという行為に励んだ。励みたくも無いのに。

シラナイヒイトオ!!

「ここよ。入ってくれる？」

教室を出て俺達は5分ほど歩きつづけ、最終的にある一室にたどり着いた。言うなれば視聴覚室みたいな感じか。たまたま先頭にいた俺が扉を開けると中には一人、金髪の女生徒が椅子に座りこちらを見つめていた。いや、睨みつけているみたいだ。当然理由はわからない。

「適当な場所に座って。ココに呼んだ理由を説明するから」

適当に、と言う事だったので特に何も考えずに前のほうに座った。他のみんなも俺の近くに陣取る。因みに金髪の女生徒も前の方の席に座ってはいたが、俺達は廊下側で金髪は窓側だ。今もこちらを睨み続けているように思える。実際はただ見られているだけなのかもしれないけど。

っていうかあの金髪……超美人じゃね？

座っている状態でもわかるスタイルの良さ、綺麗に通った鼻筋、肌荒れなんて物を知らないような肌。綺麗な金髪の先を軽く巻いた髪型はそのキツ目の相貌に良く似合っている。カイルの髪も金色だけどやはりそこは男女の違いというもので、おそらくカイルとは違って女生徒の髪は丁寧に手入れされているのだろう。そして彼女が美人であるからこそ睨みに更に迫力があつた。

しっかしさ、なんかこの世界って美形が多くない？この教室に居るやつ全員レベル高いじゃん。なんだこれ、まるで美形のバーゲンセールだな。ちょっと、いやかなり疎外感。

あいや、でもクラスメイト達の顔面偏差値は普通だったし…こいつらが特殊なだけか。この特異生命体どもが。魔術の才能なんてどうでもいいからその才能を俺にも超越せ！

「さてと、じゃあお話ししましょう」

あーそーいやこの教師もまあ美人だった。

「あなた達を呼んだのは、今日行われていた魔力測定でちゃんとした魔力量が測れなかったからよ。だから今からもう一度検査するわ」

……魔力測定？

「そんなものいつやったの？」

敬語を使わずに話す俺をカイルは『なんで？』的な目で見てくるが気にしないでおかし、止めもしないでおく。俺があの人にタメ語なのは魂に誓った契約があるからさ。

「椅子よ」

「椅子？」

「そう、椅子。今日あなた達がずっと座っていた椅子は魔力量を測定する機能が付与された物なの。細かい事は省くけどその結果が教員にはわかるようになっていて、あなた達だけが測定がこの時間までに終わらなかったのよ。魔力量が多すぎてね」

それ以降も続いた長くて面倒な話を要約するとこうだ。

今日の話の最中のみ、あの椅子には座っている人間の魔力を吸い続けるような仕掛けがなされていたらしい。つまりそんなところに何十分も座っていれば魔力がどんどんなくなり、結果として話が終わった後の生徒達は魔力切れでヘトヘト。だからこそ今日はもう授業がなかったわけだが、教師達の目からみて全然疲れた様子がなかった人間だけここに呼び寄せた。それが俺達と、あの名も知らぬ女生徒らしい。

わざわざそんなことをする学校側にも驚きだが、それよりもすごい

のはデラクール女史を含む教師陣だろう。魔力切れの疲労と副機関長の話による疲労を見分けなきやいけないんだからな。もしかしたらそれにも何らかのカラクリがあるのかもしれないけどさ。

っーか、だからわざわざ椅子を持って移動させるなんて面倒な事をさせたのか。ずっと座ってなきや計測できないもん。あのハゲの話が長かったのも計測のためだったのかもしれない。

「では、何故魔力量の測定なんてことをされたのですか？」

俺の考察が終わった頃、金髪の女子が無駄に丁寧な口調でデラクール女史に尋ねた。なんっーか、なんとなく聞いててかったるい喋り方だ。俺には素であんな口調を使うことは出来ないな。

「クラス分けをするのに必要な情報だからよ。クラス分けは来週の試合だけで決まるわけじゃないから」

「わかりました。では、これからどのようにワタクシ達の魔力を測るのですか？」

今度は『ワタクシ』と来たもんだ。……ん、右横を見るとカイルが女生徒の方をじっと見ている。

「……一目ぼれか？」

「なっバカ！ちげえよ！気に入わねーやつだと思ってただけだ！ふーん。微妙にうろたえてる気がするんだけど、まあなんでもいいや。」

「流石に測定し終わるまで椅子に座ってろってわけには行かないから、今度はコレをつかうわ」

そう言ってデラクール女史が机の下から取り出したのは一着の真っ白なマント。着ていたとしたら街中でも校内でも滅茶苦茶目立つだろう。

「コレは装着した人の魔力量に応じて自動防壁を張るマントよ。そしてその防壁は装着者の魔力量に応じて白から黒に濃くなるの。それを利用して今からあなた達の魔力量を計測します」

ふむ、いまいち判らん。ってか一気に魔力を数値化できる機械と

かないのかな。

……ないんだろうな、あったら最初からやってるだろうし。出来ないからこそ椅子に座ってその疲労度で、とかあんな防壁の色なんて面倒であいまいな感じで計測するしかないんだろう。

「じゃあ名前順でやるから。最初は【アキラⅡハウジョウ】さんね。こちらに来て」

「あ、は、はい」

急に名前を呼ばれて驚きつつも、晃はデラクール女史に近づいていた。そういや『こっちの世界』の名前順だと晃が最初なのか。

「じゃあ今着けているマントを脱いでコレを着て」

「はい、判りました」

晃は黒いマントを脱いでその代わりに白いマントをつける。

正直、そんなに似合っていない。いや、晃に白が似合わないとかじゃなくて白のシャツの上に黒の上着、そしてその上に白のマントという組み合わせは誰が着てもおかしいんじゃないかな。しかもあの白マント、なんか無駄に仰々しい刺繍が入ってるし。

「さてと、じゃあ私から2〜3mくらい離れてくれるかしら？ ……そう、そのあたりでいいわ。行くわよ」

そういうとデラクール女史はおもむろにポケットから石を取り出すと、晃にそれを軽く投げつけた。石の速度自体はゆっくりとしたものだったが、距離が近い上に突然の行動だったので晃はよけるという行動が全く出来ていなかった。

そして石と晃の間が30cm位にまで近づいた時、いきなり灰色の壁が空間に出現し、カツツという音を立てて石を弾いた。そして石が床に落ちた後その壁はあたかも幻覚だったかのようにフツと消える。

「うん、灰色ね。なるほどなるほど」

「な、なるほどじゃありませんよ！ いきなり物を投げないで下さ

い！」

「いきなりじゃないわよ。ちゃんと『行くわよ』って言ったじゃない」

「そんなものじゃわかりませんよ！」

「まあまあ、そんなに怒らないで頂戴。はい、もうマントを付け替えて席に戻っていいわよ」

「まったく……」

ブツブツ言いながら晃が戻ってきた。その気持ちはよく分かるが、これから同じ事をされるであろう俺達にとっては何をされるのかが分かってよかったな。

「せんせー、どうやってたらそんなに魔力量がわかるんスカー？」
カイルがいかにもおちゃらけた男子学生、というような口調でデラクール女史に尋ねる。でもカイルの言うとおり、色が白から黒に変わるってのもただグレーの防壁を見せられただけで魔力量が測定できるとは思えないしな。

「これはある一定量以上の魔力量保有者が防壁を展開しない限り真っ白な壁が現れるのよ。つまり、アキラちゃんは『ある一定量』以上。そしてその『ある一定以上』の魔力量保有者は、魔力量だけでクラス分けしたとしたら確実に『S』よ。正直な話、今やっているのはあなた達の魔力量が『S』に相応しいかどうかを見極めるために行っているようなものね」

————『S』、つまり一番いいって事だろう。でもあれか、実際は属性とか来週の試合の結果とかが考慮されるわけだからそう簡単には『S』にはなれないんだろうな。まあ、既に俺達は神様のお陰で保有属性だけで言えば『S』なんだらうけど。

あ、晃はもう保有量もか。

「はい、じゃあ次は【アスカ・ヒナタ】さん。前にきて」

「はい」

晃の次はあすかが呼ばれ、先ほどと同様にマントを取り替えてからデラクール女史から離れる。そして石を投げつけられる。やはり先ほどと同様にあすかの前にも壁が現れ、石を弾くと消えた。

「アスカちゃんも灰色ね。見た感じアキラちゃんのほうが濃かったかしら」

デラクール女史の評価に、悔しそうな感情を顔に浮かばせつつあすかも戻ってきた。晃を睨んでいる様だが、全くそうは見えないのがあすかのあすかたる所以^{ゆえん}である。

「うう、わたしのほうが晃ちゃんよりも薄かったって…」

「でも殆どボクのと変わらなかったよ」

まあ、確かに。アレは殆ど変わらなかったな。

「じゃあ次、えーと、【エリカ||リクト||ノルトライン||ヴェストファールン】さん」

「ハイ」

今度は窓際の子金髪女生徒の番らしい。単なる二文字の返答にもどことなく優雅さが伺える、様な気がしないでもない。

立ち上がった女生徒は優越感に浸っているような嘲笑をこちらに向けたが、『けったいな名前だなぁ』とボーっと考えている俺を見るとその表情を一変させ、再びこちらをキッと睨みつけてきた。

……これは一体どういうことだ。俺は何時あの女生徒の恨みを買ってしまったんだろう。今後の人生の為にも考えておく必要があるんじゃないか？

俺がそんなことを考えている間にエリカなんたらは優雅にデラクール女史に歩み寄り、手馴れた様子でマントを付け替えた。途中女生徒はさっきの嘲笑が全く含まれていない（っぽい）視線で俺をチラッと見たような気がしたが、多分俺の気のせいだろう。今回もなんもしていないな。

……いや、だが待て。それを言ったら最初から俺は何もしていない

いぞ。となるとあいつが俺のことを睨んでいるのは全く別の意味があるのでは……？

「はい、じゃあ離れて。行くわよ」

ま、んなことはどうでもいいっか。

再三デラクール女史が石を投げると、あすかや晃の時よりも若干、しかし明らかに濃いと判る灰色の壁が出現、石を弾いて消滅した。つまりコレの意味するところはあのエリカなんたらのほうがあすかや晃よりも保有魔力量が多いっつーことだ。へえ……良くわかんないけどとりあえずすごいな。

女生徒は今度はこちらを一瞥もせずに自分が座っていた席に再び着席し、窓の外を見始めた。……違うな、こっちを見ないようにしたんだろう。

「次、【カイルⅡドラゴニス】君」

「真っ白な壁でも出してこいよ」

「うっせ！」

俺との軽い応答の後、カイルも歩み出、マントを付け替え、少し離れ、石を投げつけられる。出現した壁の色は前のエリカなんたらと同じくらいの濃い目の灰色だった。でもカイルはその結果が不満だったらしく、なんとも言えない表情をしていた。

「何その顔？」

「オレとしてはもうチョイ濃い色だと思ったんだがな。結果はあの女と同じくらいだったろ？それがちよつと悔しくてよ」

……別にそれでも俺らの学年の他の生徒よりも沢山魔力持ってるだろ？それでいいじゃんか。充分エリートじゃないか。

「【カエデⅡアキヅキ】さん」

「はい」

なんかもうこの手順見飽きた。5回目だし。というわけで楓には悪いけど割愛させてもらおう。

結果はあすか、晃と同等で、エリカなんたらとカイルよりも白に近

かった。

——と、言う事はだ。

ここから推測するに、俺も楓とかと同じくらいの色なんじゃないの？ほら、同じ異世界人だし。だからもう帰ってもよくね？あんなところであんな派手なマントなんかつけたくないんだよコッチは。……ちよつと目で訴えてみようかな。

——ジッ

「はい、じゃあ最後ね。【ショウクロノ】君……ってなによその目は。わ、私を脅したってこのマントはあげないわよ！」

ちげーよ！！脅した覚えなんてサラサラねーよ！！
ってかやんなきゃダメか、やっぱり。

俺はゆっくりと立ち上がり、さっきの応答の反撃を食らわせてくるカイルを軽くスルーしてデラクール女史のもとへ赴いた。するとマントを俺に渡しながらデラクール女史は俺の耳元で、

「私は一番あなたに期待しているのよ」

とウインク付きでおっしゃった。ぶっちゃけ期待されても困るんだよなあ……。

俺はこっそりと溜息をつき、とりあえず今つけているマントを外し………ん？マントが外れない。

——あれ？くそ、なんだこれ。変な感じに引っかかってやがる！

「何をやってるのよ。ほら、見せてみなさい」

「いやだ！自分でやるんだ！」

ヒトリ・デ・デキルモン！！

「あんまり無理矢理やると留め具が壊れるわよ」

「む、それは不味い。さであればお願い致す」

デラクール女史は『ホントにどこの国の人間よ』と溜息をつきつつも俺のマントを外しにかかる。

「まったく……あら？どうなってるのこれ………えいや！」

ブチッ

「ウヲイツッ！！今変な音がしたぞ！！」

「や、やあねえ。気のせいよ気のせい。ほら、さっさとこっちの白いほうをつけなさい」

左手をサッと背中の方に廻しながら、つまり左手にある『何か』を隠しながら右手で渡された白いマントを着用する。どうやら留め具が取れたわけじゃないらしいけど………まあいいや。たとえ壊れても服なんて着られれば。

うおお、どハデ……。

前を見ればみんなが俺の方を見てクスクス笑っている。そんなに似合っていないのか？……いや、ちがうな。多分さっきの俺と先生のやり取りだ。そうに違いない………というかそう思いたい。いくら色の組み合わせが悪いとはいえ、俺はみんなに笑われるほど白い服が似合わないなんて思いたくない。

——あ、エリカなんたらは笑ってねーや。まるでアリの屍骸でも見るかのような視線だ。こわい。

「はーい、じゃあ行くわよ」

「ち、ちょっと待って！何で俺の石だけこぶし大なわけ！？」

「手ごろなのがこれしかなかったのよ」

「全然手ごろじゃないし！てか拾って来い！俺以外に投げたあのちっちゃい石を拾って来い！」

「いやよ」

くっっ！決して俺は将来こんな自分勝手な大人にはならないぞ！！

「っていうかこの程度の石をぶつけられた位じゃそのマントで防壁は壊れないわよ。たとえそれが真っ白な壁でもね」

そうなの？じゃあちよつと安心。

「じゃあ3・2・1・0で投げるから」

「よし来い」

「さぁーん、にいーい！！」 ビュン！！！！

なんだとっ！！？

石に何らかの魔術を付与したのか、それとも『身体強化』とかいうので単純に投げる力を強くしたのかは判らんけど、あのダメ大人教師は俺に相当な速度で石を投げつけた。しかも約束された0ではなく2で。俺はなすすべもなくその場に立ちすくむ。

————ガキィイン

しかしその石も俺の目の前に突如として現れた壁に行く手を阻まれ、ガツツという音を立ててその場に落下した。

そしてその壁の色は、見紛う事なき完璧なまでの——黒だった。漆黒だった。

「……ふう、おい教師！なんで2の時に投げるんだよ！！」

俺は怒った。騙されたので怒った。壁の色が黒に近づけば近づくほど保有魔力量が多いという事実を思い出す前に怒った。しかし、俺の話し掛けた相手は俺達と出会ってからすでにかなりの回数見せたであろうその呆然とした表情で俺を見ている。

動きが止まっていたのもつかの間、今度はすぐ横の机の上にあった分厚い本やらペンやらを手に取りおもむろに俺に投げつける。正直、投げられた瞬間はビビったけどその本も俺に当たることなく、再び目の前に現れた黒い壁が俺の身を守った。

どうでもいいけど壁が現れた瞬間って向こう側が見えないのな。この壁超不便。

「……なによその色は」

「あん？色？」

搾り出された感のあるダメ大人の声を聞いてようやく俺は事実に関付く。

……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？？やっただじゃん俺！！超すごい！！

「おいカイル、俺の勝ちだな！」

別に勝負してたわけじゃないけど。

しかし、カイルは何も返してはくれなかった。ただただ俺を見ていた。それはそれは間抜けな顔だった。でも元がイケメンなので悔しい事に絵になっている。

ふと目を横に移すとあのエリカなんたらも同じような顔をしていた。絵になっているのも同じだ。

因みに残りの三人もボーっとはしていたが、それはあれ、金髪二人のものとはちょっと違っている。期末試験前にがんばって勉強したのにも関わらず真ん中ぐらいの順位だったやつが学年トップを見る感情から嫉妬を抜いたようなものだ。自分でもどう表現したらいいか良くわからない。

「あの、もう脱いでも良い？」

「え？え、ええ」

この人『え』しか言ってないよ。……よし、今度はうまく外れた。

「先生、俺のマントとってくれませんか？そこにあるから」

「え、ええ。はい」

「どーも」

未だに微妙な放心状態のデラクール女史を置いていそいそと席へ戻る。そして俺が席につくと流石にその頃にはあの教師も復帰していたらしい。大きな大きな咳払いをしてから俺達を見渡した。

「…………ふう。さてと、一応コレで終わりよ。何か質問は？」
ない。

「じゃあいいわね。ハイさようなら。気をつけて帰りなさい。――――あ、忘れてたわ」

俺達を置いてさっさと教室を出ようとしていたデラクール女史は、扉を開けたと思ったらすぐに引き返してきた。顔だけを扉から出している。

「カイル君とエリカちゃんにお願いがあったのよ。聞いてくれる？」

「おう」

「ええ」

どうやら二人とも元通りっぽい。

「あなたたちって確か入寮生でしょ？クロノ君達も今日から寮に入ることになってるのよ。だから寮までの案内とか決まり事とか、色々教えてあげて欲しいのよ。お願いできるかしら？」

「ああ、いっすよ」

一方の金髪は申し出を軽く引き受けてくれたが、もう一方の金髪は「…………どうしてワタクシのですか？他にも入寮生はおりますでしょう？」

と、すぐには引き受けてはくれなかった。でも

「うーん、多分この時間だともう他の生徒は殆ど帰っちゃってると思うし、私がやろうにも色々と忙しくて出来ないのよ。ね？だからお願い！」

「…………わかりましたわ」

ってな感じで結局は了解してくれた。多分アイツは根はいいやつなんだろう。…………なんか睨んでくるんだけどさ。

「じゃあ今度こそ解散ね。それじゃ！」

やっぱりあの大人は一番に教室を出て行った。教師としてそれはどうなんだろう。鍵とかはいいのだろうか。

「よし…おいカイル、俺達も帰るぞ。我に道案内をせい」

「なんでそんな偉そうなんだよ」

「決まってるだろ、俺のほうが壁が黒かったからだ。つまり俺は、実家が道場のお前よりすごいんだ」

「ぐつつ、うるせえ！お前がおかしいんだよ！！なんだっつーんだよあの魔力量は！！」

「そんなもんお前…知らないよ」

俺がそう言ったのにも関わらず未だにブツブツ言ってるカイルは置いといて、取り敢えず他のやつらにも声をかけよう。

「おーい、あすか楓晃ー帰るぞー」

『うん』だの『はい』だの『はい』だのと言葉を返してはくれたけど、三人ともあの女生徒の方をチラチラと見ている。

……つと、そういやあのエリカなんたらとも一緒に帰ってくれなかった。……でもなんとなくこっちからは話し掛け辛い。俺人見知り激しいし、あっちはあっちで俺を敵視してくるしさあ。

このままあっちから話し掛けてくれないかなあ。————無理か。

あすか達にでも頼もうかなあ。————いや、みんなあの容姿に萎縮されている（多分）。

カイルは——論外。まだブツブツ言ってる。

……仕方ない。俺が適当に何とかするしかない。取り敢えず近寄って話し掛けてみる。

「あー…あんたも一緒に帰ってくれるんだろ？俺達のためにわざわざ悪いな」

「……別にいいですわ、コレくらい」

意思の疎通に成功。無視されるのでは、と危惧してはいたがなんとかうまくいったらしい。

「そうか。じゃあ早く行こう。あんたも早く帰りたいだろ？」

「ワタクシのことを『アンタ』なんて呼ばないで下さる？」

ん？

「ワタクシには【エリカⅡリクトⅡノルトラインⅡヴェストファールレン】という歴とした名前がありますの」

……長くてめんどくせ。そんなに一気に言わなくてもいいだろうに。

だがしかし！俺にとっては長かろうが短かろうが名前を覚えるこのなど造作も無い！！

……機関長の場合は『覚えなくてもいい』って言われたから覚えてないだけだ本当だ。

「悪かった。じゃあ早く行こう、エリカⅡリクトⅡノルトラインⅡヴェストファールレン」

ほうらね！

「え？いやちよつと……」

口に出すとよくよく長い名前だと実感するね。でも確かに話す相手のことはちゃんと呼ばなきゃいけないな。うん、礼儀だし。

「おーいみんな、この人は【エリカⅡリクトⅡノルトラインⅡヴェストファールレン】さんだ。ちゃんと挨拶しろよ」

あ、なんか今の俺お父さんっぽい。

「あ、うん。わたしは【あすか 日向】っていいいます。よろしくね？えっと、エリカちゃんって呼んでもいい？」

「え？ええ、構いませんが……」

流石あすか。よくあれだけフランクに誰とでもすぐに話せるよなあ。

「ボクは【晃 北条】。よろしく。ボクもエリカって呼ばせてもらうね？」

「初めまして、【楓 秋月】です。至らない点も沢山あると思いますが、今後とも、よろしくおねがいします」

晃はもう呼び捨てだし、楓には天女のように綺麗なお辞儀だ。初対面の相手（特に異性）とはぶっきらぼうにしか話せない俺とは大違いだね。

「ワ、ワタクシの方こそよろしくお願い致しますわ。ワタクシもあなた達のことは名前でお呼びしても宜しくて？」

「なんかもう仲良くなってる感じ。あすかなんて無邪気に『いいよお』とか言ってるし。」

「おいショウ、オレも自己紹介した方がいいのか？」

「まあ、流れる的にはな」

「うーん、なんかいけすかねえんだよなあ女」

「つか俺もしなきゃだめかな、やっぱ。」

「オレは【カイルⅡドラゴニス】。ヨロシク」

「もっと優しく言えばいいのに。もったいないイケメンだな。」

「……コチラこそよろしくお願い致しますわね」

「ほら、なんかこっちなんか硬い感じになってるし。」

「——さて、俺もできる限り愛想良く行こうと思う。見た目が怖いらしいし。」

「俺は【翔 玄野】と申します。適当に呼んでくれて結構だからよろしく、エリカⅡリクトⅡノルトラインⅡヴェストファーレンさん。俺はともかくあの3人とは仲良くしてやってくれな。みんな良いやつだからさ」

「……ちよつとあなた」

「よし、今度こそ帰ろう。ほら、エリカⅡリクトⅡノルトラインⅡヴェストファーレンさんも突っ立ってないで」

「ってあれ？また睨まれてる？」

「確かに名前で呼べとは言いましたが、フルネームで呼べとは言ってませんわよ」

「え？いやだってさ……」

「どれが家名かすら判らんし。」

「他の呼び方をしたほうが良い？」

「当然ですわ」

「そう言っ腰に手を当て胸を張るエリカⅡリクトⅡノルトラインⅡ

ヴェストファーレン。……………手のひらサイズか。平均くらいかな？

「……………あなた何か失礼な事を考えていらして？」

「いえ、なんでもありません」

なんて鋭いやつだ。それにしても呼び方、ねえ……………ま、なんでもいいか。

「じゃあ、俺はリクトって呼ぶよ」

「どうしてそこを取るんですのよ！」

何で叫ぶんだよ。意味わからん！

「だって何処が家名かわかんないんだからしょうがないだろ？」
するとエリカⅡリクトⅡノルトラインⅡヴェストファーレンは不思議なものを見るような目で俺の方を見た。

「あなた、ワタクシを知らないんですの！？エリカⅡリクトⅡノルトラインⅡヴェストファーレンを！いえ、例え知らないとしても想像すらつきませんの！？」

なんだコイツ、芸能人か何かなのか？

「悪いけど知らないし想像もつかない。ってかあの三人も君の事を知らないと思うよ」

カイルのほうはわからないけどさ。

目の前の金髪はまるで信じられないとでも言うかのように俺達を見比べ、溜息を軽くつくと俺を見据えて口を開いた。

「判りましたわ……………知らないのならば教えてあげましょう。ワタクシはエリカⅡリクトⅡノルトラインⅡヴェストファーレン。2000年以上の歴史を持ち、国から『リクト』の称号を拝命した名家ですよ！」

「へえゝすごいな」

だからあんなに長い名前なのか。テストの時とか名前書くのが面倒だろうなあ……………つか国から名前を貰うとか普通にすごいんじゃない？

「……………」

「……………」

「……え？それだけですの？」

「どゆこと？」

「いえあの、もう少し驚くとか……」

「いやいや、十分に驚いたけど」

「……………」

「……………」

俺達がなんとなく微妙な空気になっていると、横からカイルが口を挟んだ。ありがたいことに挟んでくれた。

「おいシヨウ、こいつ貴族だぞ。なんとも思わねえのか？」

「貴族？」

「その軽薄そうな男、ワタクシをこいつ呼ばわりするなんて無礼ですわよ！」

「んだと！オレの何処が軽薄だ！」

———貴族、貴族か。そういう階級が存在するのは知ってたけど始めて見た。……それも当然か、日本には階級概念なんてなかったし。言われてみればコイツの口調って何処となく偉そうだし。

「エリカちゃんって貴族なんだあ！スゴイね！！」

「貴族の友達がいるってかっこいいよねえ」

「あ、でもそのような方を気安くお名前と呼んではいけないのでは？」

緊張してるのは楓だけであすかと晃はけっこう楽観的だ。

「……………いえ、ワタクシは家名で呼ばれるのは少々苦手ですわ、エリカと呼んでもらっても結構ですわ」

何故かこの貴族は不安げな楓の言葉に、数瞬前の表情を一変させてそう答えた。じゃああんなに堂々と自分の名前を言わなくてもいいじゃないか。

けどなんか……表情の变え方に無理矢理感があつたような気がするな…………。

「わかった。オレもエリカって呼んでやる」

「あなたにはまだ許していませんわよ」

いつのまにかカイルもあのリクトを名前のほうで呼んでいた。ってか『リクト』ってカッコイイな。男の名前みたいだけどさ。リクト、リクト……うん、やっぱカッコいい。漫画の主人公みたいだ。

「ま、なんでもいいけど早く帰ろーよ。カイルとリクト、お前等が居なきゃ俺達は学校を出た瞬間に路頭に迷うことになるんだぞ」

「おーわかったわかった」

「だからあなたは何故ワタクシをリクトと呼びますのよ!」

「なんだよ、何処を取ろうとどこもお前の名前の一部だろ? 家名で呼ばれるのが嫌なら称号とやらで呼ぶしかないじゃんか」

「フンッ、ならあなたもワタクシのことを特別に名前で呼ぶことを許可してあげますわ」

「いやいい」

「なんですってえ! ? あなた、コレがどれだけ名誉な事かわからないんですの! ? 」

「んだよもうるせーな! 」

「ふっふっふ、ダメだよエリカちゃん。翔ちゃんは女の子のことは名前で呼ばないんだよーだ」

「そうですね。私達も苦労して呼んでもらえるようになったんですから、そう簡単には行きませんよ」

「ボクは簡単だったけどねえ」

そう言った晃に詰め寄るあすかと楓は置いていて俺はカイルに声をかけ、とりあえずさっさと一緒に部屋を出ようとしたが、

「ま、待ちなさい! 」

とリクトに呼び止められた。

「てかこの教室どのへんの位置にあるんだよ。学校から出ることにすら俺には出来んぞ」

――ガラガラ

でも命令口調だったので待たずに扉を開けて廊下に出た。

「ち、ちょっとあなた！待ちなさいといっているでしょう！」
やっぱり待たなかった。

「おい、待たなくていいのか？」

「ふん、いくら少し会話したとはいえ初対面の同い年から命令される筋合いは無いね」

「ハッハッハ、ちげえねえ」

晃達も教室から出てきたらしくまだ俺の方を睨んでいるであろうリクトと会話しながら俺達についてきた。俺としてはリクトにこれ以上ギャーギャー言われるのも嫌だったのでこうして男と女で別れるのは好都合だ。取り敢えずはこの陣形のまま学校を出たいものである、まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4769w/>

サヨナラWORLD

2011年12月20日16時27分発行